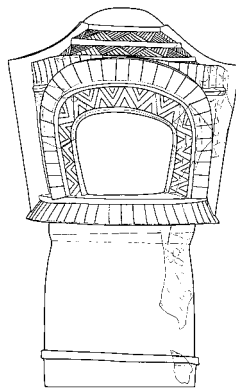


奈良県桜井市

纏向遺跡発掘調査報告書

————— 巻野内坂田地区における調査報告書 —————



2007. 3. 30

桜井市教育委員会

桜井市立埋蔵文化財センター

発掘調査報告書第28集

奈良県桜井市

纏向遺跡発掘調査報告書

——— 巻野内坂田地区における調査報告 ———

2007. 3. 30

桜井市教育委員会



落ち込み 1 出土埴輪集合写真

序

私達の桜井市は大和平野の東南部に位置し、市域の約2割を占める平野部の中央には山地より流れ出る粟原川、寺川、初瀬川、巻向川等の清流を集めた大和川がほぼ東西に横断し、この大和川を挟んで南は茶臼山古墳をはじめとしてメスリ山古墳、安倍寺、上之宮遺跡、坪井・大福遺跡、北では芝遺跡、箸墓古墳、纏向遺跡など全国的にも貴重な文化遺産が数多く知られています。

桜井市ではこれらの遺跡を保護し、啓発するための事業の一つとして市内遺跡の調査・保存に力をいれておりますが、ここに報告させて頂くのは昭和59年度に桜井市教育委員会が国・県よりの補助を受けて実施した纏向遺跡坂田地区の調査報告であります。

現地調査にあたりまして指導・助言を頂いた多くの関係機関の方々、地主及び地元協力者の方々、厳寒のなか作業に従事して頂いた作業員・学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に尽力して頂いた整理員の方々に深く御礼申し上げます。

この多くの皆様の御協力のもとに成った本書が文化財の普及・啓発の一助となり、また研究者の方々の資する所となれば当委員会としても望外の喜びであります。

平成19年3月30日

桜井市教育委員会

教育長 石井和典

例 言

1. 本書は昭和59年度に桜井市教育委員会が実施した桜井市大字巻野内180番地における農業用倉庫建築に伴う纏向遺跡第42次調査の発掘調査報告書である。調査当時は年度末という調査時期の関係上、整理・報告の手当てが完全には行なわれていなかったため、今回国庫補助を受けて調査資料の再整理と報告を行ったものである。記録によると当時の調査体制は以下のとおりである。纏向遺跡の調査の中でも比較的初期の調査であり、記録を完全に確認できなかった部分もある。遺漏があれば御容赦願いたい。
2. 調査機関：桜井市教育委員会 教育長 外嶋尚春、教育次長 近藤貞次、社会教育課長 内藤新治
文化財係長 萩原儀征、主事 中岡利三、技師 清水眞一
3. 調査担当：桜井市教育委員会社会教育課文化財係長 萩原儀征
4. 調査期間：昭和60年1月16日～昭和60年3月5日
5. 調査協力者：現地調査・報告書作成を通じて以下の方々に御指導、御協力を頂いた。記して感謝いたします。(所属は現在の所属。敬称略)
石野博信(香芝市二上山博物館)、木場幸弘(高取町教育委員会)、寺沢薫・坂靖(奈良県立橿原考古学研究所)、増田啓・増田恵美子(増田文物工作隊)、萩原儀征(桜井市文化財保護審議委員)、荻谷俊介(株土舞台)、賀来孝代
6. 調査補助員：木場幸弘
7. 調査作業員：森勇、杉本増雄、山口勇、植西靖治、名賀、堀内和子、植西キヨ、藤本ミサヲ、辻和子、堀内安子、嶋岡道子、青木久子
8. 整理作業及び報告作成機関：桜井市教育委員会 教育長 石井和典、事務局長 森北好則、事務局次長 瀬川憲嗣、文化財課長 森幹雄、主幹 杉本好成、主任 橋本輝彦・松宮昌樹、技師 福辻 淳・丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・橋爪朝子
調査資料の再整理に当たっては松宮、福辻、丹羽、木場、橋爪の協力を受け橋本がこれを担当した。
なお、遺物の実測・トレースなどは主に木場、橋爪の援助を受けた。
9. 整理作業員：今回の遺物・資料整理にあたった整理員・補助員は以下の通りである。
嶋岡由美、西田千秋、大島郁美、井ノ本奈津子、北畑陽子、岩上味香、堂浦千景、更谷綾、西谷麻衣子、相場さやか
10. 本書所収の遺物写真のうち巻頭写真及び図版25～28は佐藤右文氏(アートフォト右文)の撮影によるものであり、それ以外の遺構写真は萩原が、遺物写真は橋本が撮影した。
11. 執筆者：本書の執筆にあたっては調査担当者に確認・聞き取りを行いつつ桜井市教育委員会文化財課 橋本輝彦と橋爪朝子がこれを担当した。
なお、埴輪の胎土分析については奈良県立橿原考古学研究所共同研究員 奥田尚氏に玉稿を頂いたほか、埴輪に残る赤色顔料の分析については奈良県立橿原考古学研究所 奥山誠義氏の御協力を頂いた。記して感謝致します。

12. 編集・統轄者：橋本輝彦
13. 本書で使用したレベルは都市計画図に記載された近隣道路上の任意のポイントより移動したものであり、正確な数値を示すものではない。
なお、方位はすべてクリノメーターによる磁北を示している。
14. 坂田地区出土の埴輪群と共伴土器についてはこれまでに以下の文献に紹介されているが、共伴資料として提示された土器が全く別遺構からの出土遺物であるケースや共伴資料と別遺構の遺物が混在した状態で提示されているケースがある。
これらの文献の中には桜井市において刊行された文献もあり、混乱を招いた事を御詫びするとともに、誤りについては本報告を持って訂正することとする。今後、引用にあたっては注意していただきたい。
①清水眞一『秋季特別展 磯城・磐余の夜明け—ニワトリ形埴輪の持つ意義—』（財）桜井市文化財協会1992
※この文献では共伴関係のある落ち込み1出土遺物は全く提示されておらず、全くの別遺構である溝3出土の土器が共伴資料として提示されている。
②清水眞一「鶏形埴輪についての一考察—纏向遺跡巻野内坂田地区の鶏形埴輪の持つ意義—」『橿原考古学研究所論集』第十一 創立五十五周年記念 橿原考古学研究所編 吉川弘文館1994
※この文献では共伴関係のある落ち込み1出土遺物と別遺構である溝3出土の土器が混在して提示されている。
15. 出土遺物をはじめ調査記録一切は桜井市教育委員会の管理のもと、桜井市立埋蔵文化財センターにおいて保管している。活用されたい。

目 次

序

例言

目次

第1章. 調査及び資料再整理の経緯と経過

第1節. 調査にいたる経緯と経過 (橋本) …1

第2節. 資料再整理の経緯と経過 (橋本) …2

第2章. 位置と環境

第1節. 地理的環境 (橋本) …3

第2節. 歴史的環境 (橋本) …4

(1) 桜井市域の遺跡 (橋本・豊福) …4

第3章. 発掘調査報告

第1節. はじめに (橋本) …13

第2節. 調査の方法と層序 (橋本) …13

第3節. 検出された遺構 (橋本) …16

(1) 時期不詳の遺構 16

(2) 中・近世の遺構 16

(3) 古墳時代の遺構 17

(4) 弥生時代の遺構 24

第4節. 出土遺物 (橋本) …24

(1) 埴輪 (橋爪) …24

(2) 土器 (橋本) …37

(3) その他の遺物 (橋本) …57

第4章. 分析編

第1節. 纏向遺跡坂田地区の埴輪の表面にみられる砂礫 (奥田) …95

(1) はじめに 95

(2) 砂礫の特徴 95

(3) 類型区分と砂礫採取推定地 95

(4) おわりに 96

第2節. 形象埴輪の表面にみられる赤色顔料の分析結果について (橋本) …99

第5章. まとめ

第1節. 検出された遺構 (橋本) …101

(1) 弥生時代の遺構

(2) 古墳時代の遺構

第2節. 出土遺物 (橋本) …101

- (1) 古式土師器
- (2) 鍛冶関連遺物
- (3) 埴輪群

あとがき (橋本) ...105

報告書抄録

挿 図 目 次

図 1	開発申請地位置図 (1/2,000)	1
図 2	桜井市の位置	3
図 3	桜井市の地質	3
図 4	巻野内坂田地区と周辺の遺跡 (1/25,000)	6
図 5	調査位置と周辺の小字 (1/500)	14
図 6	調査区平断面図 (1/80)	15
図 7	調査区中央部遺構平・断面図 (1/40)	17
図 8	落ち込み 1 平・断面図 (1/40)	19
図 9	鶏形埴輪実測図 1 (1/6)	25
図10	鶏形埴輪実測図 2 (1/6)	26
図11	冠帽形埴輪実測図 (1/6)	29
図12	不明形象埴輪実測図 (1/3)	30
図13	朝顔形埴輪実測図 1 (1/6)	31
図14	朝顔形埴輪実測図 2 (12~14は1/6、15~25は1/3)	32
図15	朝顔形埴輪実測図 3 (1/3)	33
図16	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図 1 (1/3)	40
図17	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図 2 (1/3)	41
図18	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図 3 (1/3)	42
図19	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図 4 (1/3)	43
図20	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図 5 (1/3)	44
図21	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図 6 (1/3、60は1/4)	45
図22	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図 7 (1/3)	46
図23	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図 8 (1/3)	47
図24	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図 9 (1/3)	48
図25	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図10 (1/3)	49
図26	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図11 (1/3)	50
図27	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図12 (1/3)	51
図28	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図13 (1/3)	52
図29	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図14 (1/3)	53

図30	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図15 (1/3)	54
図31	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図16 (1/3)	55
図32	纏向遺跡第42次調査出土土器実測図17 (1/3)	56
図33	溝3出土轆羽口実測図 (1/1)	57
図34	包含層出土石鏃実測図 (1/1)	57
図35	B区ピット内出土砥石実測図 (1/1)	58
図36	冠帽形埴輪の鱗部付け根表面にみられる赤色顔料の分析結果1	99
図37	冠帽形埴輪の基部円筒部表面にみられる赤色顔料の分析結果2	99
図38	冠帽形埴輪片実測図 (1/3)	100

写真目次

写真1	ネーミングの様子	2
写真2	遺物の抽出作業	2
写真3	接合・復元作業の様子	2
写真4	実測作業の様子	2
写真5	昭和54年撮影の纏向遺跡北半の様子 (上が北)	11
写真6	昭和54年撮影の纏向遺跡南半の様子 (上が北)	12
写真7	止まり木の接合	27
写真8	脚部の接合	27
写真9	方形刺突	34
写真10	断続凹線	34
写真11	冠帽形埴輪片	100

表目次

表1	纏向遺跡第42次調査出土埴輪観察表 (1)	59
表2	纏向遺跡第42次調査出土埴輪観察表 (2)	60
表3	纏向遺跡第42次調査出土埴輪観察表 (3)	61
表4	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (1)	62
表5	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (2)	63
表6	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (3)	64
表7	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (4)	65
表8	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (5)	66
表9	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (6)	67
表10	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (7)	68
表11	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (8)	69

表12	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (9)	70
表13	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (10)	71
表14	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (11)	72
表15	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (12)	73
表16	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (13)	74
表17	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (14)	75
表18	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (15)	76
表19	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (16)	77
表20	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (17)	78
表21	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (18)	79
表22	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (19)	80
表23	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (20)	81
表24	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (21)	82
表25	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (22)	83
表26	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (23)	84
表27	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (24)	85
表28	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (25)	86
表29	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (26)	87
表30	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (27)	88
表31	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (28)	89
表32	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (29)	90
表33	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (30)	91
表34	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (31)	92
表35	纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (32)	93
表36	纏向遺跡坂田地区出土埴輪の表面にみられる砂礫 1	97
表37	纏向遺跡坂田地区出土埴輪の表面にみられる砂礫 2	98

図 版 目 次

巻頭図版

落ち込み 1 出土埴輪集合写真

PL.1	纏向遺跡第42次調査 調査前の様子 (東より) 現代の調査地の様子 (西より)	上層遺構面完掘状況 (東より)
PL.2	纏向遺跡第42次調査 上層遺構面の調査の様子 (東より)	PL.3 纏向遺跡第42次調査 調査区東端南壁土層断面 (北より)
		土坑 2 遺物出土状況 (南より)
		PL.4 纏向遺跡第42次調査

	溝 1 土層断面の様子（北より）	PL.14 纏向遺跡第42次調査	溝 3 完掘状況（東より）
	落ち込み 2 内の粗砂堆積と切り込み面 の様子（北より）		落ち込み 1 上層遺物出土状況（東より）
PL.5 纏向遺跡第42次調査	落ち込み 1・溝 2・溝 3 の遺物 出土状況 （東より）	PL.15 纏向遺跡第42次調査	落ち込み 1 下層上面鶏形埴輪出土状況 （北より）
	溝 2 遺物出土状況（南より）		落ち込み 1 下層上面鶏形埴輪出土状況 （北東より）
PL.6 纏向遺跡第42次調査	溝 2 完掘状況と下層出土の遺物 （南より）	PL.16 纏向遺跡第42次調査	落ち込み 1 拡張区内下層上面遺物 出土状況（北より）
	溝 2 完掘状況と下層出土の遺物 （西より）		落ち込み 1 拡張区内下層上面遺物 出土状況（南より）
PL.7 纏向遺跡第42次調査	溝 2 下層遺物出土状況（西より）	PL.17 纏向遺跡第42次調査	落ち込み 1 拡張区内下層上面遺物 出土状況（北より）
	溝 3 遺物出土状況（東より）		落ち込み 1 拡張区内下層上面遺物 出土状況（南より）
PL.8 纏向遺跡第42次調査	溝 3 遺物出土状況（東より）	PL.18 纏向遺跡第42次調査	落ち込み 1 拡張区内下層上面遺物 出土状況（左が北）
	溝 3 遺物出土状況（北より）		落ち込み 1 拡張区内下層上面遺物 出土状況（東より）
PL.9 纏向遺跡第42次調査	溝 3 遺物出土状況（北東より）	PL.19 纏向遺跡第42次調査	落ち込み 1 完掘状況と西壁土層 断面の様子（東より）
	溝 3 遺物出土状況（東より）		落ち込み 1 完掘状況と拡張区南壁土層 断面の様子（北より）
PL.10 纏向遺跡第42次調査	溝 3 最下層遺物出土状況（東より）	PL.20 纏向遺跡第42次調査	拡張区南壁土層断面の様子（北より）
	溝 3 最下層遺物出土状況（北より）	PL.21 纏向遺跡第42次調査	土坑 1 上層遺物出土状況（北より）
PL.11 纏向遺跡第42次調査	溝 3 最下層遺物出土状況（東より）		土坑 1 中層遺物出土状況（北より）
	溝 3 東端埋土と切り込み部の状況 （北より）	PL.22 纏向遺跡第42次調査	土坑 1 下層遺物出土状況（北より）
PL.12 纏向遺跡第42次調査	溝 3 東半部埋土の状況（北より）		土坑 1 下層遺物出土状況（西より）
	溝 3 中央部埋土の状況（北より）		
PL.13 纏向遺跡第42次調査	溝 3 西半部埋土の状況（北より）		
	溝 3 西端埋土と切り込み面の状況 （北より）		

PL.23 纏向遺跡第42次調査	80～98溝 3 (S=1／3)
土坑 1 完掘状況 (北より)	
土坑 1 完掘状況 (北より)	
PL.24 纏向遺跡第42次調査	PL.38 纏向遺跡第42次調査
調査地完掘全景写真 (東より)	99～108溝 3 (S=1／3)
PL.25 纏向遺跡第42次調査	PL.39 纏向遺跡第42次調査
落ち込み 1 出土鶏形埴輪 (1)	109～125溝 3 (S=1／3)
PL.26 纏向遺跡第42次調査	PL.40 纏向遺跡第42次調査
落ち込み 1 出土鶏形埴輪 (2)	126～147溝 3 (S=1／3)
PL.27 纏向遺跡第42次調査	PL.41 纏向遺跡第42次調査
落ち込み 1 出土冠帽形埴輪	148～171溝 3 (S=1／3)
PL.28 纏向遺跡第42次調査	PL.42 纏向遺跡第42次調査
落ち込み 1 出土朝顔形埴輪 1	172～188溝 3 (S=1／3)
落ち込み 1 出土朝顔形埴輪 2	PL.43 纏向遺跡第42次調査
PL.29 纏向遺跡第42次調査	189～191溝 3
落ち込み 1 (S=1／3)	192～195土坑2
PL.30 纏向遺跡第42次調査	196～227落ち込み 1 上層
1～18溝 2 (S=1／3)	(S=1／3, 226のみ1／1)
PL.31 纏向遺跡第42次調査	PL.44 纏向遺跡第42次調査
19～30溝 2 (S=1／3)	228～233落ち込み 1 上層埋土内
PL.32 纏向遺跡第42次調査	45・61層
31～45溝 3 (S=1／3)	234～259落ち込み 1 上下層埋土界面
PL.33 纏向遺跡第42次調査	260～282落ち込み 1 下層埋土内
46～54溝 3 (S=1／3)	(S=1／3)
PL.34 纏向遺跡第42次調査	PL.45 纏向遺跡第42次調査
55～58溝 3 (S=1／3)	283～285 B区ピット群
PL.35 纏向遺跡第42次調査	286, 287 E区ピット 8
59～61溝 3 (S=1／3, 60のみ1／4)	288 D区ピット 10
PL.36 纏向遺跡第42次調査	289～301土坑 1 (S=1／3)
62～79溝 3 (S=1／3)	PL.46 纏向遺跡第42次調査
PL.37 纏向遺跡第42次調査	302～311土坑2
	312溝 3
	313落ち込み 1 上層
	314 B区ピット内
	(S=1／3, 312～314は1／1)

第1章 調査及び資料再整理の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯と経過

纏向遺跡坂田地区の発掘調査は桜井市大字巻野内283番地、龍見保福氏によって計画された巻野内180番地における農業用倉庫の建築に伴う発掘調査である（図1）。

なお、本事業に伴う文化財保護法第57条の2に基づく埋蔵文化財発掘届出書は昭和58年9月22日付けで提出されたもので、桜井市からは昭和58年9月26日付、桜教社第329号で進達を行い、県教育委員会からは昭和58年10月5日付けで発掘の通知を受けたものである。

届出書によると事業計画地の敷地面積は859㎡で、建築予定の建物面積は290㎡であったことから、対象地の南端に幅2m×東西21mのトレンチを設定し（図5）、昭和60年1月16日から3月5日にかけて調査を行ったものであるが、調査過程で多くの埴輪片が出土した事を受けて、一部調査区の拡張も行っており、最終的な調査面積は46.2㎡となっている。

この調査の結果、調査地周辺は当時纏向遺跡の中でも最も東南端にあたると考えられていた地域であるが、古墳時代前期の柱穴や土坑・溝などの遺構が検出されたことや、埴輪や土器などの多くの遺物が出土したことから纏向遺跡の範囲も更に東へと広がりを持つことが確認されている。（橋本）

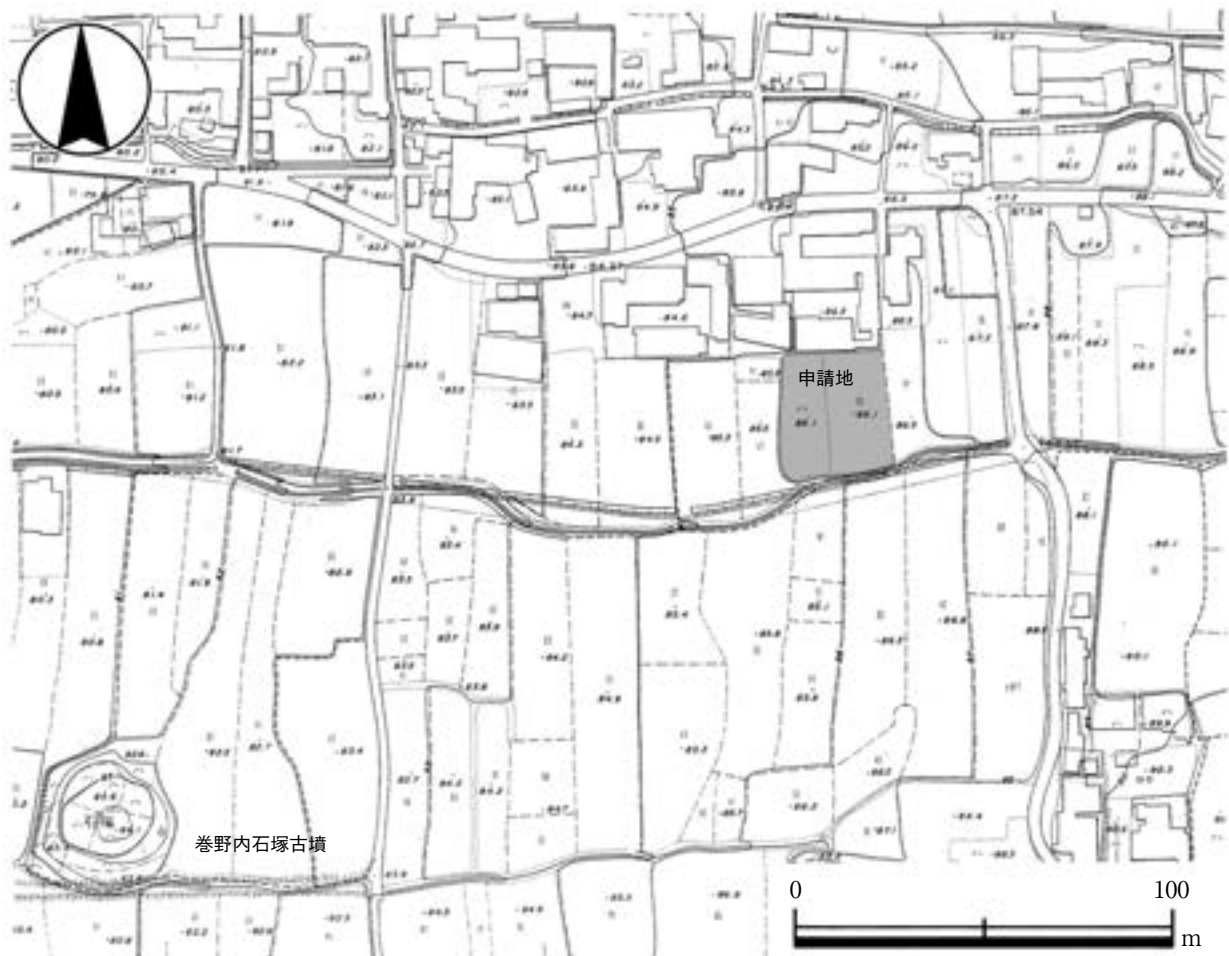


図1 開発申請地位置図（1/2,000）

第2節 資料再整理の経緯と経過

本調査で検出された遺構である溝や土坑・柱穴などは纏向遺跡の範囲や遺構の時期別の分布などの面的な広がりを考える上では重要な手掛かりと言えるものであるが、遺構としては過去の纏向遺跡の調査成果と比較しても特筆すべきものは無いのが実情である一方、出土した埴輪類については共伴した土器の年代観から布留1式期¹⁾と形象埴輪としては非常に古い段階の埴輪群であることは特に重要と判断されるものである。

これらのうち鶏形埴輪については初現期・最大級のものであることや、冠帽形埴輪についても最古級というだけではなく、近年の調査において出土している天理市黒塚古墳のU字形鉄製品や桜井市勝山古墳周濠出土のU字形木製品などとは形態的・文様の深い親縁性を持つと考えられ、首長層の埋葬儀礼の中における遺物の位置付けを考える上で特に重要な資料と考えられるものである。

しかしながら、これらの埴輪類については肝心の所属年代の根拠となる共伴した土器資料が全くの未報告であることや、埴輪類についても完全な復元作業や図化が行われないうちに応急整理段階で作成された実測図が流布している状況であったため、活用へ向けての早期の再整理が望まれていた。

このような状況から桜井市教育委員会では平成18年度の国庫補助事業の採択を受けて、出土資料の活用を目的として遺物の再整理を実施したものである。

なお、出土遺物の再整理にあたっては調査担当者である萩原と協議のもと橋本がこれを担当し、遺物については若干の未洗浄遺物の洗浄とネーミング・復元・実測作業（写真1～4）を行い、図面・写真などの記録類については再度ファイリングを実施し、今後の利用の便を図る事とした。（橋本）

【註記】

1) 寺沢薫編『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所 1986 以下、本書における土器の編年観・土師器の調整技法等はすべてこれに準ずる。



写真1 ネーミングの様子



写真2 遺物の抽出作業



写真3 接合・復元作業の様子



写真4 実測作業の様子

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

桜井市は奈良盆地の東南部とその背後に続く大和高原・宇陀山地・吉野山地の一部より構成されている（図2）。人口約62,000人、面積98.93km²の市域の約80%は山地であり、平地は北西部の20%に過ぎないが、市域のほぼ中央では春日山断層と初瀬構造谷が交差し、巻向山地塊崖・御破裂山地塊崖が盆地に面する西北斜面にはいくつもの溪谷が形成されている（図3）。

また、平地部にはこれらに源を発する初瀬川や寺川・米川・纏向川・栗原川など多くの河川が流れ、これらによって形成された扇状地の自然堤防上を主として多くの遺跡が展開している。

調査地の存在する纏向遺跡は市域北西部の標高60～90mの扇状地上に位置する。現在考えられている遺跡の規模は東西2km、南北1.5kmであり、遺跡の主要な部分は纏向川と烏田川に挟まれた地域に集中するものの、遺跡はさらに北へと大きく広がっていくものと考えられている。

さて、纏向遺跡の内部には旧河川によって形成された多くの微高地があるが、調査地である坂田地区は太田微高地の東部、標高約86m前後の下位段丘上に立地するものであり、周辺での調査事例は少ないが、纏向型前方後円墳と目される巻野内石塚古墳のほか平塚西古墳・平塚東古墳・サシコマ古墳などの時期不詳の円墳や方墳が点在している。（橋本）

【註記】

- 1) 西宮克彦「地質」『桜井市史下巻』桜井市役所 1979
- 2) 安井隆浩「奈良県纏向遺跡の立地基盤と古地形環境」『東田大塚古墳』（財）桜井市文化財協会 2006

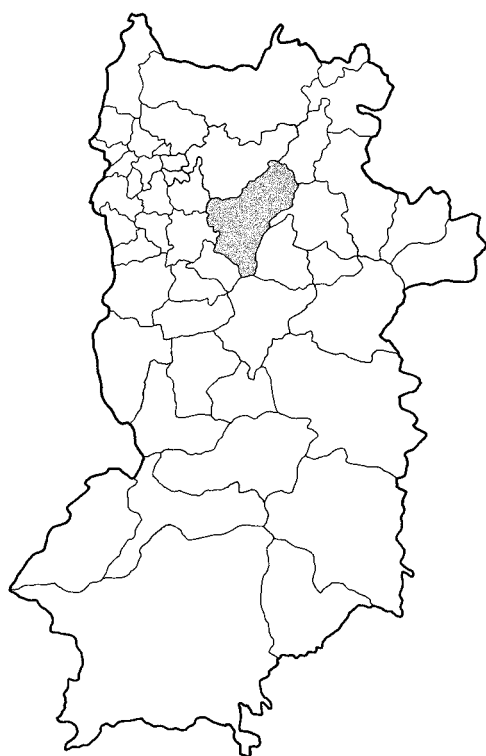


図2 桜井市の位置

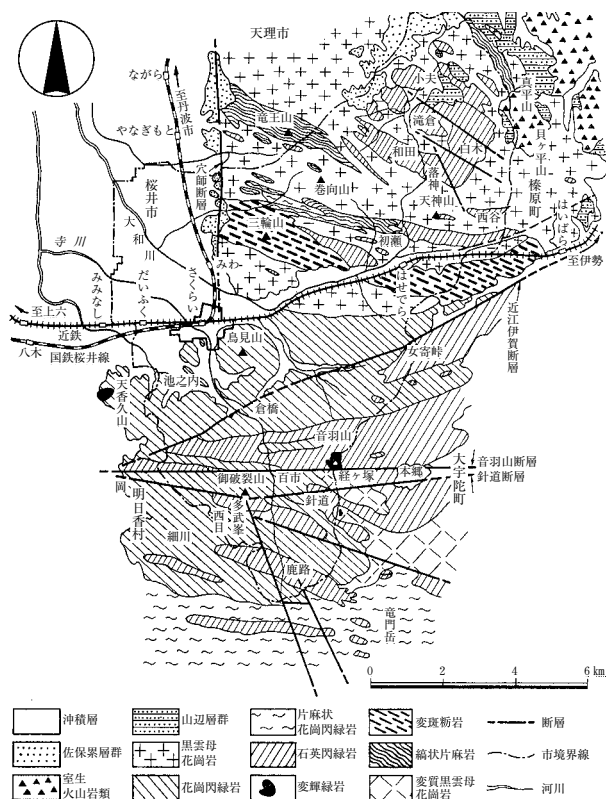


図3 桜井市の地質（註1文献より）

第2節 歴史的環境

(1) 桜井市域の遺跡

以下、市域における遺跡の状況について概観していくこととしたい(図4)。

【旧石器時代】

桜井市内の旧石器時代は幾つかの遺跡において遺物の出土が確認されている。阿部中山遺跡の調査ではナイフ形石器¹⁾が、谷遺跡²⁾(76)では翼状剥片が、芝遺跡³⁾(41)ではナイフ形石器が出土しているものの、遺構に伴うものは皆無である。

【縄文時代】

縄文時代草創期の遺物は黒崎地区⁴⁾と檜原地区⁵⁾から採集されている有舌尖頭器が一点ずつあるのみで、直接遺跡に伴うものではない。

早期の遺物は初瀬小学校の建替えに際して行われた初瀬遺跡の調査で出土している。小さな破片であるが、山形文を施した尖底土器になると考えられ⁶⁾、市内では最古の土器である。

前期になると遺跡数は少ないが、三輪遺跡⁷⁾(59)や纏向遺跡(12)内の箸中地区所在の箸中遺跡では北白川下層Ⅱ式から前期終末の大歳山式までの比較的まとまった量の遺物が出土している⁸⁻⁹⁾。

中期の遺構・遺物は少なく、芝遺跡(41)と高家遺跡があるのみである。高家遺跡では船元式系の縄文と大歳山式類似の刻み目突帯を持ち、大型竹管状円形刺突文を持つものや、船元式系の縄文を持ち、里木式系の条痕に円形刺突文を持つものに大別されている¹⁰⁾。

後期になると市内でも遺構や遺物の確認例が増加する。東新堂遺跡(61)や、上之庄遺跡(63)・纏向遺跡(12)・安倍寺遺跡・吉備遺跡(73)・栗殿遺跡(71)などでは溝や流路、土器棺墓などが検出されており、纏向遺跡では所属時期は判然としないが、後期～晩期のものと考えられる土偶の頭部¹¹⁾が出土している。

晩期の遺跡としては纏向遺跡(12)や栗殿遺跡(71)・三輪遺跡(59)・上之庄遺跡(63)・大福遺跡(66)・芝遺跡(41)・茅原遺跡(46)などで遺物の出土が確認されている。纏向遺跡では滋賀里3式期の深鉢とともに石棒片などが出土している¹²⁾。後期に比べると遺跡数は増加の傾向にあるが、遺構に伴わないか、伴っても土器棺が数基確認されている程度である。

【弥生時代】

弥生時代の遺跡では前期から後期へと一定の規模を保ちつつ継続して営まれる拠点集落として、大福遺跡(66)と芝遺跡(41)があるが、この他にも小規模な集落遺跡の確認例は多い。前期の遺物を出土する遺跡には先述した大福遺跡・芝遺跡のほかに東新堂遺跡(62)や上之庄遺跡(63)・豊前遺跡(39)・脇本遺跡・大福池遺跡(67)などがあるが、殆どが包含層や土坑などからの出土で遺物量は少なく、小規模な集落ばかりである。

中期の主要な遺跡には芝遺跡(41)・吉備遺跡(73)・大福遺跡(66)があるが、遺物のみが出土・採集されている遺跡として三輪遺跡(59)・黒田池遺跡(72)・脇本遺跡などがある。

後期の遺跡には袈裟櫛文銅鐸¹³⁾や細型銅剣¹⁴⁾などが出土している大福遺跡(66)を中心として、吉備

遺跡（73）・芝遺跡（41）、小規模ながら纏向遺跡（12）・谷遺跡（76）・横内遺跡（74）・安倍寺遺跡・能登遺跡・生田遺跡・脇本遺跡などが確認されている。

【古墳時代】

古墳時代前期初頭になると所謂纏向遺跡（12）が出現し、弥生時代の拠点集落であった大福遺跡や芝遺跡だけでなく、他の小規模集落も殆どが姿を消すようである。庄内0式期から布留0式期の段階には大福遺跡（66）や東新堂遺跡（62）・城島遺跡（78）・上之宮遺跡などで当該期の遺構や遺物の出土があるが、集落と呼べるほどの規模があるのか否かもはっきりとしない程度のものである。

纏向遺跡以外の場所で前期の遺構が顕著になるのは布留1式期以降のことであり、纏向遺跡の縮小に反比例して大福遺跡（66）や上之庄遺跡（63）・安倍寺遺跡・大西遺跡（40）・河西遺跡・忍阪遺跡などの遺跡が出現している。これらの集落はいずれもごく小規模なものであるが、上之庄遺跡（63）では布留2式期の滑石や緑色凝灰岩を使った玉造り遺構が検出されている。遺物には原石や砥石などのほかに緑色凝灰岩製管玉や滑石製勾玉・管玉・車輪石・有孔円盤・白玉などがあり、滑石製品の玉造り遺跡としては最古級のものと言えよう¹⁵⁾。前期古墳には纏向石塚古墳（4）・矢塚古墳（2）・勝山古墳（3）・ホケノ山古墳（7）・東田大塚古墳（1）・南飛塚古墳（5）・メクリ1号墳（8）・箸墓古墳（6）などで構成される纏向古墳群のほかに、初瀬川より南には桜井茶臼山古墳（80）・メスリ山古墳・池ノ内古墳群などがある。纏向遺跡に隣接する天理市域には柳本古墳群が展開し、渋谷向山古墳（16）や行燈山古墳（25）・天神山古墳（29）・櫛山古墳（24）・柳本大塚古墳（14）などがある。この古墳群には馬口山古墳や石名塚古墳（33）などの3世紀に遡る可能性が指摘されている古墳も含まれるが、基本的には纏向古墳群に後出する段階のものが殆どである。

中期にはいと泊瀬朝倉宮の候補地とされる脇本遺跡を除くと、忍阪遺跡や大西遺跡（40）・纏向遺跡（12）・茅原遺跡（46）・河西遺跡などで単発的に遺構や遺物が検出されるばかりで、集落と呼べるほどのまとまった規模を持つものは極めて少ない。なお、この時期の市域の遺跡群を特徴づけるものには三輪山の山頂から山麓一帯に広がる磐座祭祀（51・52・53・55）が挙げられよう。この祭祀は斑瀧岩の巨石を対象に土師器や須恵器などのほか、土製や滑石製の玉や形代を供献して行われるもので、5世紀から7世紀にかけて盛んに行われていたようであるが、近年の上之庄遺跡における滑石製玉造り遺跡の発見などによってその開始時期が4世紀中頃まで遡る可能性も指摘されているものである。三輪山祭祀の隆盛とともに、山麓にはこの祭祀を司掌したと考えられる大神氏の一族が居住していたようで、三輪遺跡では神撰田跡と考えられる水田遺構が検出され¹⁶⁾、茅原遺跡では掘立柱建物や井戸などが検出されている¹⁷⁾。古墳では先述した大神氏の奥津城と考えられている全長約80mの帆立貝形前方後円墳、茅原大墓古墳（44）・ツヅロ塚古墳が築かれ、後期まで連続して築かれている。この他、古式の家形石棺を持つ全長約40mの前方後円墳である兜塚古墳、銀製中空勾玉や金環の出土している慈恩寺1号墳（82）、石見型や盾形・靱形などの木製埴輪が出土した全長34.7mの帆立貝形前方後円墳・小立古墳¹⁸⁾、窮窿式石室を持つと考えられる桜井児童公園2号墳などがあるほか、鳥見山山麓古墳群（81）では径10m～20m程度の円墳や方墳が確認されているが、規模・質ともに前期段階の

所謂王墓クラスのものとはかけ離れたものとなっている。

後期になっても三輪山祭祀と結びついた磐座祭祀や古墳・集落遺跡などの大神氏関連遺跡の痕跡が多い。集落では茅原遺跡（46）が中期に引き続いて居住地として選ばれ、掘立柱建物や井戸などが確認されているし、大神神社摂社若宮社（57）の発掘調査では6世紀前半期の居館遺構が検出され、大神氏の居館ではないかと考えられている。²¹⁾また、中期に築造された茅原大墓古墳・ツヅロ塚に続く大神氏の奥津城も毘沙門塚古墳（43）・馬塚古墳・狐塚古墳（45）などがあり、築造の順序も茅原大墓古墳の五世紀前半以来、ツヅロ塚古墳の五世紀後半、毘沙門塚古墳の六世紀前半、馬塚古墳の六世紀後半、狐塚古墳の六世紀末から七世紀初頭と連綿と築かれていることが解る。墳形・内部構造などから見ると、茅原大墓古墳の築造を契機としてツヅロ塚古墳・毘沙門塚古墳と三基の前方後円墳が続いた後、弁天社古墳・馬塚古墳、そして茅原狐塚古墳と家形石棺をもつ三基の横穴式石室が続いている。²²⁾市内の他の遺跡に目を向けてみると鍛冶や玉造関連遺構が数多く確認されている谷遺跡²³⁾（76）や河西遺跡・安倍寺遺跡・上之宮遺跡・纏向遺跡（12）・脇本遺跡などの規模の小さなものが数多く散在していたようである。古墳については先述した三輪山山麓の古墳群以外に纏向遺跡内では径10m～20m前後の小規模な古墳が数多く存在していたようで、現在確認されている約20基の古墳以外にも集落内部の調査で埋没古墳が5基確認されており、さらにその数は増えるものと考えられる。また、市域の南部には高家古墳群や桜井児童公園の古墳群・鳥見山古墳群（81）・外鎌山北麓古墳群（82）・高田古墳群など数多くの群集墳が丘陵上に築かれる他、赤坂天王山古墳や越塚古墳・ムネサカ1・2号墳・谷首古墳・艸墓古墳・文殊院東古墳・文殊院西古墳の後・終末期古墳や、磚槨墳としては花山塚東古墳・花山塚西古墳・忍坂8・9号墳（82）・舞谷1～5号墳など、特色ある多くの古墳が築かれている。

★纏向遺跡坂田地区

- | | | | |
|------------------|--------------------|-------------|-------------------|
| 1. 東田大塚古墳 | 22. 遺物散布地(古墳後) | 43. 毘沙門塚古墳 | 64. 三輪松之本遺跡 |
| 2. 矢塚古墳 | 23. 遺物散布地(弥生後～古墳前) | 44. 茅原大墓古墳 | 65. 遺物散布地(古墳後～平安) |
| 3. 勝山古墳 | 24. 櫛山古墳 | 45. 狐塚古墳 | 66. 大福遺跡 |
| 4. 纏向石塚古墳 | 25. 行燈山古墳 | 46. 茅原遺跡 | 67. 大福地遺跡 |
| 5. 南飛塚古墳 | 26. 山田遺跡 | 47. 箕倉山遺跡 | 68. 戒重城跡 |
| 6. 箸墓古墳 | 27. アンド山古墳 | 48. 箕倉山城跡 | 69. 遺物散布地(古墳中～鎌倉) |
| 7. ホケノ山古墳 | 28. 南アンド山古墳 | 49. 車谷遺跡 | 70. 遺物散布地(古墳後～平安) |
| 8. メクリ1号墳 | 29. 天神山古墳 | 50. 穴師山城塞跡 | 71. 粟殿遺跡 |
| 9. イヅカ古墳 | 30. 柳本城跡 | 51. 奥津磐座 | 72. 黒田池遺跡 |
| 10. ビハクビ古墳 | 31. 遺物散布地(古墳後～平安) | 52. 中津磐座 | 73. 吉備遺跡 |
| 11. 珠城山古墳群 | 32. ノベラ古墳 | 53. 辺津磐座 | 74. 横内遺跡 |
| 12. 纏向遺跡 | 33. 石名塚古墳 | 54. 桧原遺跡 | 75. 戒重遺跡 |
| 13. 遺物散布地(弥生～古墳) | 34. 柳本遺跡 | 55. 禁足地裏磐座群 | 76. 谷遺跡 |
| 14. 柳本大塚古墳 | 35. 遺物散布地(古墳) | 56. 馬場遺跡 | 77. 谷城跡 |
| 15. 上の山古墳 | 36. 檜垣遺跡 | 57. 大神寺跡 | 78. 城島遺跡 |
| 16. 渋谷向山古墳 | 37. 遺物散布地(弥生) | 58. 新屋敷遺跡 | 79. 遺物散布地 |
| 17. 立石古墳 | 38. 遺物散布地(古墳～平安) | 59. 三輪遺跡 | 80. 茶臼山古墳 |
| 18. 立子古墳 | 39. 豊前遺跡 | 60. 大藤原京跡 | 81. 鳥見山古墳群 |
| 19. シウロウ古墳 | 40. 大西遺跡 | 61. 上之庄遺跡 | 82. 外鎌山北麓古墳群 |
| 20. ヲカタ塚古墳 | 41. 芝遺跡 | 62. 東新堂遺跡 | 83. 慈恩寺跡 |
| 21. 龍王山古墳群 | 42. 芝村陣屋跡 | 63. 上之庄遺跡 | 84. 上ッ道 |

【飛鳥時代】

この時代の主要な遺跡には上之宮遺跡や城島遺跡（78）・脇本遺跡・能登遺跡・阿部中山遺跡などの居館遺構あるいは公的な施設と考えられている遺跡群と、谷遺跡（76）・芝遺跡（41）・安倍寺遺跡などの一般的な集落、天皇家や豪族によって建立された山田寺・安倍寺・吉備池廃寺などの寺院跡が挙げられよう。この内、居館遺構については上之宮遺跡では6世紀後半から7世紀はじめにかけての園池遺構や四面庇を持った大型掘立柱建物などが検出されており、聖徳太子の「上宮」の有力な候補地と考えられている²⁶⁾し、城島遺跡の居館遺構はその所属時期から万葉集にみられる大伴氏の鳥見の田処との関連が考えられ、大伴氏ゆかりの居館遺構と想定されている²⁷⁾。また、能登遺跡の遺構は用明紀に見られる迹見赤埴の居館との説がある²⁸⁾し、脇本遺跡や阿部中山遺跡は有力層の居館、あるいは離宮的な性格が想定されている²⁹⁾。この時期には調査で検出されている遺構のほかにも欽明天皇磯城嶋金刺宮や迹見驛家・阿斗河辺館・阿斗桑市館等々文献にあらわれる宮跡や居館・公的な施設は数多く、今後の調査が期待される。寺院についても我国最初の官立寺院である百済大寺とされる吉備池廃寺や、阿倍氏の氏寺である安倍寺、蘇我倉山田石川麻呂によって建立された山田寺など著名な遺跡が多い。

【藤原京時代】

藤原京時代の桜井は上之庄遺跡（63）における東の京極道路である東十坊大路の確認により、市域の多くが大藤原京域に含まれることが判明している³⁰⁾。京域内では西之宮地区や大福地区・吉備地区などにおける調査では広い範囲で条坊道路や掘立柱建物群・井戸など遺構の確認が顕著である。また、横大路（85）や上ツ道（84）・山田道などの幹線道路が整備されるのもこの段階であろう。なお、京域より外の地域にあたる谷遺跡（76）・箕倉山遺跡（47）・忍阪遺跡・三輪遺跡（59）などにおいても掘立柱建物や井戸などの集落遺構が確認されており、京域外にも小規模な居住地が広がっていたことが解っている。

【奈良・平安時代】

市域における奈良時代の遺構の確認例は、先述した大神神社摂社若宮社（57）の調査で検出されている大神寺関連の建物遺構程度で非常に少ないが、引き続き安倍寺が存続し、青木廃寺の創建が確認されている。青木廃寺の過去に採集された出土瓦の中には「延喜六年造檀越高階茂生」と陽刻を持つ軒平瓦や「大工和仁部貞行」と陰刻をもつ平安時代の軒丸瓦なども含まれており、長らく平安時代の創建とされていたものの、出土瓦の詳細な研究により奈良時代の初めに創建されたものであり、長屋王が父高市皇子の冥福を祈って建立した寺院であるとの説が出されている³²⁾。このほか、殆どが未調査ながら高田廃寺や栗原寺・慈恩寺（83）などの寺院跡でも奈良時代の瓦や礎石などの出土が確認されており、集落遺構の貧弱さに対して寺院の多さが目に付く。また、笠や忍坂・谷・下などの山部では火葬墓やこれに伴う骨蔵器・鉄板・刀なども出土しており、平野部を見下ろす東・南の山地にこの時代の奥津城があったようで、今後類例の増加が予想される。

平安時代の遺構が検出されているのには纏向遺跡（12）と東新堂遺跡（62）がある。いずれの遺跡も掘立柱建物や井戸・土坑などがあり遺構の密度は顕著であるが、他の遺跡では芝遺跡（41）や脇本

遺跡・三輪遺跡（59）などで土器片が僅かに出土しているのみである。

【鎌倉時代】

この時期になると市域の殆どすべての地域から遺構や遺物の出土がある。市域に現存する集落の多くはこの頃に形成された環濠集落をもとに発展してきたもので、現在でも当時の環濠をとどめているものは少なくない。調査で確認される遺構には先述した環濠の他、掘立柱建物や土坑・井戸・溝・墓などがあり、およそ当時の集落の在り方を知ることができる。このほか、鎌倉から南北朝期にかけての桜井を特徴づけるものには市内各地に築かれた多くの城館や砦を挙げることができよう。これら城館や砦の機能していた14世紀前半の桜井は南北朝期の南朝と北朝の勢力圏の境界にあたっており、北より進撃してくる北軍に対し、『太平記』に有名な三輪西阿（大神主 高宮勝房と同一人物か）を中心としてその一族や周辺の多くの国人が南朝に応じ、延元二年（1337）から興国二年（1341）にかけて市内各地で激戦が繰り広げられていた様子が多くの資料から伺える³³⁾。これらの文献に残る城郭や砦には西阿の本丸となった三輪（59）・戒重城（68）の他に河合・安房・鶏・赤尾・外鎌・石原田などの支城の名が散見されるが、過去の発掘調査では吉備大臣薮遺跡³⁴⁾や、大神神社北方で確認された空湟³⁵⁾や切岸³⁶⁾、箸中地区慶運寺裏の丘陵上に於いて検出された空湟と見られるV字溝など、文献には登場しない小さな遺構の確認も相次いでおり、今後の調査によってさらなる類例の増加が見込まれる。

（橋本・豊福）

【註記】

- 1) 清水眞一『阿部丘陵遺跡群』桜井市教育委員会 1989
- 2) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1992年度発掘調査報告書2』（財）桜井市文化財協会 1994
- 3) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1991年度発掘調査報告書3』（財）桜井市文化財協会 1992
- 4) 前園実知雄ほか『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県立橿原考古学研究所編 1978
- 5) 関川尚功・佐藤良二「奈良県三輪山山麓採集の有舌尖頭器」『旧石器考古学32』旧石器談話会 1986
- 6) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書1』（財）桜井市文化財協会 1997
- 7) 樋口清之「三輪遺跡とその遺物の研究」『大和考古学』4・5 1932・1934
- 8) （財）桜井市文化財協会が1997年に調査。未報告。
- 9) 川村和正「箸中遺跡出土の縄文資料について」『大和の縄文時代—奈良盆地の狩人たちの足跡—』桜井市立埋蔵文化財センター 2000
- 10) 清水眞一編『大和の縄文時代—奈良盆地の狩人たちの足跡—』桜井市立埋蔵文化財センター 2000
- 11) 石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教育委員会 1976
- 12) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1990年度発掘調査報告書2』（財）桜井市文化財協会 1991
- 13) 萩原儀征『桜井市大福遺跡大福小学校地区発掘調査概報』桜井市教育委員会 1987
- 14) 橋本輝彦・豊福恵子「大福遺跡第13次調査の特殊遺物」『みずほ第27号』大和弥生の会 1998
- 15) 橋本輝彦「上之庄遺跡第4次発掘調査現地説明会資料」（財）桜井市文化財協会 1996
- 16) 清水眞一『芝遺跡大三轮中学校改築にともなう発掘調査報告書』桜井市教育委員会 1987
- 17) 萩原儀征『茅原丸田地区発掘調査概要』桜井市教育委員会 1990
- 18) 前園実知雄ほか『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県立橿原考古学研究所編 1978
- 19) 村上薫史『磐余遺跡群発掘調査概報Ⅰ』（財）桜井市文化財協会 2002
- 20) 網干善教「桜井市市稻荷西第3号墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報11』奈良県教育委員会 1959
- 21) 萩原儀征『茅原丸田地区発掘調査概要』桜井市教育委員会 1990
- 22) 前園実知雄「第三節 地下発掘調査」『重要文化財大神神社摂社大直禰子神社社殿修理工事報告書』奈良県教育委員会 1989

- 23) 橋本輝彦「近年の調査成果から見た三輪山祭祀・三輪氏について」『大美和91号』大神神社 1996
- 24) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1992年度発掘調査報告書 2』(財)桜井市文化財協会 1994
- 25) 橋本輝彦『桜井市平成 6 年度国庫補助事業による発掘調査報告書 2』桜井市教育委員会 1995
- 26) 清水眞一『阿部丘陵遺跡群』桜井市教育委員会 1989
- 27) 清水眞一『城島遺跡田中地区発掘調査報告書』(財)桜井市文化財協会 1992
- 28) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書 1』(財)桜井市文化財協会 1997
- 29) 清水眞一『磯城・磐余の時代—大和の古代邸宅—展』桜井市立埋蔵文化財センター 1991
- 30) 橋本輝彦「上之庄遺跡第 4 次発掘調査現地説明会資料」(財)桜井市文化財協会 1996
- 31) 田中英夫ほか『安倍寺跡環境整備事業報告—発掘調査報告書—』桜井市 1970
- 32) 大脇潔「忘れられた寺—青木廃寺と高市皇子—」『翔古論聚—久保哲三先生追悼論文集』1993
- 33) 松山宏「中世」『桜井市史上巻』桜井市役所 1979
- 34) 橋本輝彦「吉備大臣薨遺第 2 次調査報告」『桜井市平成10年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会 1999
- 35) 寺沢薫ほか「史跡・大神神社旧境内地第 6 次発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1991年度』奈良県立橿原考古学研究所 1992
- 36) (財)桜井市文化財協会による1997年の調査。未報告。



写真5 昭和54年撮影の纏向遺跡北半の様子（上が北）



写真6 昭和54年撮影の纏向遺跡南半の様子（上が北）

纏向遺跡発掘調査報告書

——巻野内坂田地区における調査報告——

本文編

第3章 発掘調査報告

第1節 はじめに

纏向遺跡第42次調査は桜井市大字巻野内180番地における農業用倉庫の建築に伴って実施したものである。建物の建築計画は859㎡の敷地内の北半部に面積290㎡の倉庫を建築するというものであったが、当時は周辺での調査事例が皆無であったことから遺跡の東への広がりが確認されていなかった事と、今回の調査に先立って行われた南側隣接道路の拡幅工事立会の際に多くの土器片が入った包含層が確認されていた事を受けて、遺跡の広がりを確認することを主な目的として調査を実施する事となったものである。

調査は建築の申請が出された建物の南側に幅2×長さ21mと東西に細長いトレンチを設定して実施しており、途中多くの埴輪片の出土があったことから一部調査区の拡張を行い昭和60年1月16日から3月5日にかけて面積46.2㎡の調査を実施している（図5・図版1，24）。

さて、調査地及び周辺の小字名を『大和國条里復元図』に基づいて見てみると図5に示したとおり調査地の小字は坂田で、東側隣接地はコウデン、南側はツカアイとイデボリ、西側はカキゾエ、北側は向垣内、コウデンであり、中でもツカアイやイデボリなどは近くに古墳の存在を予期させるものであった。

以下、調査の内容について見ていく事としよう。（橋本）

第2節 調査の方法と層序

調査区内における基本的な層序は上層より、水田を転用した現代の畑に伴う耕作土①層、水田の床土にあたる酸化鉄分を多く含んだ淡黄茶色土②層、中・近世の耕作に伴う耕土と考えられる淡褐色土の③層があるが、いずれも新しい時代に形成されたものであり、これより下は基本土層として調査区全般にわたって普遍的に存在するような土層はなく、地山までの間に約30cmの厚みで遺構の埋土や包含層などが存在している（図6）。

今回主に調査の対象となった下層の遺構群は地山面及びトレンチ中央部に残る約30cmの厚さを持った包含層（図6-46～51層・図版13）の堆積後に遺構が掘削された様子が伺えるもので、各遺構の調査終了後にはこの下層遺構面のベースとなった包含層についても調査を実施しているが、遺物の出土量が非常に少なく包含層の形成時期を特定するには至っていない。

さて、調査は先述した③層除去後の面を上層とし、包含層・地山上面を下層として2面の調査を実施している。上層の調査は先述した中・近世の耕作土である③層下面までをバックホーによって覆土の除去を行い遺構の検出に努めた結果、細かな時期の特定は困難であるが、主軸を南北方向に持った多くの素掘り小溝と調査区南壁側では東西方向を主軸とした素掘り小溝やごく浅い落ち込み遺構などを検出しているが、他に特筆すべき遺構などは検出されていない（図版2）。下層の調査は人力によって上層遺構面の構成土を除去し、包含層及び地山面において調査を実施している。この面では弥生

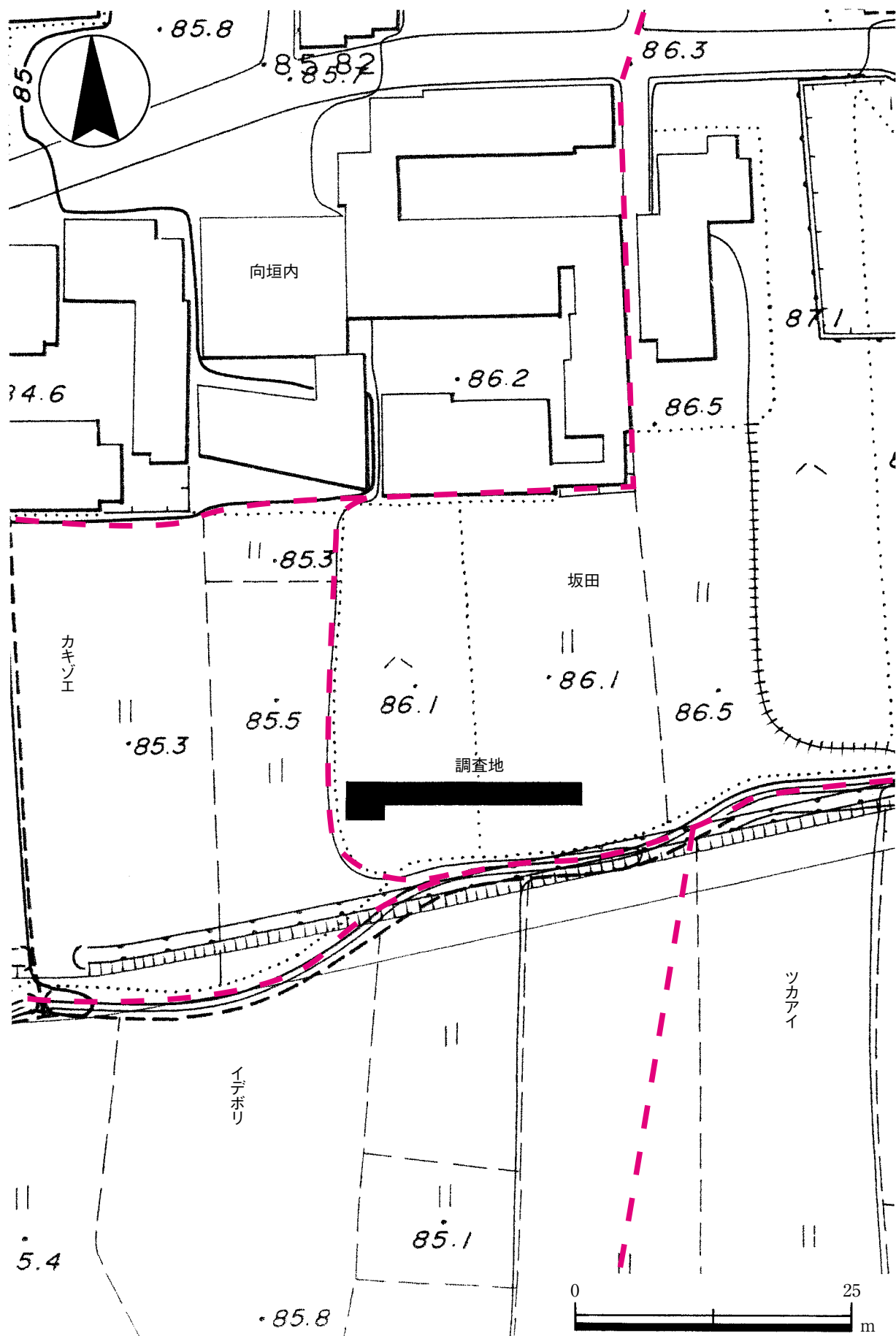
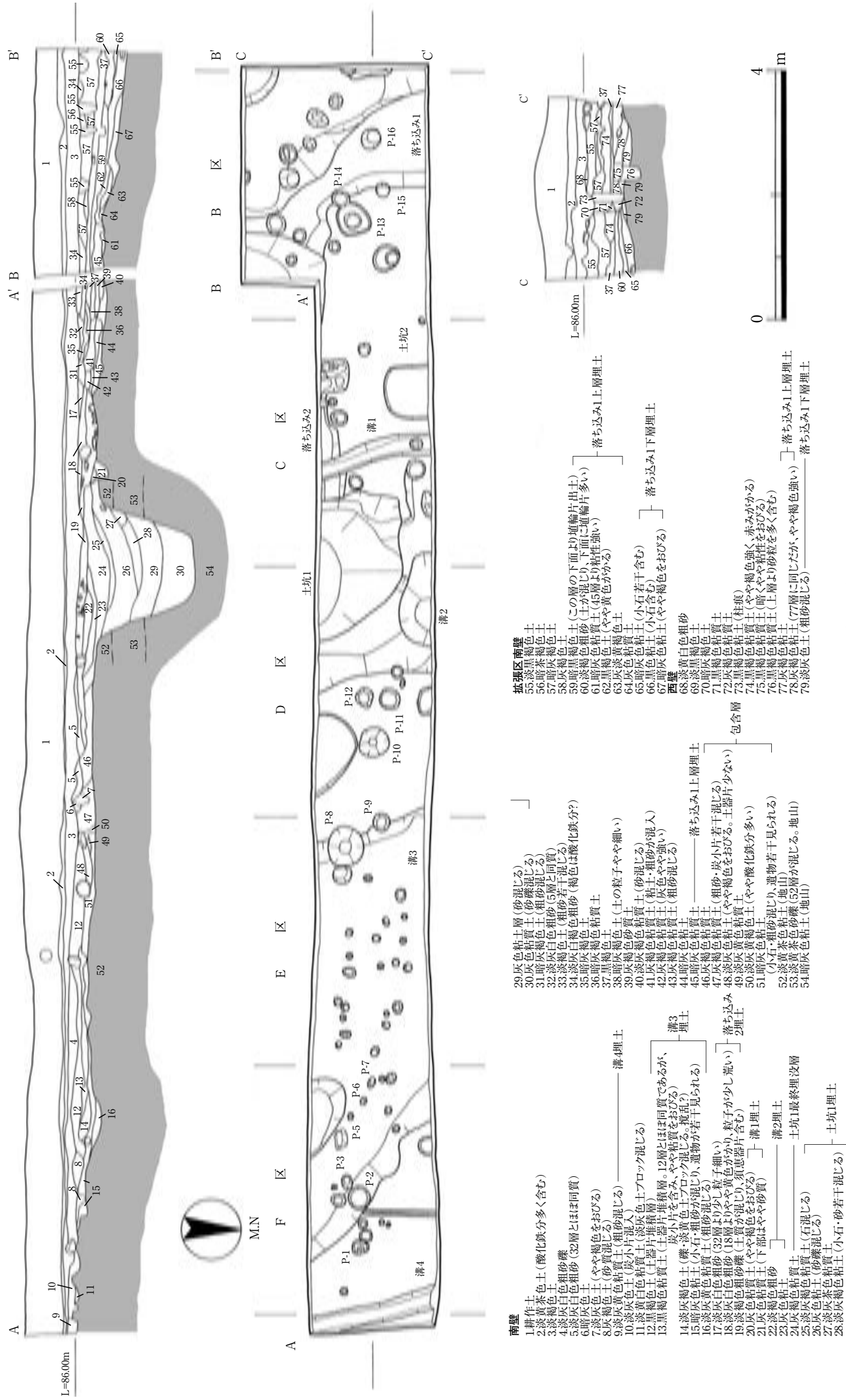


図5 調査位置と周辺の小字 (1/500)



時代後期から古墳時代前期にかけての土坑や溝・落ち込み・ピットなどが検出されており、特に調査区西端に位置する落ち込み1の南西隅部分からは比較的まとまって鶏形埴輪の破片の出土があったため、遺構の性格の確認と遺物の採集を主たる目的として、人力によって南側へ約1.2m×3.6mの拡張区を設定し、調査を行っている。

なお、下層遺構面検出後は調査の便を図るためトレンチの東西方向の中軸線上に4mピッチで杭を打設しており、便宜的に西側からA～G区と設定、この地区割を利用して遺構の命名や実測・遺物の取り上げなどを実施している。

また、本報告で使用する方位については全て現地にてクリノメーターで記録した磁北（以下、本報告においてはM.Nと表記）を使用しており、レベルは桜井市発行の都市計画図の地図上に記載された基点付近から任意のレベルを移設したものである。いずれもが現地において緊急的に計測が行われたものであり、国土座標などに基づいた正確な数値を示すものではないことを断っておく。（橋本）

第3節 検出された遺構

調査では中・近世の遺構である素掘り小溝が1条と時期不詳の落ち込みが1基、古墳時代前期に遡ると目される多数の柱穴と溝が3条、落ち込みが1基、弥生時代後期の土坑が1基検出されており、小さな調査面積の割には密度の高い遺構の分布が確認されている。以下、時期別に調査の内容について報告していく事とする。

(1) 時期不詳の遺構

1. 落ち込み2（図6，7・図版4）

調査区中央よりやや西側の南壁際で検出された落ち込み遺構である。平面形態は不整形で、西端は方形の土坑の様な形状を呈しているが東側は東西に細長い溝のような形状を呈している。遺構の性格や時期・全体像については不明だが、断面の観察では上層遺構面にあたる③層直下より切り込まれたもので溝1や土坑1を切り込んで形成されたものであることが良く解る。面的には上層遺構面からの遺構であり、落ち込みの東西幅は2.2m、深さは約30cmあったが、後述する溝2や土坑1の上部にも落ち込み下層埋土⑩層と同一の灰色や褐色系の粗砂が浅く広がっており（図版4）、洪水砂のような様相を見せることから、人為的な遺構ではなく小規模な氾濫によって挟まれた痕跡と考えている。

(2) 中・近世の遺構

1. 溝4（図6・図版3）

調査区の東端、F・G区にまたがって検出された素掘り小溝である。調査段階では中・近世素掘り小溝と呼称されていたが、本報告をもって溝4と改称することとする。溝1と同じく南東から北西へと磁北に対して西へやや振れて掘削されたものであり、約2mにわたって検出している。溝の幅は約30cmで検出面からの深さは16cm、埋土は粗砂の混じった淡灰黄色の粘質土であった。

なお、出土遺物には10数点の古式土師器細片しか無かったが層位的には現在の耕作土に伴う床土直下より切り込まれた中世以降のものであることは明白であり、遺構の掘削時期については幅を持たせ

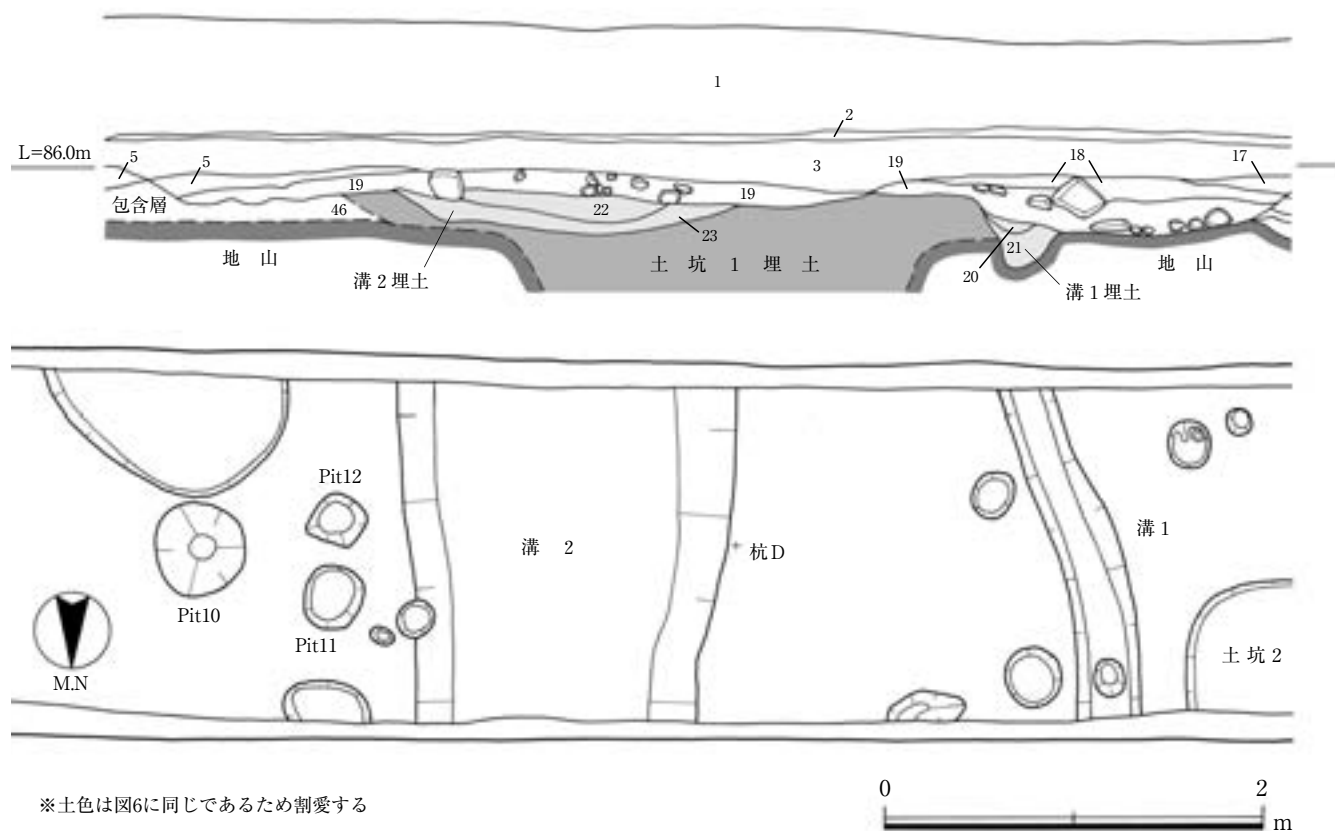


図7 調査区中央部遺構平・断面図 (1/40)

て中・近世期のものとしておきたい。

(3) 古墳時代の遺構

1. 溝1 (図6, 7・図版4)

調査区中央よりやや西のC区、溝2・土坑1の西側で検出された溝である。調査段階ではC溝と呼称されていたが、本報告をもって溝1と改称することとする。流れの方向は不明だが、南東から北西へと磁北に対して西へやや振れて掘削されたものであり、長さ約2mにわたって検出している。溝の幅は約35cmで検出面からの深さは32cm、埋土は2層に分ける事ができ、上層はやや褐色を帯びた灰色の粘質土で、下層は下部がやや砂質がかった灰色の粘質土であった。

この溝からは遺構に伴うか否かは不明ながら、甕や壺などの古式土師器の細片約50点程度の出土があったことから、遺構の時期は他の遺構と同じ布留1式期のものと考えており、層位的にも矛盾するものではない。

2. 溝2 (図6, 7・図版5～7)

調査段階ではD溝と呼称されていたが、本報告をもって溝2と改称することとする。検出されたのは調査区のはほぼ中央のD区で、後述する土坑1の埋没後に掘削されたものであることが判明している。図6の遺構平面図には土坑1完掘後の状況を図示しているが、この段階では土坑1の調査の進行に伴い溝2の大半が既に除去されてしまっているため、別図として図7・図版5～7に土坑1調査前の状況を提示している。

さて、この溝はほぼ南北方向に主軸を持つもので、溝の幅は南壁側で約1.8m、北壁側で約1.5m、深さは25cm前後とあまり大きなものではない。溝の埋土は上下2層に分けることができ、上層は淡褐色粗砂層で、下層は灰色粘土層であった。溝の断面形状は浅いレンズ形を呈するもので、正確な流れの方向は不明だが溝底は北側が数cm深くなっており、北から南へと流れを持つものかもしれない。

出土遺物の殆どは北壁際の下層の粘土層内から出土している。これには図16、17・図版30、31に示した甕・壺・高坏・小型丸底壺・小型丸底鉢・小型器台などがあり、比較的まとまった状態でコンテナケースに一杯分ほどの出土があった。いずれの破片も比較的大きなもので複数の完形土器の出土があったことや、土器片にはローリングの痕跡が認められないことなどから調査地において投棄されたものと考えられる。

溝の時期は比較的まとまった量の土器の出土があり、布留1式期のものと考えている。

3. 溝3（図6・図版7～14）

調査段階ではE・F溝と呼称されていた溝遺構である。幅は南壁側で6.65m、北壁側で5.04mと南側が広く、北側の方が約1.5m狭いものであった。溝の深さは最大で52cmと規模の割には浅く、溝底は比較的平坦な状況を示している。

遺構埋土は上・下層2層に大別する事ができたが、基本的には両層ともに黒褐色土・黒褐色粘土・灰褐色粘土などの褐色系の土や粘土で構成されているもので、上下層で大きな差異は認められない。断面の観察では流水痕は殆ど確認できず、滞水した状況にあったものと見て良さそうである。

また、溝東南隅の底で検出された比較的大きく浅い窪みは溝底の凹凸にあたるもので、溝の中でも最も古い埋土（図6-16・図版10、11）が堆積し、多くの土器が密集して出土している。この他、溝底からは多数の小ピットが検出されている。溝埋没後に上層から掘り込まれた柱穴を除くと大半が径15cm以下で、深さも10cm以下と規模も小さく平面プランも不整形なものが多い事は他の地区から検出されている柱穴群とは明らかに様相の異なるものである。これらの柱穴の埋土には柱痕が認められるものは全くといって良いほど無いことから、現時点では建物を構成するものと考えていないが、その性格については不明である。

出土遺物は溝のほぼ全面・全層位にわたって多量の古式土師器が出土している（図版7～11）。唯一、東側肩部付近からは遺物の出土が若干少ない傾向が認められたものの、遺物の総量はコンテナケースにして実に約15箱分の出土があった。詳細は出土遺物の項目に譲るが、土器の大半は破片化しているものの、完形に復元が可能なものも多く、器種としては図18～28・図版32～43に示した壺・甕・高坏などの他に多くの小型精製三種の出土があり、個々の2次的形態のバリエーションも非常に豊富なものであった。

遺構の時期についてはこれらの遺物から、開削から埋没までのプロセスがほぼ布留1式期の中でおさまるものであると判断され、比較的短期間で廃絶した遺構であると考えられる。

4. 土坑2（図6・図版3）

調査区でも西半域のC区で検出された隅丸方形の土坑である。調査当初は土坑輪郭の検出に先立つ

で多くの土器が密集した状態で検出されたため土器溜りとして調査が行われたものであるが、最終的には東西約90cm、南北約70cm以上の規模を持つ土坑であることが判明している。この土坑の北半分は北壁にかかって検出されているため全体像は明らかではないが、埋土は淡灰褐色土の1層で、深さは最大でも12cmと非常に浅く、上部はかなり削平を受けているものと考えられる。

なお、小さな土坑ではあったが本遺構からは比較的密集して遺物の出土があった。器種としては壺・甕・高坏などの破片があり（図29-192～195・図版43-192～195）、これらの遺物の所属時期は布留0～1式期のものと見られるものの、遺物の個体数が少なく細かな年代の推定は困難であった。

5. 落ち込み1（図6，8・図版14～20）

調査区西端のA・B区にまたがって検出された落ち込み遺構である。調査段階では「落ち込み」或は「溝」と呼称されていたが、ここでは落ち込みの西側の上がりが調査区外に当たり検出されていないことから「溝」の呼称は避け、他の落ち込みと区別するために1の番号を付することとした。

この落ち込み遺構は図8の平面図では西側に向かって2段に落込んでいくような形状を呈しており、落ち込みの方向も西側と東側の落ちでは方位が異なっているように見えるものの、実際には図版19に示したように西側の落ち込みのラインがより明瞭なものであり、東側の斜面は西側の落ち込み肩

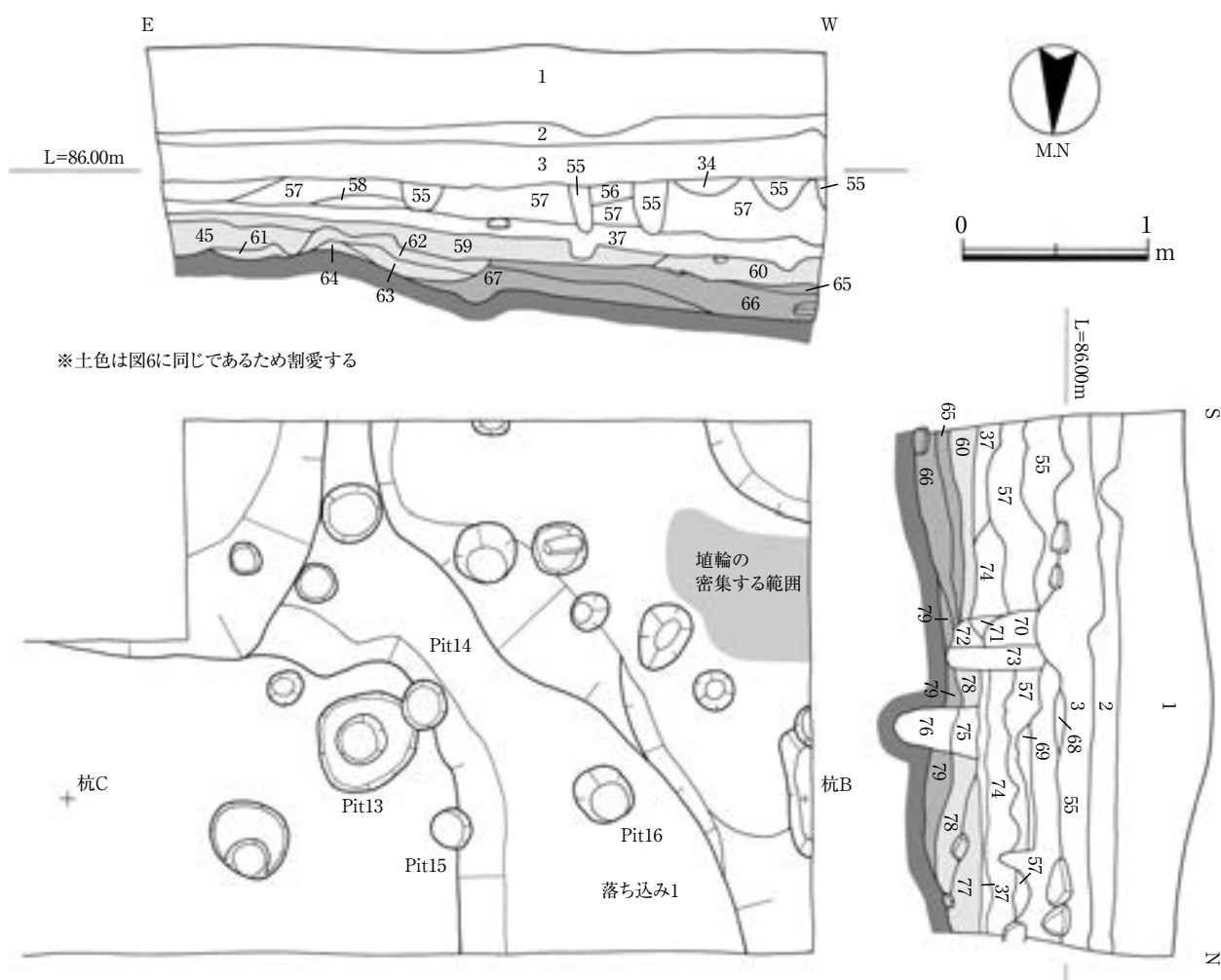


図8 落ち込み1平・断面図（1/40）

部に接した不整形な緩斜面部分に相当すると判断されることから、西側の落ちがより本来のプランを示しているものと考えている。

なお、落ち込みの中や周辺からは多くの柱穴が検出されている。詳細は後述するが、すべてが落ち込み埋没後に上層から掘り込まれたものとみられ、落ち込みに伴うものは無いと考えている。

さて、遺構の埋土については大きく上・下2層に分ける事ができた。上層埋土は図6・8の45・59～64・77・78に示した比較的しまりの良い土や粘質土で構成されたもので、下層埋土は65～67・79として示したものがこれに相当する。下層埋土は基本的には水分を多く含んだ暗灰色あるいは黒色系の粘土で構成されているものの、79層は比較的しまりの良い粗砂を含んだ淡褐色土であった。この差異については65～67層が滞水時に堆積した粘土層であるのに対し、79層は遺構掘削直後に堆積した地山の二次堆積層であることによるものであろう。

この遺構からの出土遺物には土器片のほかに朝顔形や鶏形・冠帽形などの形象埴輪の出土がある。土器には完形品が認められず、各層位からはほぼ均一に出土が認められたが、土器の項目で後述するように一括性のあるものか否かが判然としないことから混入品が含まれている可能性も否定できず、すべてが遺構に伴うものか否かは不明と言わざるを得ない。

一方、形象埴輪については先述した下層埋土と上層埋土の界面からの出土が中心となっているが、落ち込み内の全域から均一に出土するのではなく、図8に網掛の範囲で示したように主に調査区の南半の西壁際付近から密集した状態で出土している（図版15～18）。具体的な出土層位では図8土層図の66・65層と59・60層の間がこれにあたるものであり、一部には上層下部や下層上部に含まれて出土したものも存在するが、下層埋土上面に厚みを持って存在した形象埴輪が埋没過程で上・下層に食い込んだ結果と判断できるものであり、埴輪が落ち込み内に入ったのは下層埋土の形成直後から上層埋土の形成時あるいはその直前段階と判断して良い。

なお、出土土器から考えられる落ち込み1の時期については掘削された時期は明確ではないものの、土器の項目で後述するように上・下層埋土に含まれていた土器片、あるいは形象埴輪などと共伴する土器片などが布留0～1式期の幅の中で考えざるを得ないことから、落ち込み1が機能していた時期についてもこの幅の中で考えておきたい。埋没時期については埴輪を覆う落ち込み上層埋土出土土器に認められる新しい要素からは布留1式期のうちにはその機能を失っていたと推定されるが、図6の調査区全域の断面図を見ても明らかなように西側へ向かっての地形的な窪みはその後に残存していたようで、最終的には37・56・57・58・74層などの堆積によって窪みが完全に埋没したようである。これらの層位の形成時期については出土土器の年代観から7世紀中頃から後半代に下るものとみられ、古式土師器片に混じって当該期の須恵器や土師器片が多く認められることからも是認できるものである。

さて、遺構の性格については落ち込みの形状や滞水状態にあった下層埋土の状況、形象埴輪群の出土などから埋没古墳の周濠となる可能性が高いと考えている。この事は第3章第1節でもみたように調査対象地に隣接して「ツカアイ」などの古墳に関連する小字の存在からも伺えるものである。

なお、落ち込み1を古墳周濠と仮定してみた場合、墳丘本体の位置については落ち込み1の西側と東側両方にその展開を想定する事が可能であるが、落ち込み1を墳丘西側の周濠としてみた場合トレンチ全域が墳丘の中に含まれると推定されるが、墳丘の盛土の下に含まれるはずの溝1～3や土坑2などは落ち込み1とほぼ同時期のものであり、古墳築造前の遺構の埋没から築造を経て古墳完成後の周濠下層埋土の堆積、形象埴輪群の埋没までのプロセスがすべて布留1式期の間で収まらなければならない事になってしまう。一方、西側に墳丘を復元する案はその落ち込みの方向性が西側に向かってごく緩やかな弧を描いていることや東肩部の状況が全体的に緩やかな傾斜を持って底（西）へと向かって落ち込んでいることなどからはその可能性が想定できるものの、調査区西側に存在する水田は一段低く現状の水田面のレベルが85.5mと落ち込み1の検出レベルである85.4mとは大差無い状況にあり、墳丘の展開は東西どちらとも決しがたい状況である。墳丘についてはこれ以上検討しうる材料は無く、墳形や規模も全く不明と言わざるを得ない。

6. 柱穴群（図6・図版10, 14, 19, 24）

調査区のほぼ全域にわたって多数の柱穴が検出されているが、これらは調査時の断面図や写真などの詳細な記録が作成されているものが殆ど無く、詳細の不明な物が大半を占めている。

また、建物としての構成や配置についても矮小な調査区に制約され現時点で確実に建物としてまとまりを持つものは確認できていないが、後述するように柱穴の中に明瞭な柱根の痕跡を残すものもあることから本来は複数の建物が建っていたものと想定している。

ここでは調査時点で柱穴番号が登録され、土色などの記録が残されているものに限ってその概要をみていくこととする。

ピット1（図6）

調査区東端のF区で検出された柱穴である。溝3に隣接するもので径28cm前後、深さ13cmの規模を持つものである。底面の形状は平坦ではなく、柱根の痕跡と見られる2段の落ち込み部分が存在する。埋土は黒褐色土が充填しており、甕の小片などが少量含まれていたが詳細な時期は不明である。

ピット2（図6・図版10, 14, 24）

F地区の溝3の肩部の斜面にかかって検出された柱穴である。径36cm、深さ33cmの規模を持ち、切り合い関係では溝3に後出するもので、柱穴内の中央よりやや東の部分には灰褐色土によって径20cmの柱根の痕跡が明瞭に残存していた。掘形の埋土は若干の小石や淡黄色土のブロックを含んだ黒褐色土であり、ここからの出土遺物には甕とみられる古式土師器の小片があったものの、遺構の詳細な時期などは不明である。

ピット3（図6・図版14, 24）

F地区のピット2の西側に隣接して検出された柱穴である。長径22cm、短径16cmのやや東西に長い楕円形を呈し、深さは9cmを計る。遺構の埋土は淡灰褐色の粘質土であったが、柱痕跡や遺物の出土などは全く無く、掘削時期を特定するのは困難である。

ピット 4 (図 6・図版14, 24)

ピット 2・3 の南側に隣接して検出された柱穴である。径18cm、深さ 7 cm程度の浅いものであったが本来は溝 3 埋没後に掘削されたものとみられることから、もう少し規模の大きなものであったと考えられる。この遺構の埋土は淡灰褐色土の 1 層で、甕などの古式土師器の小片が 5 点程度出土しているが詳細な時期については不明である。

ピット 5 (図 6・図版14, 24)

溝 3 底に残る窪地の北側に隣接して検出された遺構である。長径10cm、短径 6 cm、深さ 4 cmの規模を持つものであるが、非常に小規模な遺構であり溝底の凹凸や根の痕跡などによって自然に形成されたものとなる可能性も捨てきれないことから、柱穴などの人工的な遺構とすることについては検討が必要と思われる。埋土は黒褐色土の 1 層で、古式土師器の壺の小片が 1 点出土しているが、遺構の形成時期については不明である。

ピット 6 (図 6・図版14, 24)

ピット 5 と同様に人工的なものとするか否かは検討を要する遺構である。径 8 cm、深さは 7 cmの規模を持ち、埋土は黒褐色土の 1 層で出土遺物には甕・壺などの小片が数点認められるが遺構の所属時期は不明である。

ピット 7 (図 6・図版14, 24)

ピット 5・6 と同様に人工的なものとするか否かは検討を要する遺構である。長径16cm、短径9cm、深さ 6 cmの規模を持ち、埋土は黒褐色土の 1 層であったが出土遺物は全く無い。遺構の所属時期については周辺のピット 5・6 などと同時期のものと判断されるが、詳細は不明である。

ピット 8 (図 6)

E 区東端で検出された柱穴である。溝 3 の西肩部分に掘削されたもので、径約60cmと比較的大きな規模を持っているが、深さについては記録が無く詳細は不明である。本遺構の埋土は若干の炭片の混じった暗灰色粘土の 1 層で、ここからは図31-286, 287・図版45-286, 287に示した布留 1 式期のものと見られる布留形甕や短頸壺などの小片が出土している。遺構の時期については出土土器が手掛かりとなるが、ここでは先行して存在した溝 3 からの遺物の混入の可能性も高いと考えられることから時期の特定には慎重を期したい。

ピット 9 (図 6)

ピット 8 と同様に E 区東端、溝 3 の西肩部分で検出された柱穴であり、直径は30cmを測るが深さについては記録が無いため不明である。埋土は暗灰色粘土層の 1 層であったが遺物の出土は無かった。

ピット 10 (図 6・7)

D 区西半で検出された柱穴である。径は50cmと比較的大きなものであったが、深さについては記録が無く不明。遺構の埋土は炭片の混じった灰褐色粘質土の 1 層で、図31-288・図版45-288に示した弥生形甕の底部の他古式土師器の小片などが出土している。

ピット11（図6・7）

D区中央部分で検出された柱穴で径は30cm、深さは26cmを測る。埋土は灰褐色粘質土の1層で古式土師器の小片が数点出土している。

ピット12（図6・7）

D区中央部分、ピット11の南側で検出された柱穴である。径は25cm前後の隅丸方形とも取れる平面形態を呈しているが、深さは記録が無く不明。埋土は灰褐色粘質土の1層で、遺物などの出土はまったく無かった。

ピット13（図6，8・図版19）

B区のほぼ中央で検出された柱穴である。径60cm前後、深さ20cmの掘形を持ち、掘形の埋土は暗灰褐色土で穴のほぼ中央には暗灰褐色の粘質土によって径27cmの柱根の痕跡が明瞭に確認できる。この遺構からは布留1式期に属すると見られるS字甕・布留形甕・弥生形甕・高坏など10数点の古式土師器の小片があり、遺構の時期もこの頃のものと考えられる。

ピット14（図6，8・図版19）

落ち込み1の肩部、ピット13と切り合いを持って検出された柱穴である。詳細な調査記録が無く、ピット13との切り合い関係などは不明だが、径は26cm、深さ14cmと比較的浅いものであった。この遺構の埋土は上部に小さな石片を含んだ灰褐色粘質土で、細かな時期の特定は難しいが、布留形甕や壺・高坏などの小片が30点ほど出土している。

ピット15（図6，8・図版19）

ピット14と同様に落ち込み1の肩部にかかって検出された径22cm、深さ16cmの柱穴である。遺構の埋土は粗砂と炭片を若干含んだ暗灰褐色土で、穴の底には小石が多く認められた。この遺構からの布留形甕や壺の胴部破片など約20点の古式土師器細片があったが、図化できるものは無かった。

ピット16（図6，8・図版19）

落ち込み1の内部から検出された柱穴である。本来は落ち込み1の上層埋土の埋没後に掘削されたものとみられ、埋土はやや褐色がかった暗灰色粘質土で、少量の炭粒を含んでいた。この遺構からの出土遺物には弥生形甕や庄内形甕などの細片が5点程度出土しているが、遺構の掘削時期については判然としない。

以上、個々の観察記録が残っているピットについてのみ報告を行ってきたが、この中にはE・F区にまたがって存在する溝3の底面で検出されたピット群の様に人工的な遺構ではない可能性が高いと判断されるものも存在する一方、確実に柱穴と思われるものの遺構番号や調査記録が存在しないために報告を記載する事ができなかった遺構も多い。

また、これらの中の幾つかのピットからは図化の可能な遺物の出土があったが、遺物に付加されたラベルの遺構名称と平面図に記載された遺構との照合が記録類の不備のため不可能であったものも多いことは非常に残念である。

なお、これらのピットからの出土遺物のうち比較的大きな破片や特徴的なものについては図31－

283～285・図版45～283～285にラベル記載の地区番号とともに図示しているので参照されたい。

さて、これらのピット群の所属時期については報告してきた各遺構の出土遺物の内容を見ても明らかなように、遺物の出土した殆どのピットが古式土師器片の出土しか無かったことや、今回の調査区の中では布留1式期以降の遺構の検出が皆無であったことから、これらのピット群の多くは布留式期古相の幅の中で掘削された可能性が極めて高いものと考えている。

(4) 弥生時代の遺構

1. 土坑1 (図6・図版21～23)

C・D区にまたがり調査区の南側で検出された井戸状の土坑である。遺構の約半分が調査区外へと展開していることと、西側の肩部が溝1に切られているためその全容を知る事は出来ないが、南壁断面の検討では本来径3.8m程度の規模を持っていたものと想定される。東側の肩部は図6に示したとおり、本遺構よりもさらに下層にあたる包含層の46層などを切って掘削されたもので、切り込み面からの遺構の深さは1.8mと深く湧水点まで達するものであった。

さて、遺構の埋土は上層が灰褐色の粘質土、中層が砂礫の混じった灰色粘土、下層が砂の混じった灰色の粘質土であり、ここからの出土遺物には図31, 32～289～311・図版45, 46～289～311に示した長頸壺や弥生形甕・高坏・鉢などが見られるが、大半は中層からの出土遺物であった。

遺構の所属時期は出土遺物の年代観からは弥生時代後期後半のものと考えられ、調査区内では唯一の弥生時代の遺構である。(橋本)

第4節 出土遺物

今回の調査における出土遺物の大半を占めるのは溝2や3などから出土した多量の古式土師器であり、この他に特筆すべきものとしては落ち込み1出土の形象埴輪やB区ピット15出土の砥石、溝3出土の鞆の羽口などがある。本節ではこれらの遺物を種類別に分けた上で遺構ごとにその内容を報告していく事としたい。(橋本)

(1) 埴輪

ここに報告する埴輪には朝顔形埴輪・鶏形埴輪・冠帽形埴輪・不明形象埴輪があり、殆どはB拡張区落ち込み1の上層と下層の界面からまとまって出土したものである。このほかに接合不可能な破片が多少あるものの、その中に円筒埴輪と断定できる破片は確認できなかった。

これらの埴輪群が落ち込み内へと包含されるに至った原因については人為的な投棄によるものなのか、自然に転落・流入したものであるのかについては判然としないが、各埴輪ともに全ての部位が揃わない状態ながらも部分ごとに比較的まとまった出土状態にあることから、墳丘上に立てられていたものが破損し、濠の中へと転落したと理解した方がよいのではないかと考えている。

なお、個々の埴輪の詳細は次のとおりである。

1. 鶏形埴輪 (図9, 10・図版25, 26)

雄鶏を表現した形象部とそれを載せる円筒基部によって構成される。円筒基部は基底を欠損してい

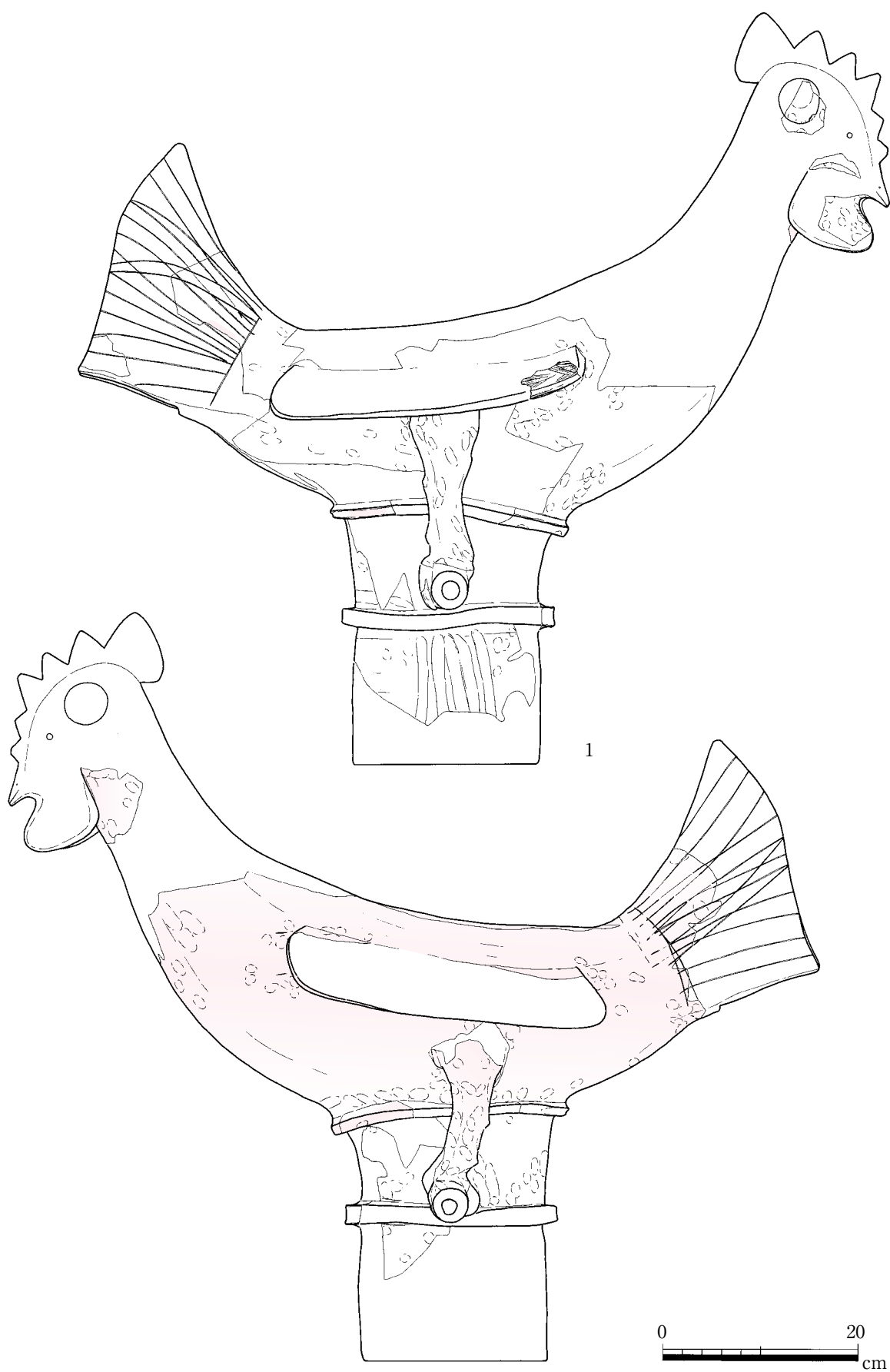


图9 鸡形埴輪実測図1 (1/6)

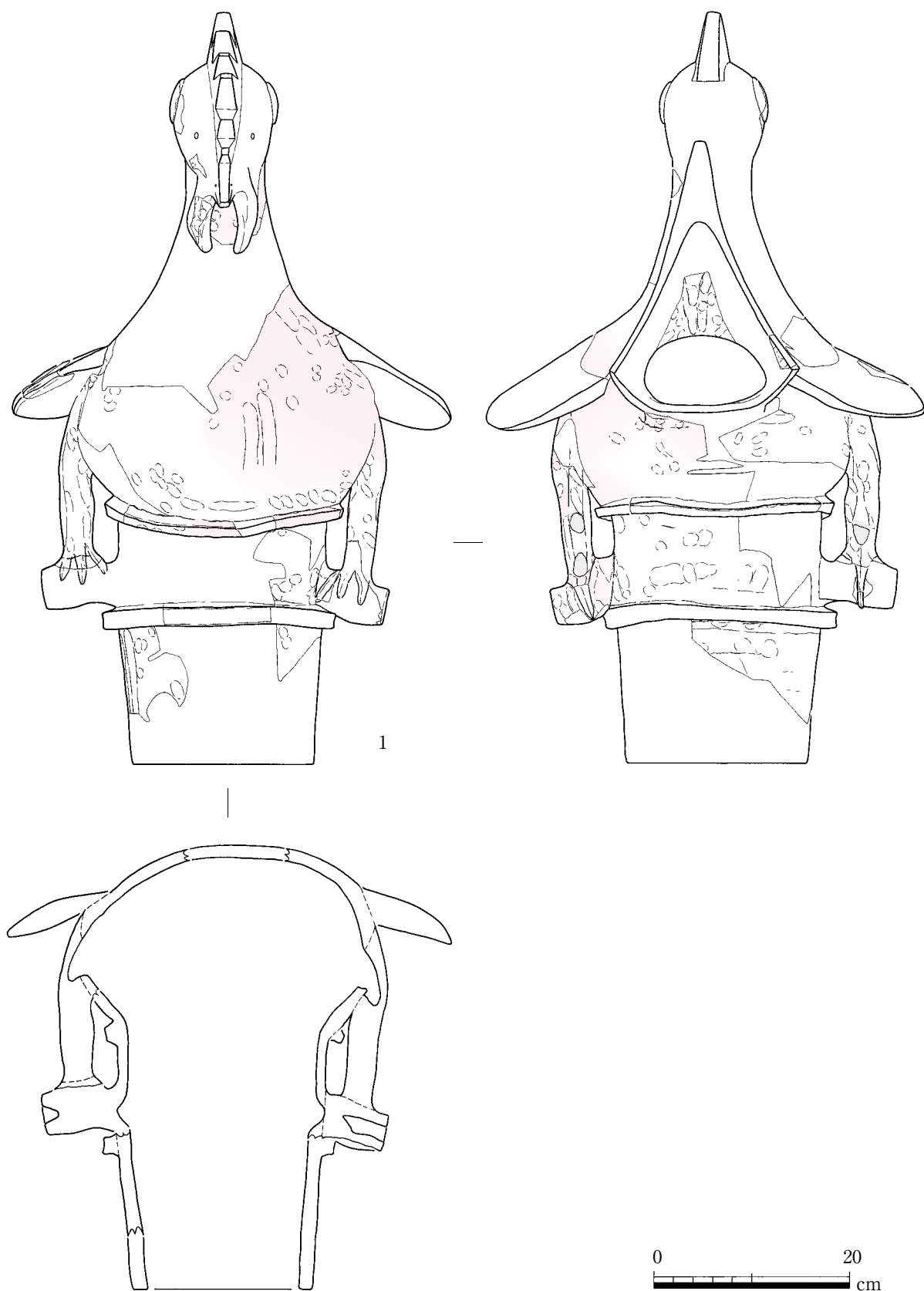


図10 鶏形埴輪実測図 2 (1/6)

たほか、形象部は頭部の遺存度が低く、残存していたのは右側の耳羽と肉髯、顎部周辺のみであった。このほか両翼と尾羽の先端を欠くが、胴部から脚部の残りが非常に良好であったため全体を復元しえた。復元値は全長83.1cm・全高76.8cm・幅44.8cmで、鶏形埴輪としては最大級のものである。

なお、耳羽・肉髯・翼先端の破片は今回の報告にあたっての再整理により追加することができた。以前に出されている復元図に比べて形状・数値ともにより本来の姿に近づいたと思われる。

さて、まず円筒基部であるが、二段以上で構成される。直径は18.8cmで一段目の高さは不明、二段目突帯間は9cm～10.8cmを測る。内外面ともに指ナデ調整を施す。突帯は幅1.6cm～1.8cm、突出1.5cmを測るしっかりとしたもので、各面を強くなでである。透孔については当初から穿たれていない可能性が高い。

この円筒基部中間の突帯上面に載せかけて、対角線上に一对、止まり木を表現したと思われる直径約3.5cmの管状の構造物が設けられている。この部分の接合は、円筒基部を作り終えた段階で器壁を穿孔し、そこに別作りした管を密着させ、円筒基部上方から手を入れて器壁内面をなでつけたとみられ（写真7）、外面の接合部周辺にも粘土を貼り足して補強している。管の中心のみが中空でないのは、脚の爪を貼り付けた際のナデ付けによる圧迫で空洞が塞がってしまったためであろう。

形象部は、円筒基部上端を大きく広げて腹部を積み上げており、やや細手の突帯をまわして円筒基部と形象部を画している。腹部側面から垂下した脚は円筒基部に設けた管へと伸び、前3本・後ろ1本の爪でこれを掴む。脚は関節を意識して「く」の字を描いているほか、後ろ爪のやや上にはケヅメを表現していたと思われる剥離痕が両脚ともに認められる。特筆すべきことに、この脚部は手づくね成形したものを胴部に貼り付けたかに見えるが、腿の部分までは薄い粘土で中空に作られていた（写真8）。

この脚部のすぐ上に両翼の剥離痕があり、付け根のごく一部が残存していることから、立体的に粘土板をとりつけていたことがわかる。尾は実物の鶏と同様に縦に立ち上がるように作られていて、横断面が逆V字形となる。

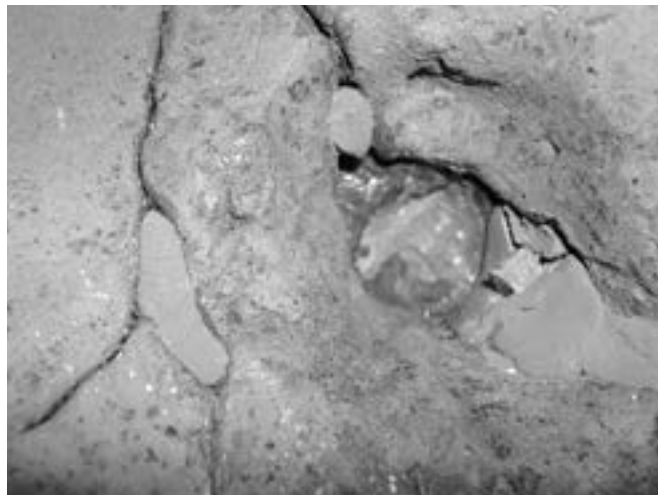


写真7 止まり木の接合（円筒基部内面より）



写真8 脚部の接合（胴部内面より）

また、尾の付け根に縦方向の線刻を1本施して胴との毛流れの境を表現しているほか、後ろ斜め上に向かって尾羽を表す放射線を描いている。この放射状線刻に混じって方向を違える曲線的な線刻が施されているが、これは雄鶏の尾の中央にある長い羽を表現したもので、これらの点からも細部まで実物に忠実であることがわかる。

胴体の成形は、粘土紐を垂直方向に積み上げたのち非常に丁寧な指ナデを施しており、粘土紐の痕跡はほとんどみられない。胸部や背部も同様である。なお、胴体左側内面にのみ、尾の下への開口部から棒状の工具を差し込んで何度もなでた痕跡がある（写真8）。

頭部は破片が少ないが要所の形態がわかった。耳羽は径4cmの円形の粘土板によって表現されており、約3分の2が遺存しているが耳孔を表す刺突はみられない。よく指押さえされた肉厚な肉髯は、嘴下端から顎までと頸の前面にヘラ状工具で刻みをつけてから貼り付けてある。

外面は非常に丁寧な指ナデによって平滑に仕上げられており、内面も粘土紐痕跡がほとんど残らない丁寧な指ナデを施している。黒斑がみられることから焼成は野焼きによると思われる。形象部は殆どの部位で赤色顔料が確認できたことから、全面が赤彩されていたと考えられる。

2. 冠帽形埴輪（図11・図版27）

冠帽を表現した形象部と円筒形の基部から構成され、器高59.8cm・最大幅36.6cm・基底部径23.6cmに復元できた。残存率が低いため法量・形状ともに不確定部分が多く、冠帽形埴輪の一部である可能性が高いが復元に入れ込むことができない図12-3・4のような破片が残っているが、類例と比較した印象では、復元した形状が本来の形状と大きくかけ離れていることはないと思われる。

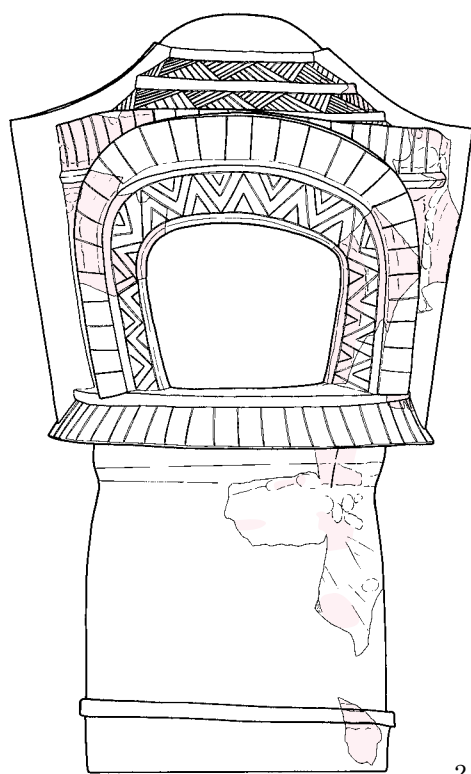
円筒基部は突帯部分の小片および形象部との接続部分が残っているのみで、段数などは明らかになっていない。復元に入れ込んだ突帯は朝顔形埴輪や鶏形埴輪の突帯に比べ極めて扁平で、赤色顔料がよく残っていたことから冠帽形埴輪の突帯と推測したものである。幅1.2cm、突出0.6cmで上面を強くなでており、低位置をめぐるように復元しているが根拠はない。円筒基部の形状は上方に向かって若干細くなる形をとり、最も径の小さい箇所では復元径21.8cmとなる。その上に、冠帽のうち頭部周囲を覆う円筒状の部分を連続的に積み上げている。

この頭部周囲を覆う円筒部分（以下、側頭部）は、後頭部側では円筒基部から垂直に立ち上がるが正面や両側頭部側では上に広がるため、横断面は楕円形を呈す。この上端には、襷状の装飾を表現したのか、上端から4.3cm下の位置に細い突帯をまわし、間を縦方向の沈線で充填している。

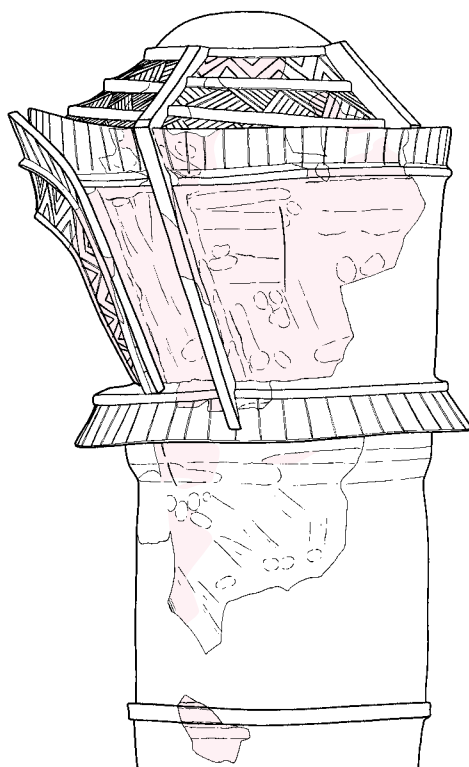
正面はアーチ形に刳り抜くことで顔面を出す開口部とし、その下にはスカート状に垂下する貼り付けが巡るが、これにも側頭部上端と同じく細い突帯をまわして縦方向の沈線を施している。

さらに、開口部の周囲に沿って逆U字形のツバがやや前に張り出すように立体的に貼り付けられていて、ここにも文様が配されている。文様は、ツバ中央に細い突帯を貼り、その内側に鋸歯文、外側に直線文を刻み、鋸歯文帯の両側や直線文と突帯の境界にも沈線を1条刻んである。

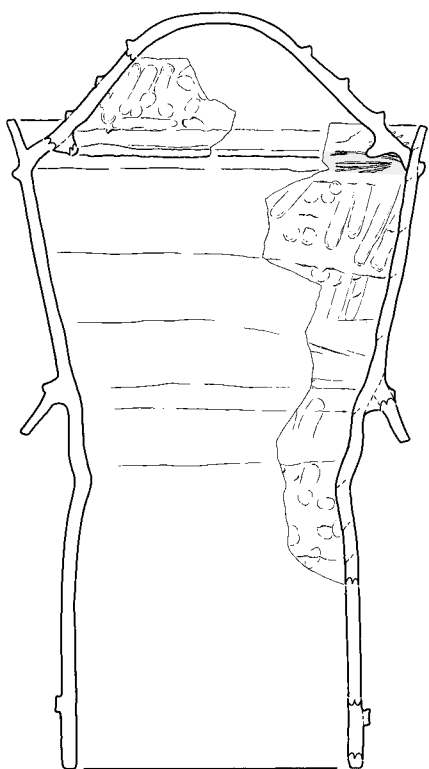
頭頂部の製作はこの埴輪の中で最も大掛かりで、別作りしたドーム状の頭頂部を側頭部の内側に接合する構造をとっていたとみられる。側頭部内側の接合面には接着力を強化するための刻み目が施さ



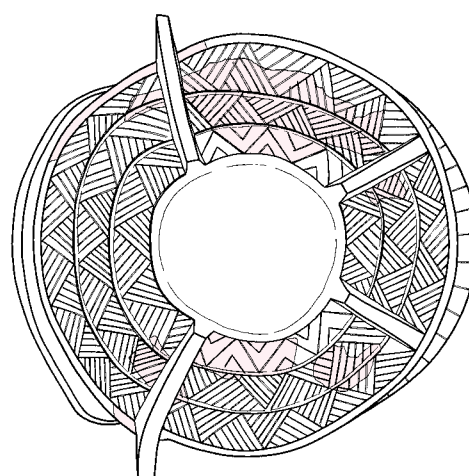
2



3



4



5



図11 冠帽形埴輪実測図 (1/6)

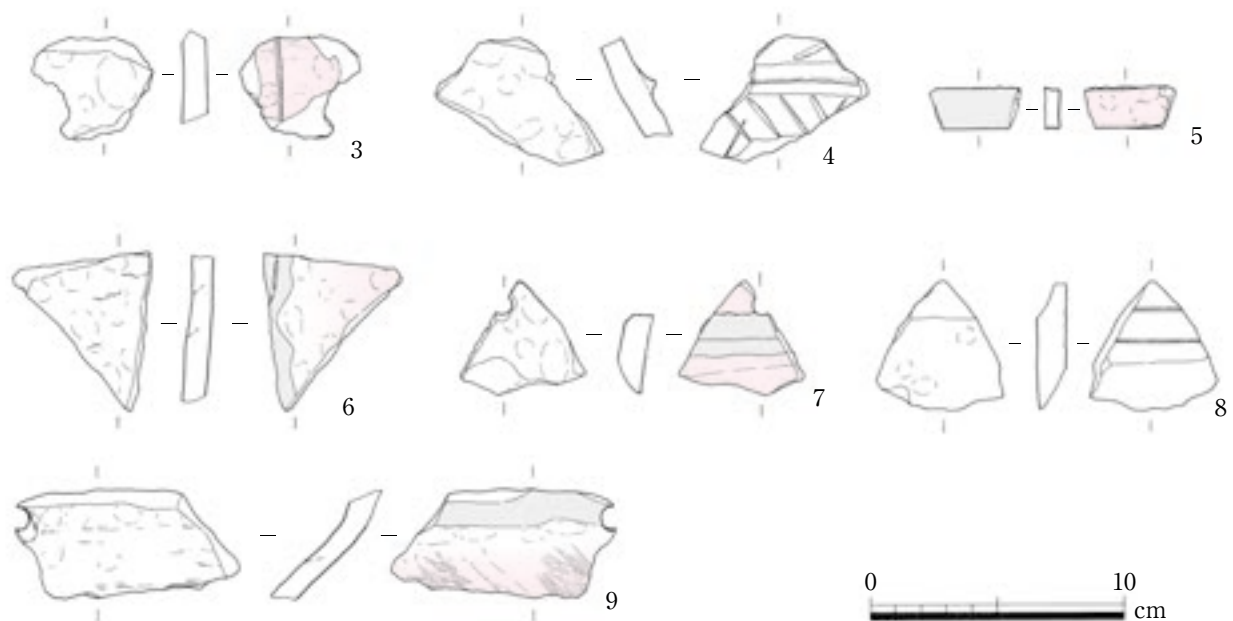


図12 不明形象埴輪実測図 (1/3)

れているが、頭頂部側は側頭部との接点が残存していないため側頭部と頭頂部の関係にはやや不明な点が残っている。破片の観察から、頭頂部は細い突帯を円形に幾重かめぐるせて、その間を2種類の鋸歯文で充填していることが判明したので、これらの情報をもとに、無紋の部分を取りまく3重の文様帯を2重の突帯で区切るように頭頂部を復元している。

冠帽形埴輪の特徴のひとつともいえる側頭部両側の鰭は、スカート状部分の上から側頭部上端にかけては前に傾斜するように貼り付けられている。頭頂部の破片にも文様帯に直交する帯状の剥離痕が残っていることから、鰭は頭頂部まで達することが判明しているが、その形状などはわからない。

外面調整は非常に丁寧なナデで、全面を平滑に仕上げている。内面も指ナデ調整であるが、器面に粘土紐痕跡や指頭圧痕が目立つ。全面に赤色顔料が塗布されており、よく残存している。

3. 不明形象埴輪 (図12-3～9・図版29-3～9)

3は、外面を丁寧になでて縦の線刻を施す特徴や赤色顔料を塗布している点から冠帽形埴輪の一部の可能性もあるが、器壁の厚さから冠帽形埴輪とは断定できなかったものである。4もまた、細い突帯をまわし文様を刻む特徴から冠帽形埴輪の破片と思われたが、文様が頭頂部およびU字形のツバに施文されたものとは微妙に異なり、中央の細い突帯も、冠帽形埴輪の形象部に使われていたものはいずれも突帯の両側に沿って沈線が入っていたが、4にはそれが確認できなかった。そのため冠帽形埴輪から除外している。赤色顔料の塗布も現状では認められない。

5は何らかの器面から剥離した細長い板状の破片で、湾曲がなく扁平である。両側面に赤色顔料がよく残っている。

6・7は形象埴輪の破片かどうかはわからないが、何らかの剥離痕があり、剥離面に貼り付け前の沈線がみられた。両者ともに赤色顔料が認められ、このうち7には円形の小孔が穿たれている。

8は2条の平行沈線を施した破片で、他の形象埴輪と比べて胎土がやや粗く色調も明るい。内外面

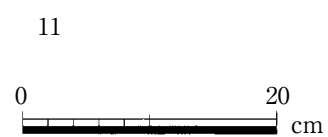
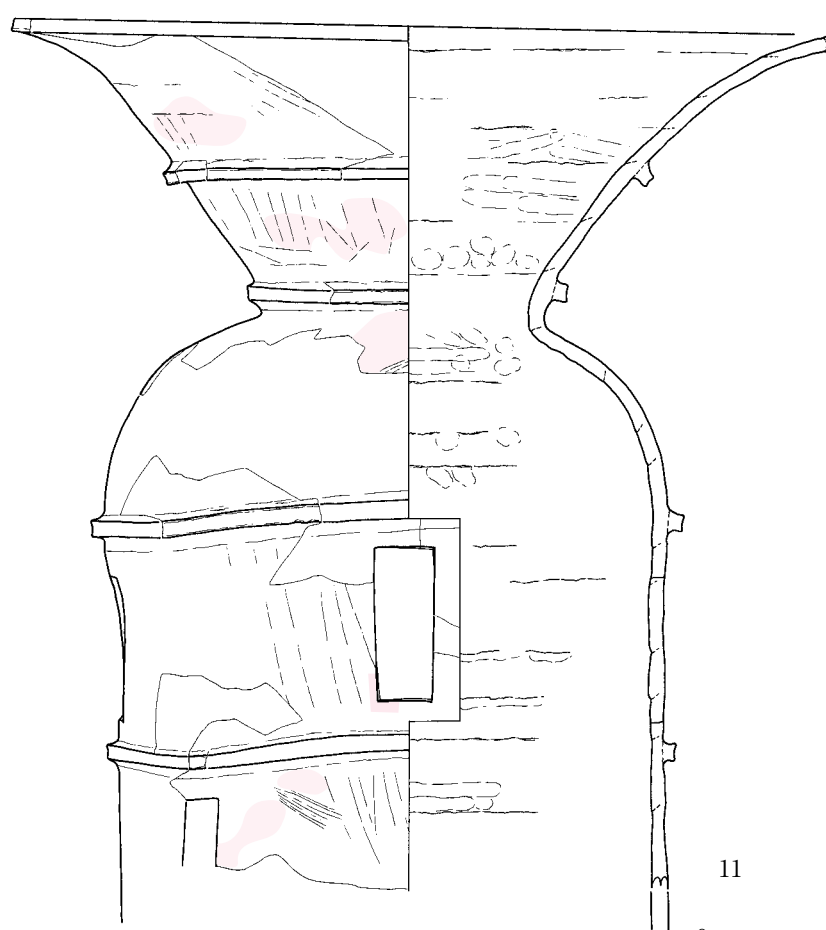
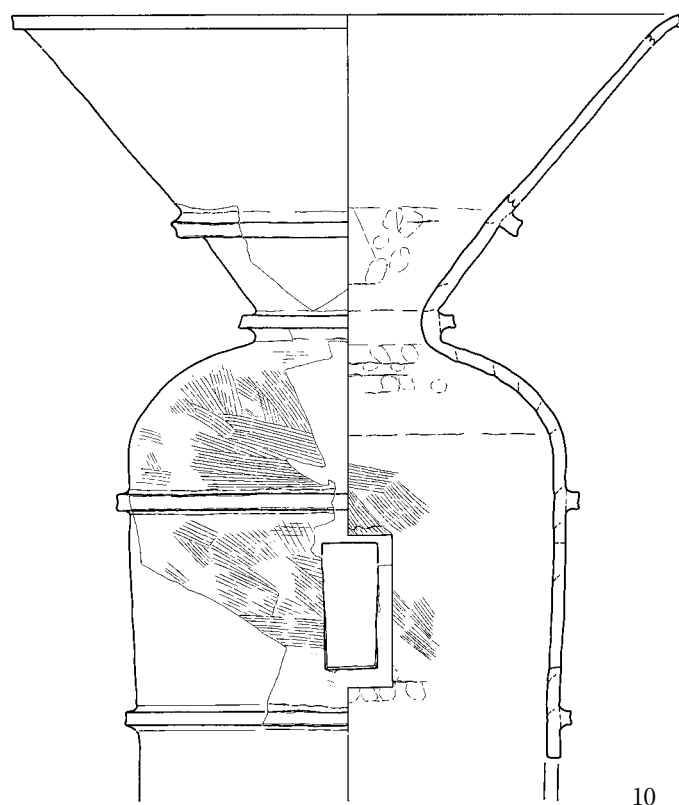


図13 朝顔形埴輪実測図1 (1/6)

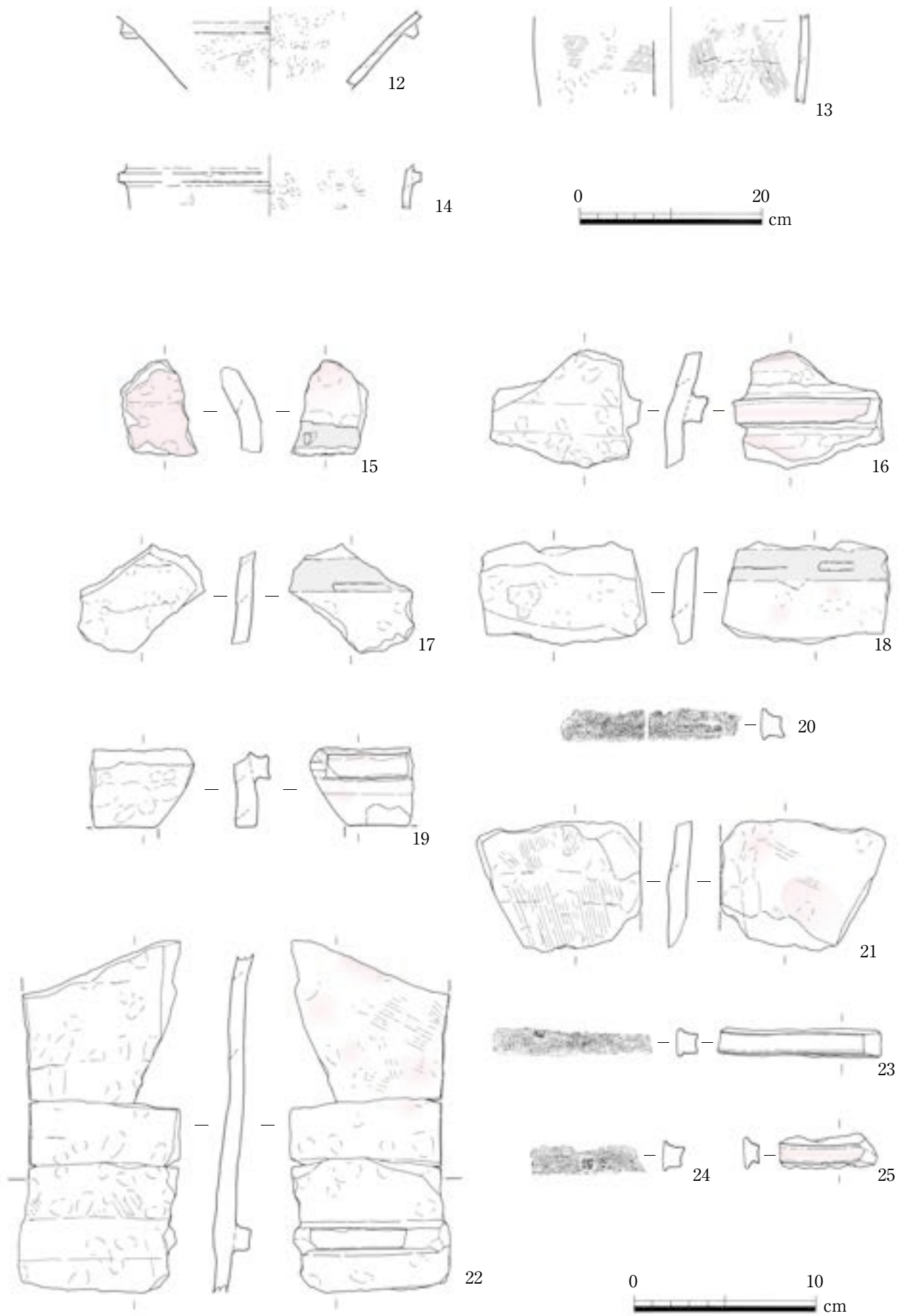


図14 朝顔形埴輪実測図2 (12~14は1/6、15~25は1/3)

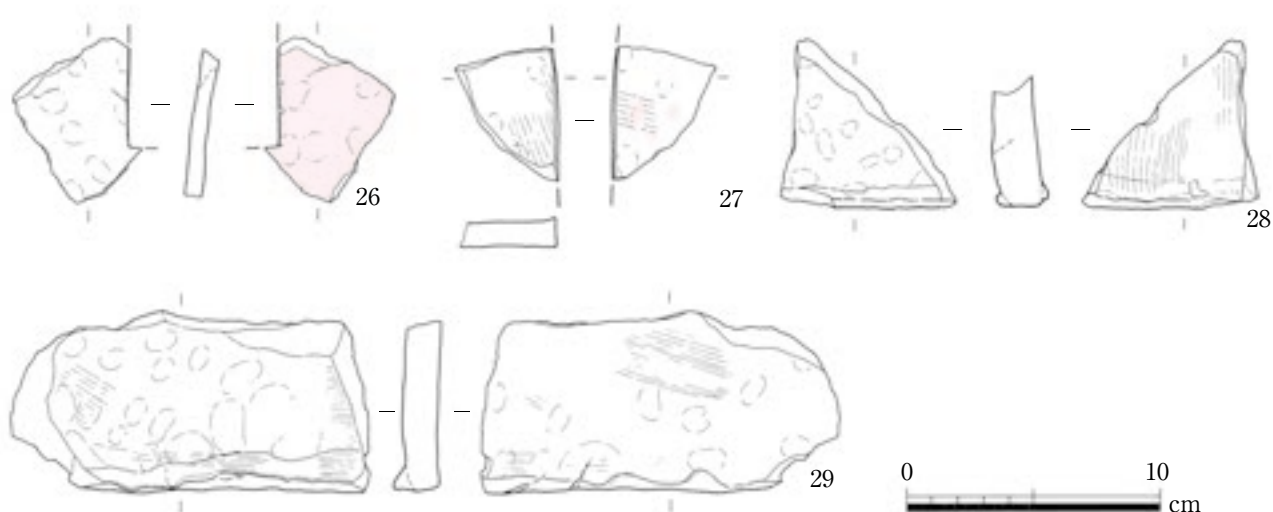


図15 朝顔形埴輪実測図3 (1/3)

ともにナデで仕上げられている。家形埴輪の壁面部分などの可能性も考えられるがよくわからない。

9は7と同様の小円孔を穿つものである。表面に約0.8cm幅の指ナデ痕が強く残るが、同様の痕跡は鶏形埴輪の翼の先端にもみられる。

4. 朝顔形埴輪 (図13～15・10～29・図版28, 29・10～29)

完存する個体はないが、2個体(10・11)を部分的に復元することができた。10は口縁端部の小片および、口縁部中央の突帯から胴部最上段にかけての約4分の1とその下段に穿った透孔の上辺までが残存しており、11は口縁部から胴部上段二段分が残っている。破片資料は状態の良好なものを図化した(12～29)。出土した埴輪は全て野焼き焼成されたものと思われる。なお、数点に赤色顔料の塗布が確認できた。

各個体の詳細は観察表に示すこととし、以下に観察項目ごとの詳細を記す。

〈法量〉

全形が判明していないため器高などはわからない。

10は、口径約53cm・口縁部突帯径27.7cm・頸部突帯径17.1cm・胴部径33.3～34.6cmに復元でき、突帯間隔は心々で測った場合、一次口縁8.0cm・肩部14.2cm・胴部最上段17.1cmである。

11は10よりも大きく、口径64.4cm、口縁部突帯径38.6cm、頸部突帯径25.3cm、胴部径42.6～44.3cmに復元できた。突帯間隔は二次口縁10.6cm・一次口縁9.7cm・肩部18.2cm・胴部最上段18.0cmである。

10と11の法量が異なることから、朝顔形埴輪には少なくとも2種類の大きさが存在することがわかった。破片資料のうち直径を復元することができた12～14は、10と同じ小型の部類に入るとと思われる。

〈突帯〉

突帯には、断面が台形のもの(10・14・22)やM字形のもの(20・24)、各辺を強くなでるもの(11・16・19)がある。25のように非常に扁平な突帯も稀にみられるが、赤色顔料が濃く付着している点からみて形象埴輪の円筒基部にまわる突帯かもしれない。胴部突帯の突出は0.8～1.2cm程度を測るが、口縁部や頸部の突帯はこれらに比べ突出度が高い。頸部突帯は屈曲部ではなく、それよりやや上に貼り付けている。

突帯間隔設定技法は、方形刺突（写真9）と断続凹線（写真10）のほか沈線が確認できた。方形刺突が採用されている破片は10・12・15・23・24で、断続凹線は11・17～20で確認している。また、18の突帯剥離面には断続凹線のほかに細い沈線が認められるが、沈線は形象埴輪の破片6・7にもみられる。10では口縁部突帯裏に刺突があり、頸部にはなく、11の断続凹線は口縁部突帯裏と胴部突帯裏にそれぞれ認められた。

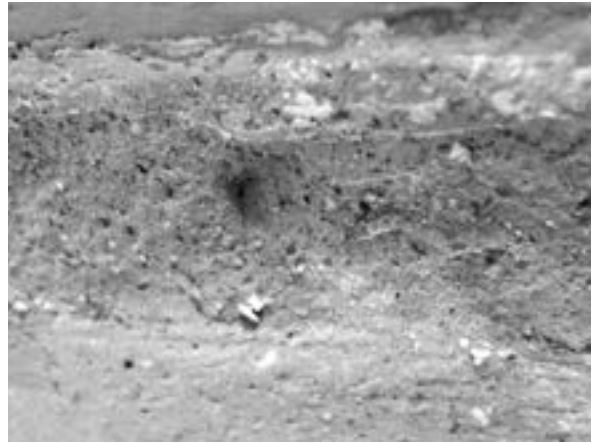


写真9 方形刺突（埴輪10 口縁部）

〈透孔〉

形状を確認できたものは全て長方形である。10・11のほか、破片13・19・21・22・26に残る透孔の切れ込みも全て直線で、且つ、突帯に垂直ないし平行であることから、長方形透孔の一部としてほぼ間違いないだろう。三角形や円形その他の透孔は皆無である。



写真10 断続凹線（埴輪11 胴部）

透孔は胴部の各段に穿たれている。最も遺存度の高かった11は、胴部最上段の透孔が3孔、上から二段目では1孔が残っていた。最上段の3孔は等間隔に配されておらず、間隔を広くとった2孔の中間にあたる部分に下段の透孔が穿たれている。透孔どうしの間隔が狭い2孔の中間には壁面が残っているにもかかわらず下段の透孔がみられなかった（巻頭図版）。よって、一段あたりの穿孔数が4孔と2孔の段を交互に配していたことがうかがえる。10も同様の配置をとっていた可能性が高く現在の復元のようににはならないことも考えられる。

〈調整〉

表面の摩滅により詳細な観察は難しいが、内外面ともにハケメ・板ナデと指ナデが確認できた。

10の外面調整は斜めおよび横方向の断続的なハケメで、ハケメ同士には切り合いがみられる。いずれも突帯貼り付け前に施されたものらしい。口頸部に限ってはナデのみで仕上げており、下から上の方向へ板状工具の擦痕が残っていることから板ナデ調整と考えられる。内面は斜め方向のハケメである。ハケ原体は1cmあたり5～6本の条線がつく目の粗いものを使用している。

11の外面は縦方向の板ナデを最終調整とし、全面を平滑に仕上げている。内面は指ナデである。

13・14・21・22の外面は一次調整にハケメ、二次調整にナデを施し、内面は一次調整タテハケ・二次調整ナデで仕上げている。ハケ原体の条線は1cmあたり4～5本である。

〈その他〉

以上にみられた製作技法などの差は個体差に等しいと考えられ、少なくとも朝顔1（10・12）、朝

顔 2 (11・16～20)、朝顔 3 (13・21・22)、朝顔 4 (23・24) という 4 個体が存在するようである。

なお、破片資料27は鰭付朝顔形埴輪もしくは鰭付円筒埴輪の鰭部分である可能性も残るが、今回出土した埴輪に鰭の付く個体を確認していないため、円筒部に穿たれた透孔の一辺として掲載した。

5. 纏向遺跡坂田地区出土埴輪の評価

〈朝顔形埴輪の形態〉

完全に復元できる個体が多かったため器高や段数は不明である。垂直に立ち上がる胴部をもち、その上にある壺部の肩は胴部より外側には張り出さない。そして、壺部直下には突帯間が近接する幅の狭い段を設けず、口頸部は二重口縁状の段をなさずに中央に突帯をまわすのみで、口縁にむかって緩やかに外反する。透孔は 4 方向と 2 方向の段が各段交互に、透孔どうしが縦に並ばず互い違いになるように穿たれている。おそらく、図版28-11のように最上段の透孔を両側にし、上から二段目にあけられた透孔が中央にくる位置というのが正面になると思われる。なお、鰭などはもたないようである。

これらには少なくとも 2 種類の大きさが存在しており、胴部の直径は小さいものが約30～33cm、大きい個体では約43.5cmを測る。小さい個体についてはわからないが、大きい個体については一次口縁と二次口縁は10cm前後、肩部と胴部最上段は18cm前後を意識して突帯間隔を割り付けたとみられる。

〈形象埴輪について〉

形象埴輪には鶏形埴輪および冠帽形埴輪とその他の不明形象埴輪がある。

鶏形埴輪は形象埴輪の出現期からみられる品目で、最古段階の事例が京都府寺戸大塚古墳¹⁾や同平尾城山古墳²⁾において確認されている。前者では止まり木や尾の破片のほか板状の翼が出土しており、坂田地区出土品にみられた翼を立体的に作る特徴は、新しいものでは 5 世紀中頃の滋賀県野洲大塚山古墳³⁾などまで残るが、寺戸大塚古墳の製品にも共通することがわかる。

さらに脚部については、円筒基部の中ほどに設けられた止まり木を両脚でしっかり掴んで立つ表現が、現在知られる鶏形埴輪の中では唯一のものである。鶏形埴輪は定型化するにつれ、円筒基部の上に載せた止まり木を掴むようになり、その位置も腹部のすぐ脇になる。次の段階には止まり木の表現さえも省略されることを考えると、坂田地区出土品が表現の省略が始まる以前のものであることは間違いない。このことは、脚や止まり木のつくりが複雑で丁寧なことからもうかがえるだろう。

次に冠帽形埴輪であるが、最古の事例は平尾城山古墳の墳頂から出土し、不明形象埴輪として報告されているものである。現在確認されている類例は極めて少なく、平尾城山古墳・大阪府池田茶白山古墳⁴⁾・同栗塚古墳⁵⁾・奈良県赤土山古墳⁶⁾・同掖上鍾子塚古墳⁷⁾・三重県宝塚 1 号墳⁸⁾で出土しているほか、鳥取県岩美郡国府町岡益付近出土と伝えられているものが知られ、5 世紀代まで存続することがわかっている。

これらの例をみると、平尾城山古墳例や赤土山古墳例には幾重にも鋸歯文が施文されるが、5 世紀代に入ると掖上鍾子塚古墳や栗塚古墳の出土品のようにそれが施されなくなっていることがわかる。鋸歯文を多用する坂田地区出土品は平尾城山・赤土山例に近い。

また、ほとんどの個体が基部から側頭部・頭頂部までを連続的に成形し、その後に装飾部分の粘土

を鉢巻状に張り足して形象部を完成させているのに比べると、基部から連続して積み上げた筒状の側頭部の内面に別作りしたドーム状の頭頂部を接着するという複雑な手順をとっている坂田地区の冠帽形埴輪は、この中でも製作方法が確立されていない初期の段階のものと考えられる。

〈坂田地区出土埴輪の年代〉

以上を踏まえ、ここでは纏向遺跡坂田地区の埴輪の年代について検討する。

まずはじめに、形象埴輪の組成についてみておきたい。今回の調査で出土した埴輪は本来はほかの埴輪とともに古墳の墳頂に立てられていた蓋然性が高いため、出土した形象埴輪が本来の組合せを反映しているとは言いきれない。しかし、仮に鶏形埴輪と冠帽形埴輪のみが使用されていたと考えた場合、器財埴輪出現以降の古墳で冠帽と鶏の埴輪をもっているならばその他の形象埴輪をも豊富にもっている可能性が高いと考えられるから、そうなると坂田地区の出土品の下限は、器財埴輪が増加する4世紀後半を下るものではないと想定される。

これに加え個々の観察からは、形象埴輪の出現期から定型化以前の製品という印象を受けた。

また、坂田地区の形象埴輪と同じ品目をもち、且つ器財埴輪などを用いない例は現在のところ平尾城山古墳が唯一であり、時期的にも近い可能性があると思われる。

次に朝顔形埴輪であるが、これまでに述べたとおり、坂田地区の製品は川西宏幸氏が埴輪編年Ⅰ期の指標とした肩部の張りや丸みが弱く、突帯の突出度もさほど高くないほか、ケズリ調整などは認められなかった。しかしながら4世紀後半頃に見られる、一段おきに透孔をあけ基底部に半円形透孔をもつなどの特徴を有する埴輪よりは時期的に先行することがわかる。

さて、透孔の配置のみを挙げれば、坂田地区のものと同様の配置をとる例が西山古墳外堤埴輪棺として出土したⅠ期の鰭付円筒埴輪にみられるので、以下で少しふれておきたい。

この西山古墳の鰭付円筒埴輪は、短く外反する口縁の直下に突帯を貼りつけるもので、透孔は長方形で幅の狭い最上段の下段から順に4孔・2孔・4孔と配す。鰭が上から2条目の突帯以下に付くことにより、三段目は本来穿たれるはずの4孔のうち2孔が鰭の位置に重なるため、正面と背面の2孔のみが穿孔されこのような配置になっているのであろう。この形態をとる個体は2点出土しており、うち1点は内面全体がケズリによって仕上げられている。このほか、三角形透孔を一段に4孔配し、短く外反する口縁の直下に突帯をまわすタイプの鰭付円筒埴輪があり、鰭をもたないものとしては伝小半坊塚古墳出土円筒埴輪と同形の、上方に向かってすぼまり短い口縁部をもつ円筒埴輪がある。朝顔形埴輪は鰭付で、鰭には表裏両方に突帯を貼り付け、三角形透孔を一段に6つあけており肩部が大きく張る¹⁰⁾。

坂田地区の朝顔形埴輪にはこれら西山古墳の埴輪群のような形態・技法上の古い特徴がみられないことから、西山古墳例よりは新しく位置付けられることが考えられ、むしろこういった鰭付き円筒埴輪の鰭を省略した状態と考えられる。

以上のことから、纏向遺跡坂田地区の朝顔形埴輪は、川西編年のⅠ期でも新しい段階からⅡ期の初めに入ってもやや古い要素を残す埴輪と考えられる。よって、具体的な年代はおおよそ4世紀前半で

も新しいところから4世紀中葉にかけてとしておきたい。

(橋爪)

【註記】

- 1) 向日市文化資料館『向日丘陵の前期古墳』開館20周年記念特別展示図録 2004
 - 2) 近藤喬一『京都府平尾城山古墳』(山口大学人文学部考古学研究室研究報告第6集) 山口大学人文学部考古学研究室 1990
 - 3) 進藤武『史跡大岩山古墳群 大塚山古墳調査整備報告書』野洲市教育委員会 2006
 - 4) 堅田直『池田市茶臼山古墳の研究』大阪古文化研究会学報第1輯 大阪古文化研究会 1964
- 報告書で「頭巾埴輪」とされるものである。ほかの冠帽形埴輪とはやや形態が異なり、手焙形土器を載せた埴輪と理解されることもあるようであるが、かぶりものの状の表現にU字形の開口部をもち側面に剥離痕がみられる点から冠帽形埴輪に類するものと判断できよう。
- 都出比呂志「埴輪編年と前期古墳の新古」『王陵の比較研究』京都大学文学部考古学研究室 1981
- 5) 吉澤則男「栗塚古墳」『羽曳野市史』史料編1 羽曳野市 1994
 - 6) 松本洋明『史跡赤土山古墳 第4次～第8次発掘調査概要報告書』天理市教育委員会 2003
 - 7) 御所市史編纂委員会「鐘子塚古墳」『御所市史』御所市役所 1965
 - 8) 福田哲也「宝塚1号墳について」『史跡宝塚古墳』松阪市埋蔵文化財報告書1 松阪市教育委員会 2005
 - 9) 清水真一『大和の大王の埴輪—冠形埴輪の成立と展開—展』(財)桜井市文化財協会 1996
 - 10) 竹谷俊夫・廣瀬覚「天理西山古墳外堤出土の埴輪棺墓について」『天理参考館報』第13号 天理大学附属天理参考館 2000

【参考文献】

- 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・3号 日本考古学会 1978・1979
- 猪熊兼繁「冠形埴輪の写真を眺めて」『大和志』第五巻第二号 大和国史会 1938
- 小栗明彦「大和の円筒埴輪編年」『埴輪論叢』第5号 埴輪検討会 2003
- 賀来孝代「埴輪の鳥」『日本考古学』14 日本考古学協会 2002
- 島本一「我が国最初発見の冠型埴輪について」『大和志』第五巻第二号 大和国史会 1938
- 清水真一「鶏形埴輪についての一考察—纏向遺跡巻野内坂田地区の鶏形埴輪の持つ意義—」『橿原考古学研究所論集』第十一 橿原考古学研究所 1994

(2) 土器

1. 溝2出土土器 (図16, 17-1~30・図版30, 31-1~30)

30点を図示することができた。遺構の項目でも述べたとおり、壺・甕・高坏・鉢・小形丸底鉢などの出土があったが壺については細片のため図示することができなかった。

遺物の内訳を見てみると甕では布留形甕とともに一定量の弥生形甕が存在するものの、庄内形甕は認められなかった。布留形甕では22に示した個体のようにやや長胴ぎみの体部を持ち、比較的新しい様相のものかと思われるものが存在する一方、他の個体は口唇端部の形態にはe手法を採用するものも多く、肩部から上のプロポーションとともに比較的古い様相を持つと考えられるものが大半を占めている。小形丸底土器についても壺は全く存在せず、口径よりも器高が低いいわゆる鉢の形態をとるものが全てであること、高坏にも29に示したように低脚高坏が含まれている点などからはさほど時期を下らせる根拠は薄いと判断されることからこれらの遺物の所属時期については布留1式期でも前半期に位置付けて良いと考える。

2. 溝3出土土器 (図18~28-31~191・図版32~43-31~191)

今回の調査では最も多くの遺物の出土があった遺構で161点を図示している。器種としては壺・甕・小形丸底鉢・有段鉢・小形器台・高坏などの出土があり、遺物の残存率も比較的良好であった。

壺では広口壺や直口壺・短頸直口壺・複合口縁壺など多くのバリエーションがあったものの、二重

口縁壺は無く、32・36・37・41・42・46・47・50・51・52・53・56・61などの大和以外の地域からの搬入品と見られる個体の存在が顕著であった。甕には71・73などのごく少量の弥生形甕が含まれるものの典型的なものは無く、庄内形甕については皆無であった。甕の中心となるのは布留形甕であり、図示した中では在地甕40点中3点が弥生形甕であり、約93%を占めている。口縁手法もa手法7点、e₁手法3点、e₂手法4点、f手法5点、g₁手法7点、g₂手法12点、g₃手法が1点とバリエーションも多い。小形丸底土器の中では壺は存在せず、Ⅱ・Ⅲ形式の鉢が主体を占めているが、甕の様相と比較するとⅢ形式の鉢が10点の約28%と比較的多い比率で含まれているのが目立つ。同じく高坏も本来は188や189などのようにB形式のものが主体を占めるはずであるが、実際には181や183などのような低脚高坏となるE₄形式のものが全体の約63%と非常に高率を示して存在する事などは溝3出土の土器群が布留1式期の中でもごく初期段階のものであることを示しているものと考えたい。

なお、壺以外の搬入品では109～113に示した吉備形の甕や、114～120・128の東海形甕、121～124の山陰形甕、125の近江形甕の他、故地は判然としないが155のいわゆる山陰形小形丸底鉢、175の山陰形鼓形器台などが認められ、比較的高率で大和以外からの搬入土器が存在する事も布留式期でも古い様相を示すものといえよう。

3. 土坑2出土土器（図29－192～195・図版43－192～195）

本遺構からの出土遺物は図版3にも示したとおり比較的密集して出土しているものの、個体が少ないうえ、小片が多く4点が図示できたにすぎない。これらのうち、甕3点の内容からは布留0式期～布留1式期の幅の中で所属時期を推定する事が可能と考えられるものの、遺物の量的な問題から細かな年代観を提示するのは困難である。

4. 落ち込み1出土土器

〈上層〉（図29，30－196～233・図版43，44－196～233）

上層出土遺物からは36点を図示している。いずれもが小片～細片であり、その出土状態からは遺構に伴うものとするよりは他の遺構から混じり込んだものと考えている。壺には196～199があるが、全体としては量も少なく口縁部の確認できる在地産のものは196のみであった。甕では203や204・205・207の弥生形甕や206に示した庄内大和形甕などが存在する一方で、208～221に示したとおり布留形甕と見られる個体が最も多く、甕の主体を占めている。口縁部の手法は溝3出土土器に比べてg・f手法を採るものは少なく、e手法を採るものが多いことから溝3よりも微妙に古い印象も受けるが、この傾向は上層にのみ認められるものであり、これより下部ではg・f手法が約半数を占めている。これらの所属時期については先述したとおり出土土器の多くが本来この遺構に伴うものとは積極的に判断できないため、一定の時間幅の土器が混在している可能性も考慮しなければならない。

いずれにせよ、本層位出土土器の持つ様相は大きく見積もって布留0式期～布留1式期の幅の中でおさまるものと考えられ、これらに含まれる甕などの新しい要素を勘案すると上層埋土の形成時期は布留1式期を下限と考えることができよう。

なお、上層埋土出土の搬入土器には197に示した阿波系と見られる壺のほか、200～202・227～229

の東海形甕があり、特筆すべきものには器種は不明ながら226に示した中空の取手状の突起を持った土器の小片がある。

〈上・下層界面〉(図30-234~259・図版44-234~259)

遺構の項目で先述したとおり形象埴輪の多くとともに出土した土器群である。ここでは細片も含めて26点を図示している。壺では234の大型の複合口縁壺があるが、口唇部付近の小片で全体像を知りうるものではない。甕は上層埋土と同じく少量の弥生形甕や庄内大和形甕などが含まれるものの布留形甕が主体をなす様相に変わりはない。口唇部の手法も同様に典型的なg・f手法を持つものは僅かで、庄内大和形甕などと共通するe手法が多用されていることは上層出土遺物と同様の傾向を示すものと思われ、所属時期についても上層出土土器群と時期差を認められるものではない。

なお、この層位からの遺物のうち、搬入品と認められるものには235の山陰形甕や236の近江形甕、251~252の東海形甕、253の吉備形甕、257の山陰形鼓型器台などがある。

〈下層〉(図30, 31-260~282・図版44-260~282)

下層出土土器は23点を図示することができた。壺や甕・高坏・小形丸底鉢・有段鉢などがあつたが点数はやや少ない。細片が多いものの遺物の中心を占めるのはやはり布留形甕であり、口縁部の手法もやはりe手法が主体となっており、布留形甕のなかでも比較的古相に位置づけられると判断されるものが殆どである。遺物全体の様相としては上記の2層と同様であり、所属時期にも差を認めることはできない。なお、この層位からの搬入品には293の近江形甕があるのみである。

5. ピット群出土土器 (図31-283~288・図版45-283~288)

6点を図示している。遺構の項目でも述べたように取上げ時の記録の不備により所属遺構が判然としないものが多いが、286・287はE区のピット8から、288はD区のピット10から出土したものである。いずれの遺構も出土土器の点数がごく限られているため所属時期を明らかにすることは困難だが、他の遺構と同様に布留式期の前半期に位置づけられるものと考えている。

6. 土坑1出土土器 (図31, 32-289~311・図版45, 46-289~311)

23点を図示している。出土時の記録作成の不備から各層位ごとに土器を示す事はできなかったものの、器種としては長頸壺や広口の長頸壺・高坏・器台・鉢などがある。器種別にみると壺には289~291に示した長頸壺や293の口縁部を円形浮文で加飾した広口の長頸壺?などがあり、甕では弥生形のいわゆるタタキ甕が中心となっている。甕の中には298に示した口縁外面に凹線状の窪みが認められる大形の甕があり、故地は不明ながらいずれかの地域からの搬入品と考えられる。高坏には306から308に示した3点がある。307や308などは在地産のものであるが、306は椀形の体部を持ち、口唇部に板状の工具によって面を削り出した東海形の椀形高坏であり、概ね山中期後半頃に位置づけられよう。

なお、本遺構出土の遺物の所属時期については概ねⅥ-2様式期²⁾に位置づけられると考えている。

(橋本)

【註記】

1) 寺沢薫編『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所 1986

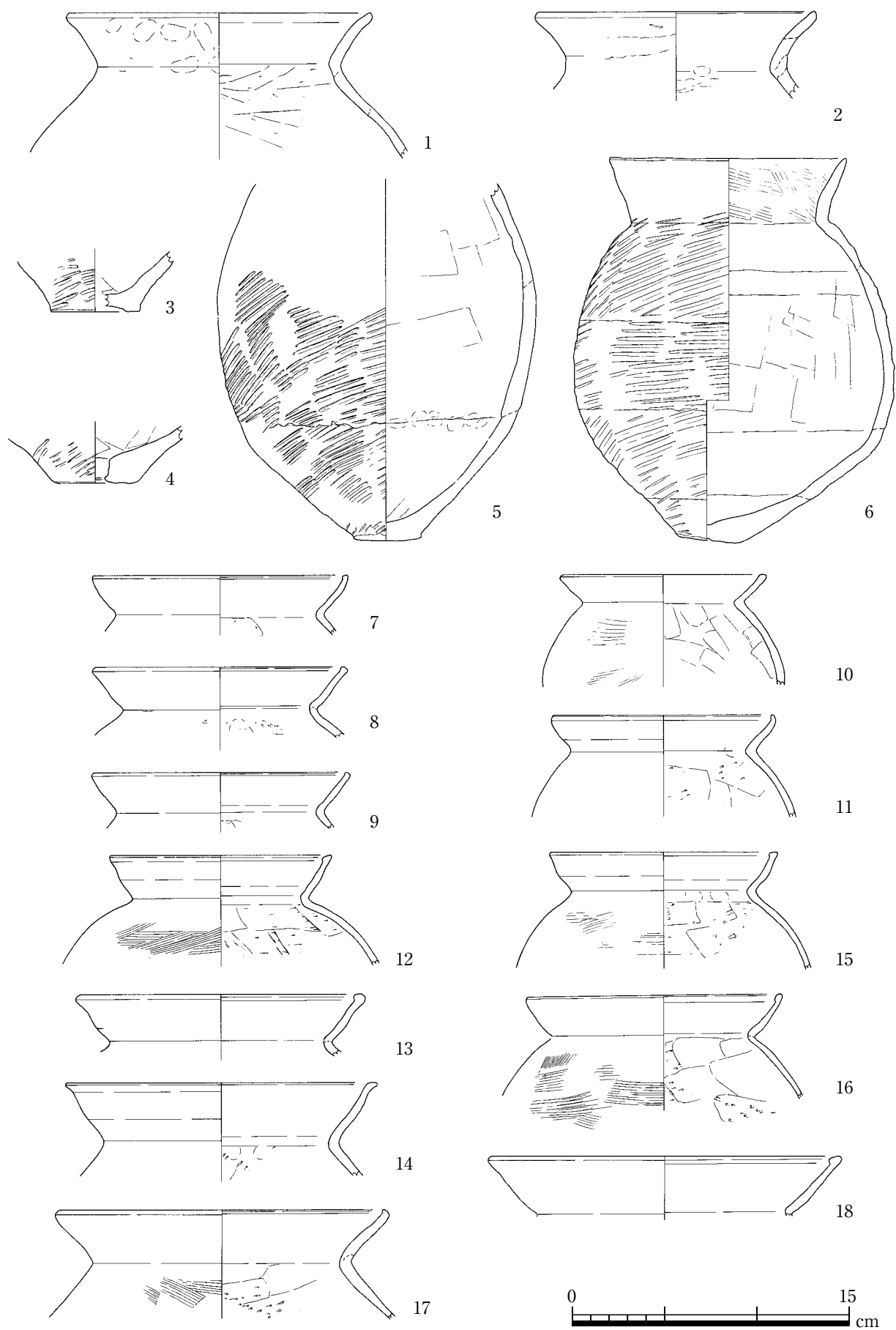


図16 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図1 (1/3)
1~18 溝2

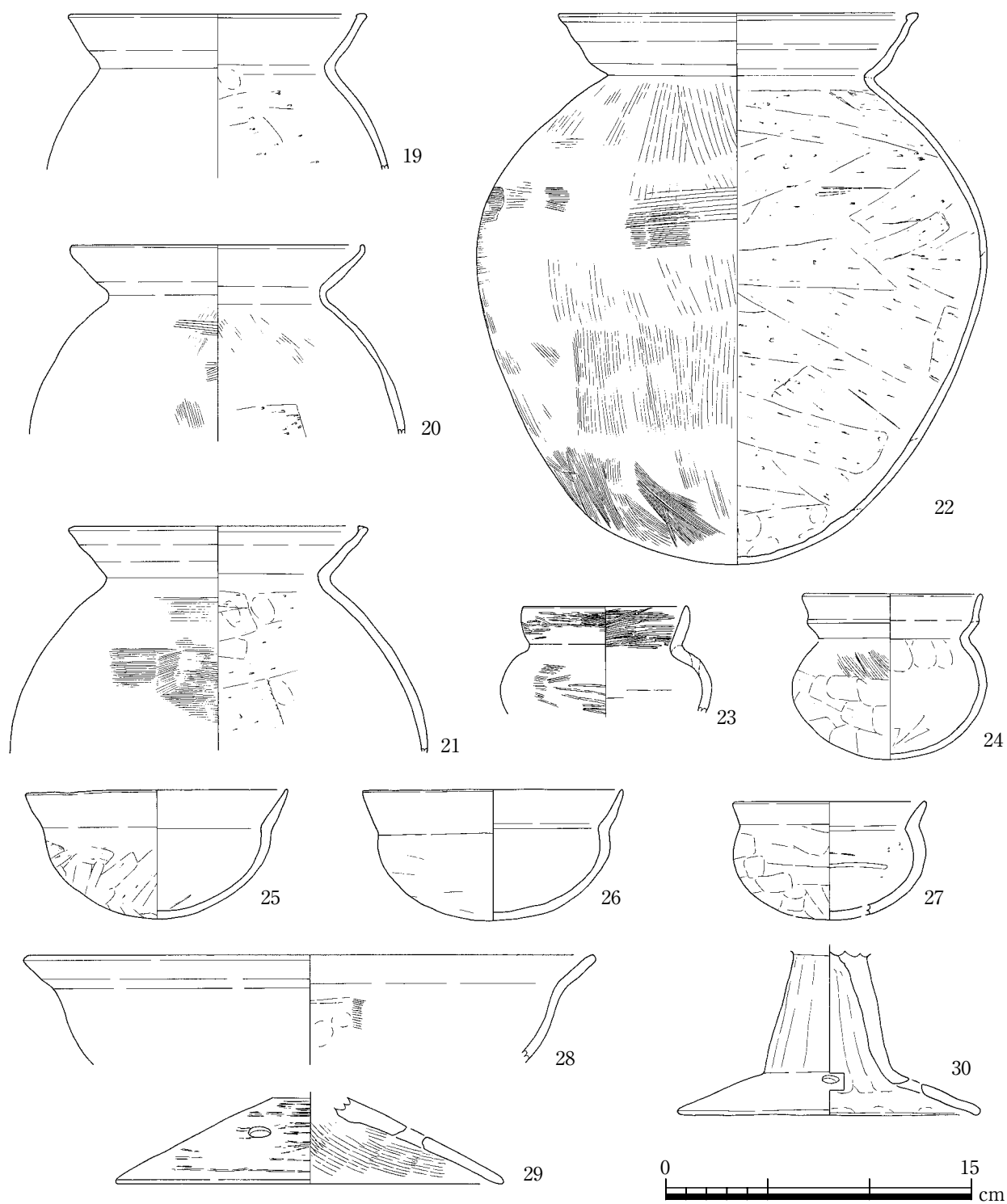


図17 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図2 (1/3)
19~30 溝2

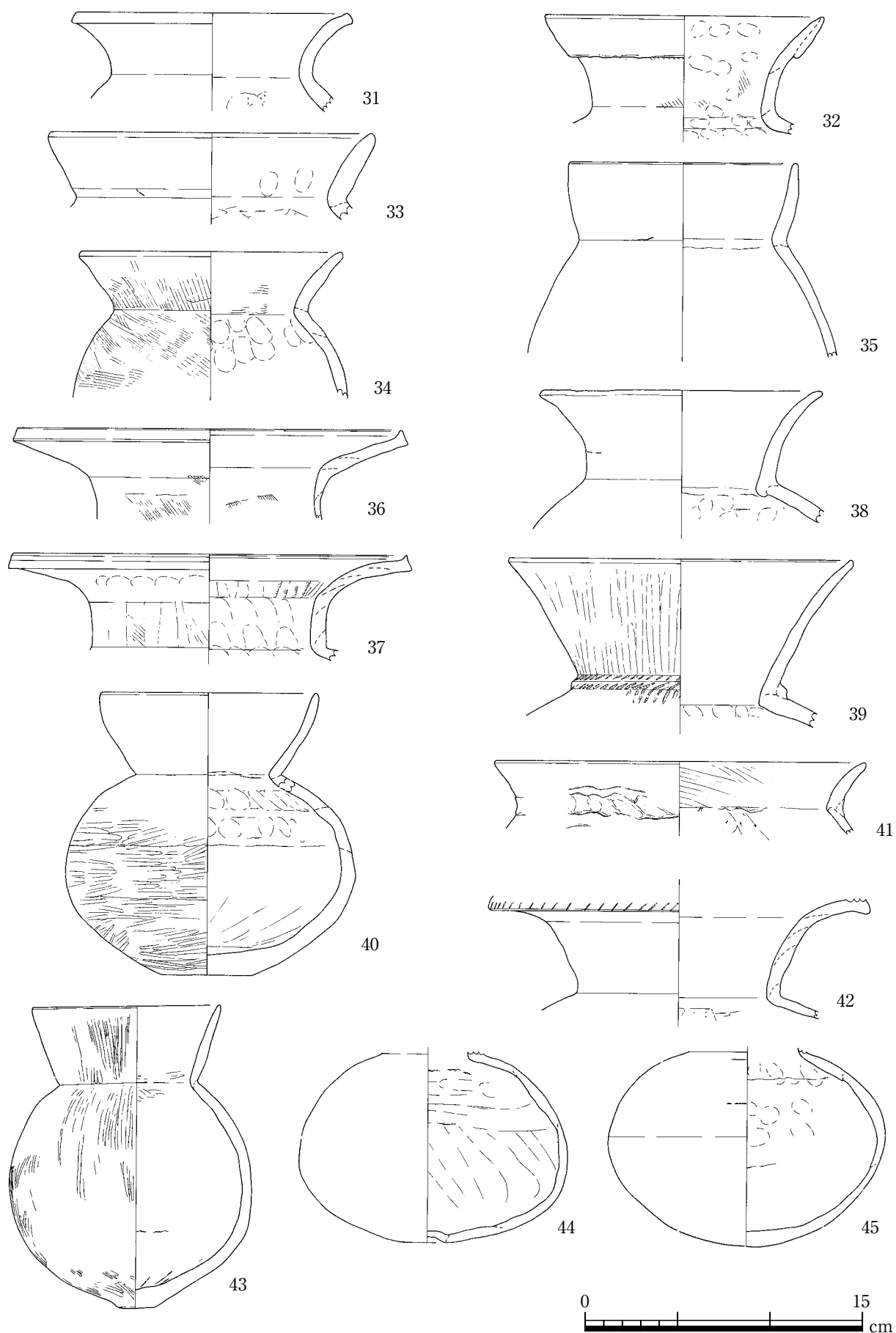


図18 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図3 (1/3)
31~45 溝3

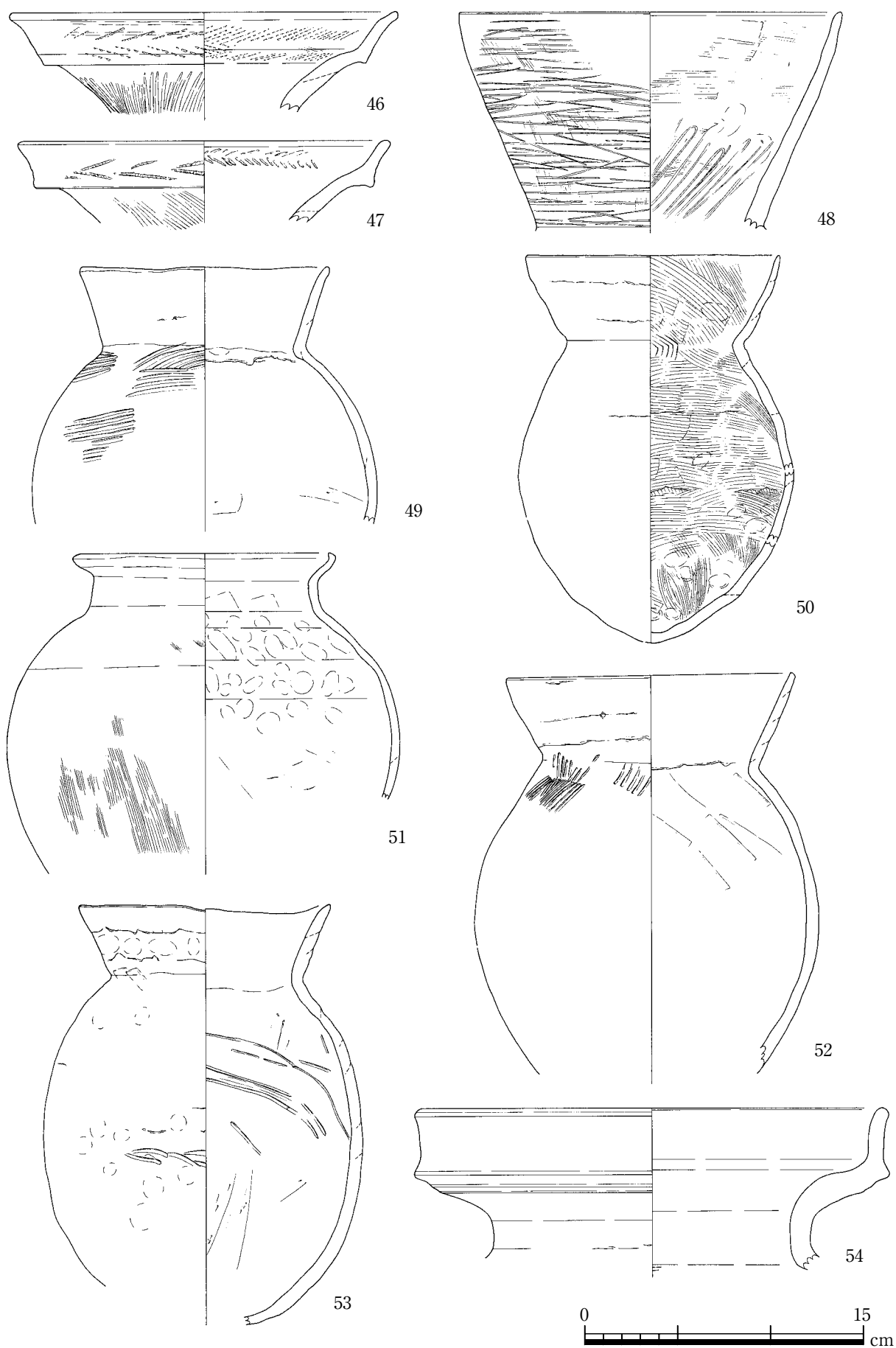
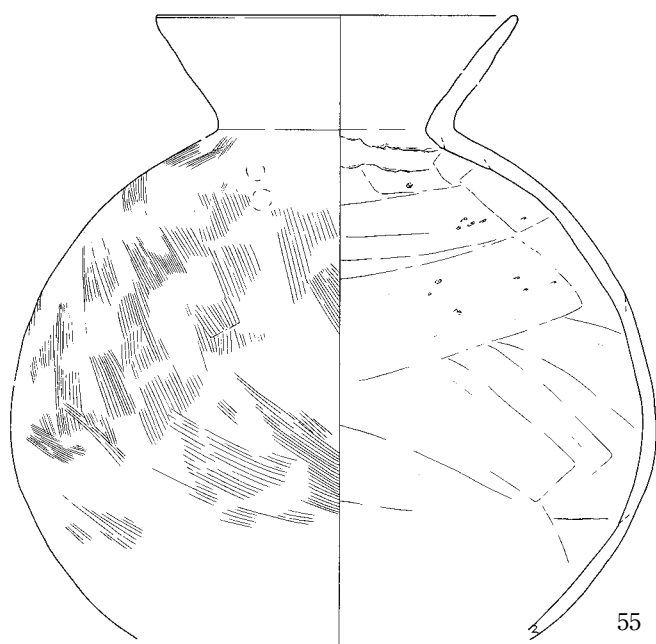
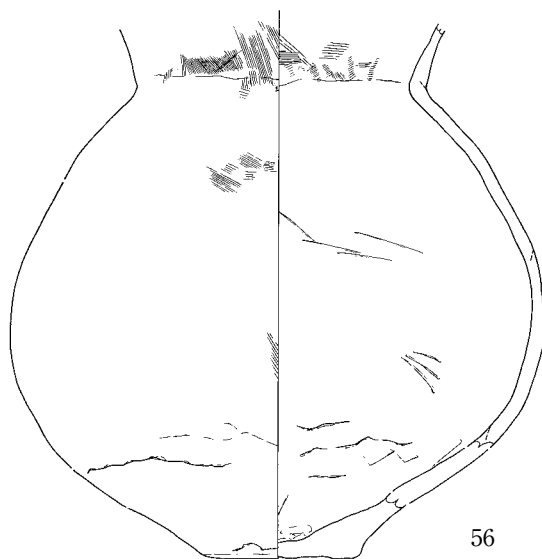


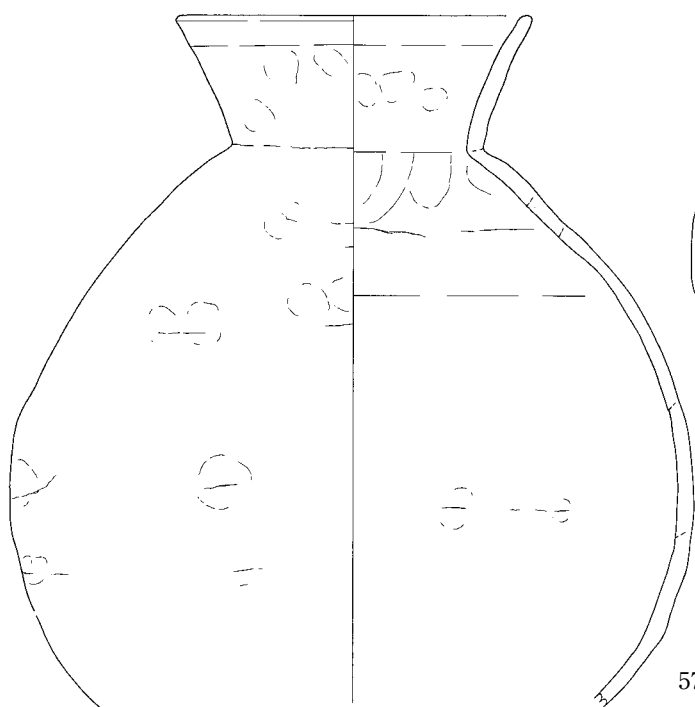
図19 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図4 (1/3)
46~54 溝3



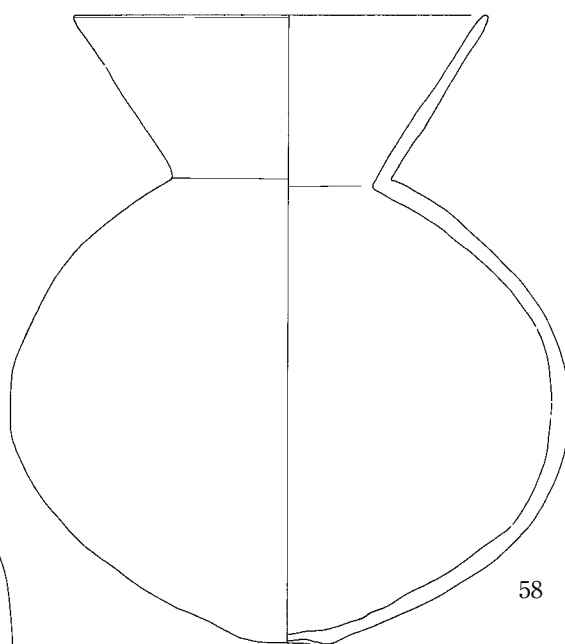
55



56



57



58



図20 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図5 (1/3)
55~58 溝3

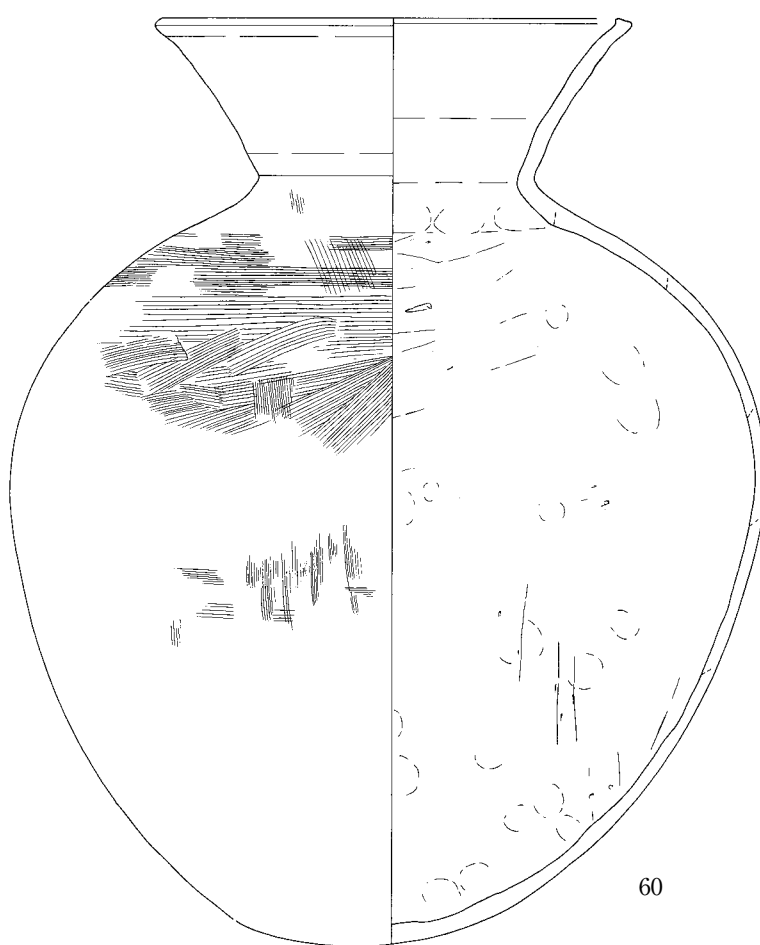
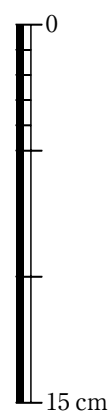
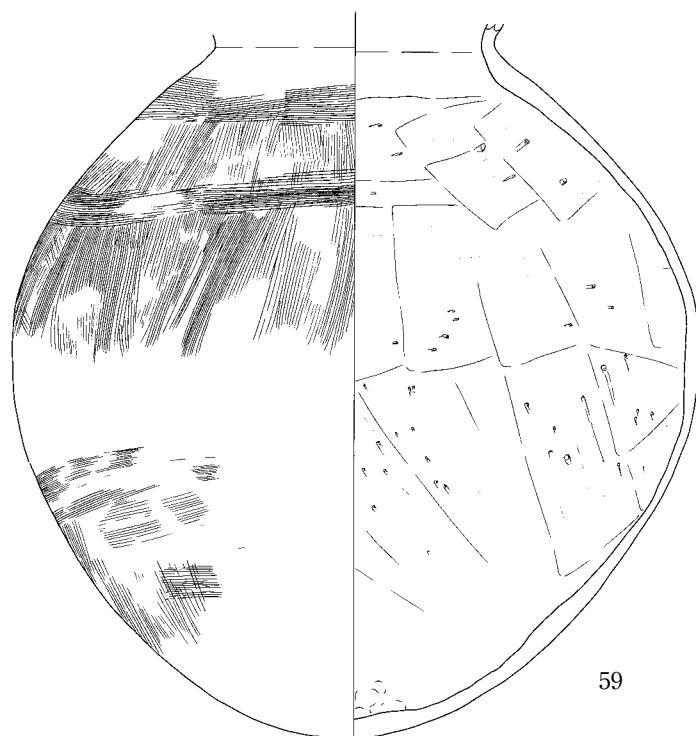


図21 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図 6 (1/3、60は1/4)
59・60 溝3

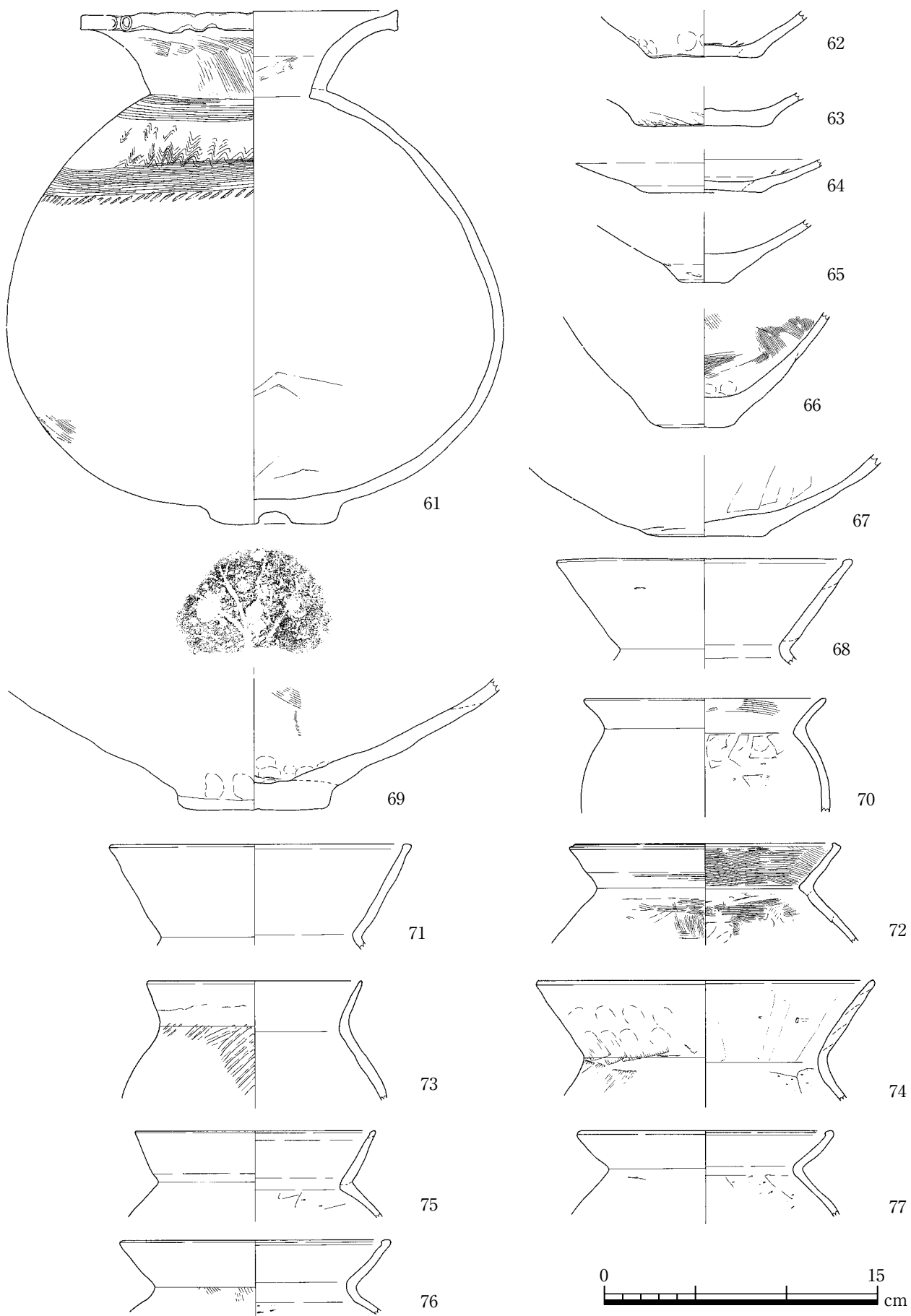


図22 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図7 (1/3)
61~77 溝3

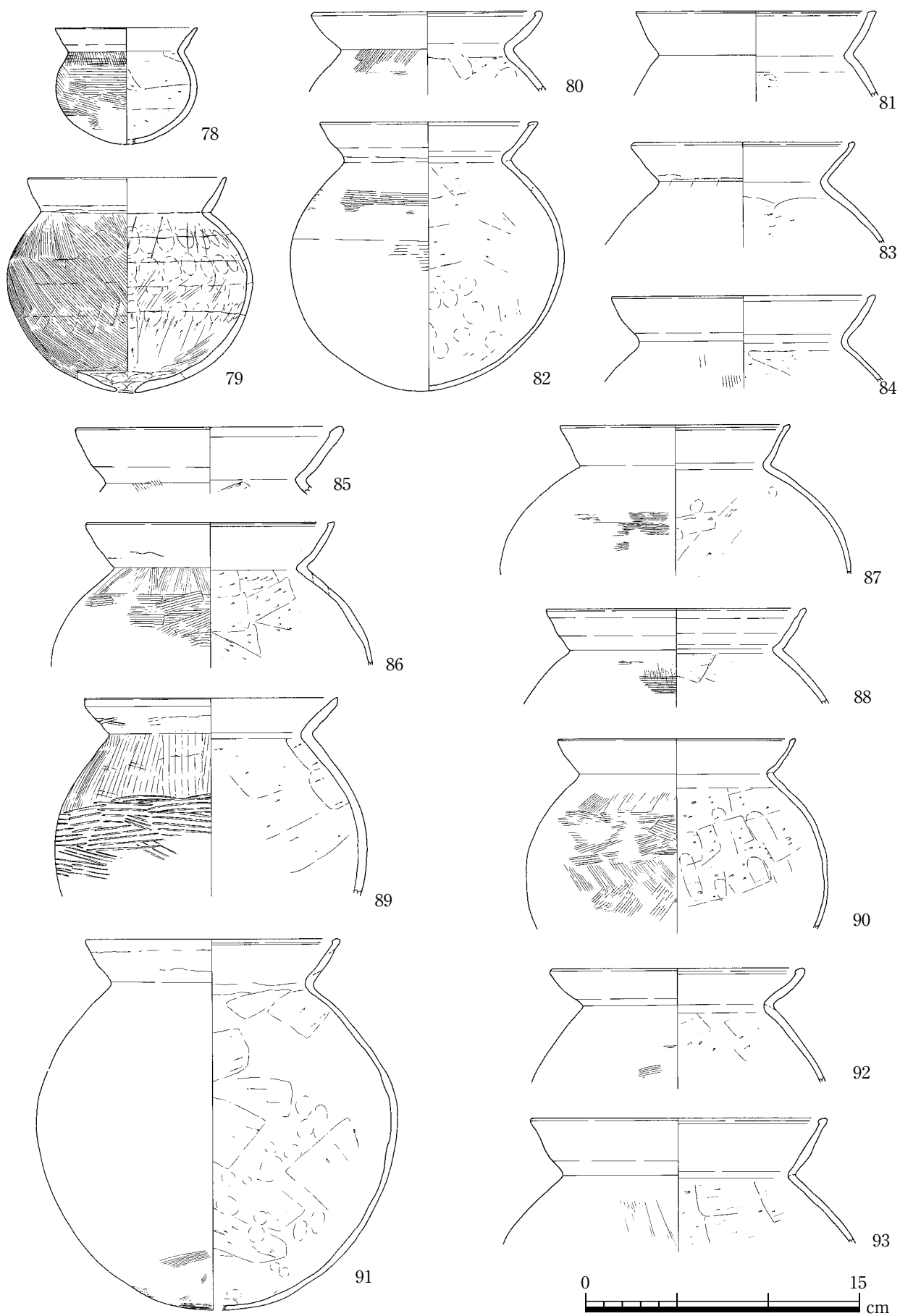


図23 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図8 (1/3)
78~93 溝3

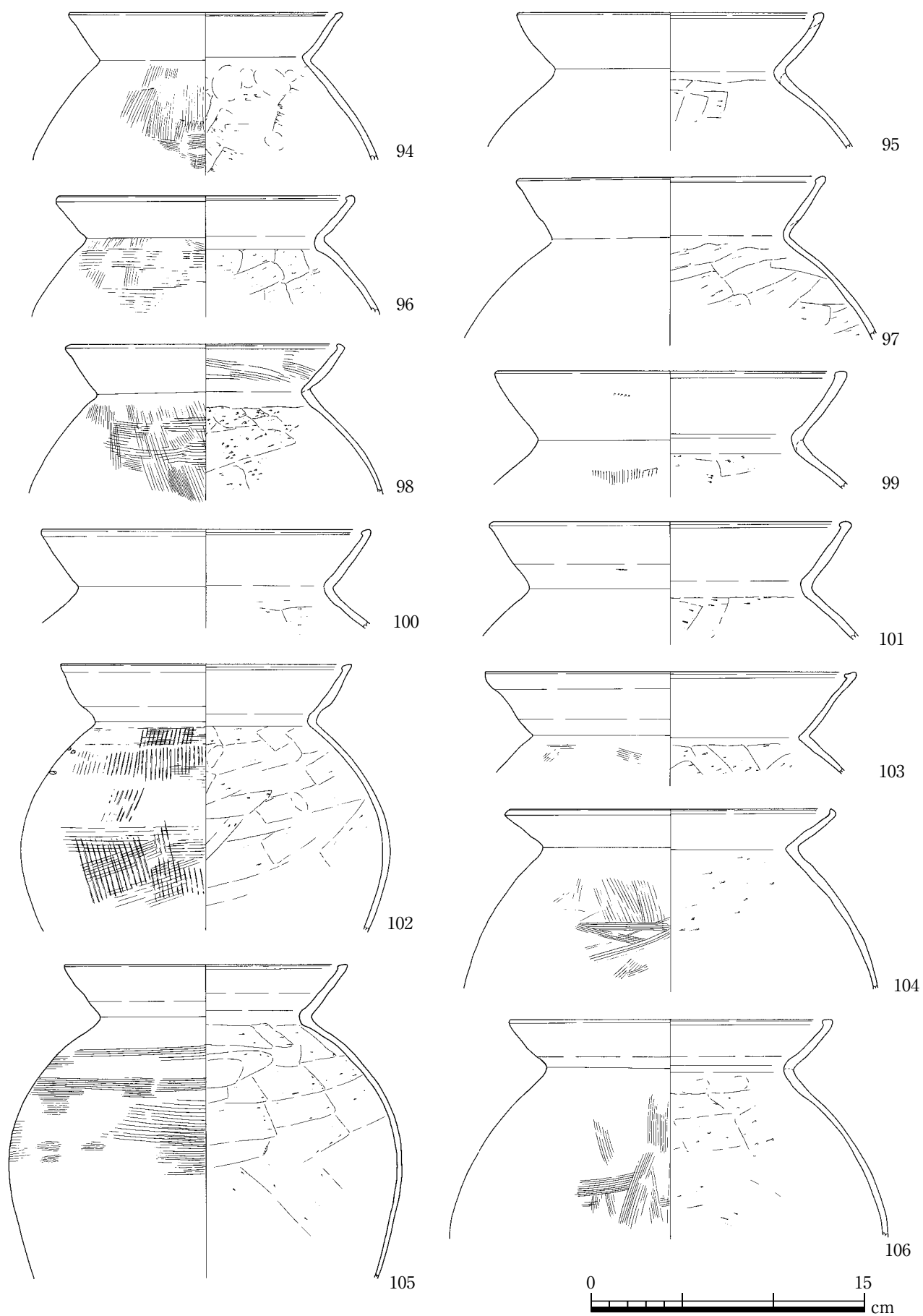


図24 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図9 (1/3)
94~106 溝3

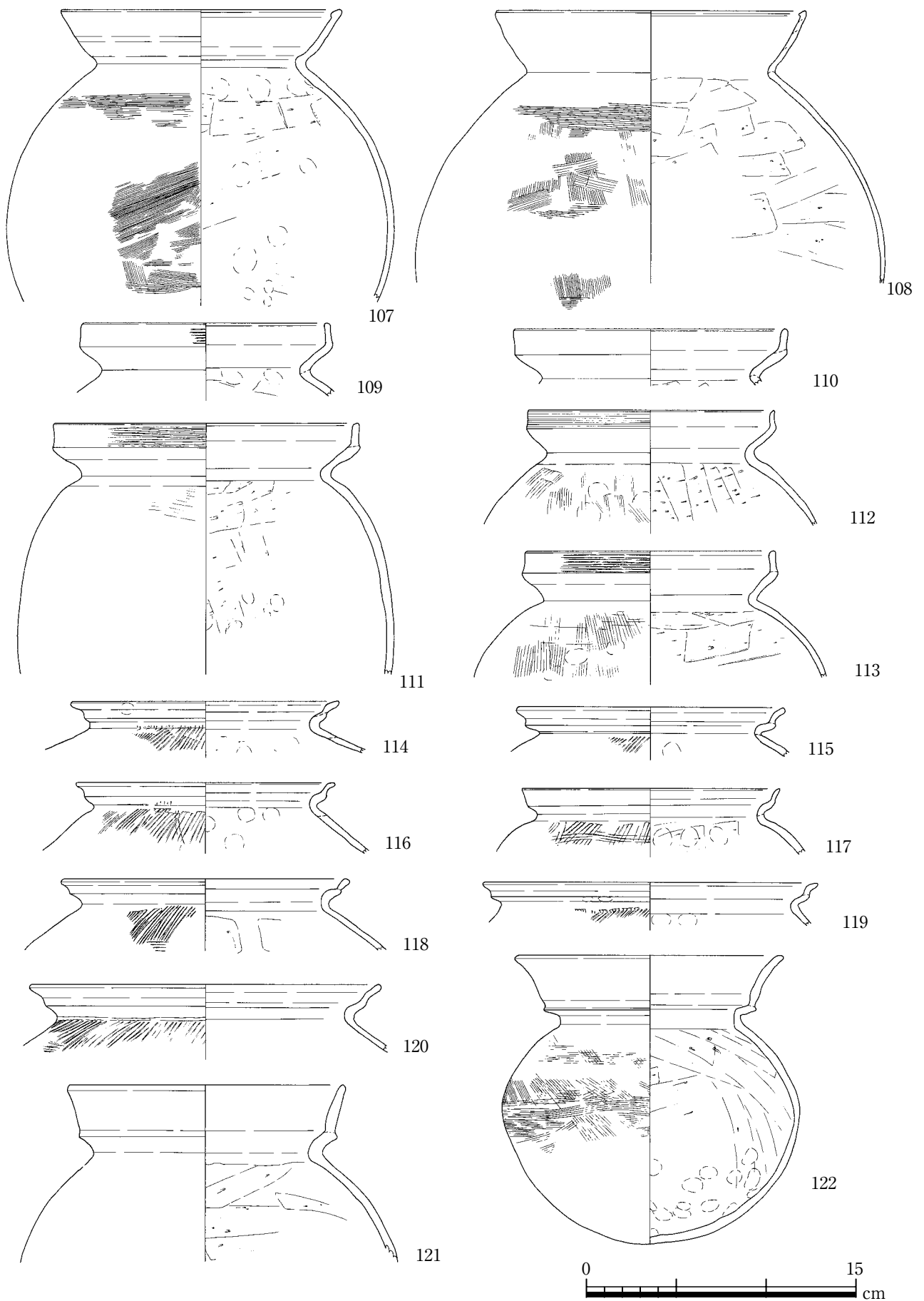


図25 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図10 (1/3)
107~122 溝3

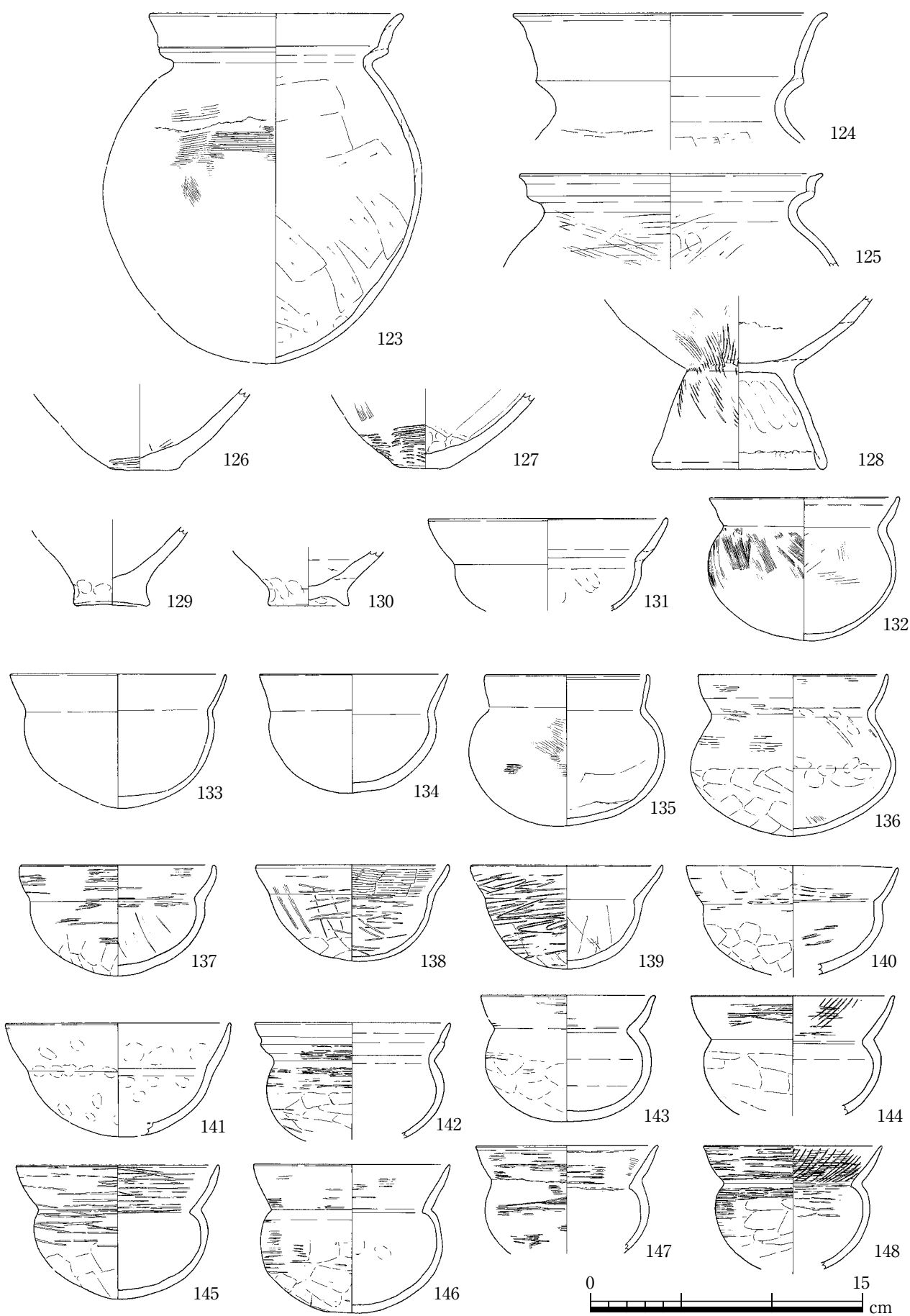


図26 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図11 (1/3)
123~148 溝3

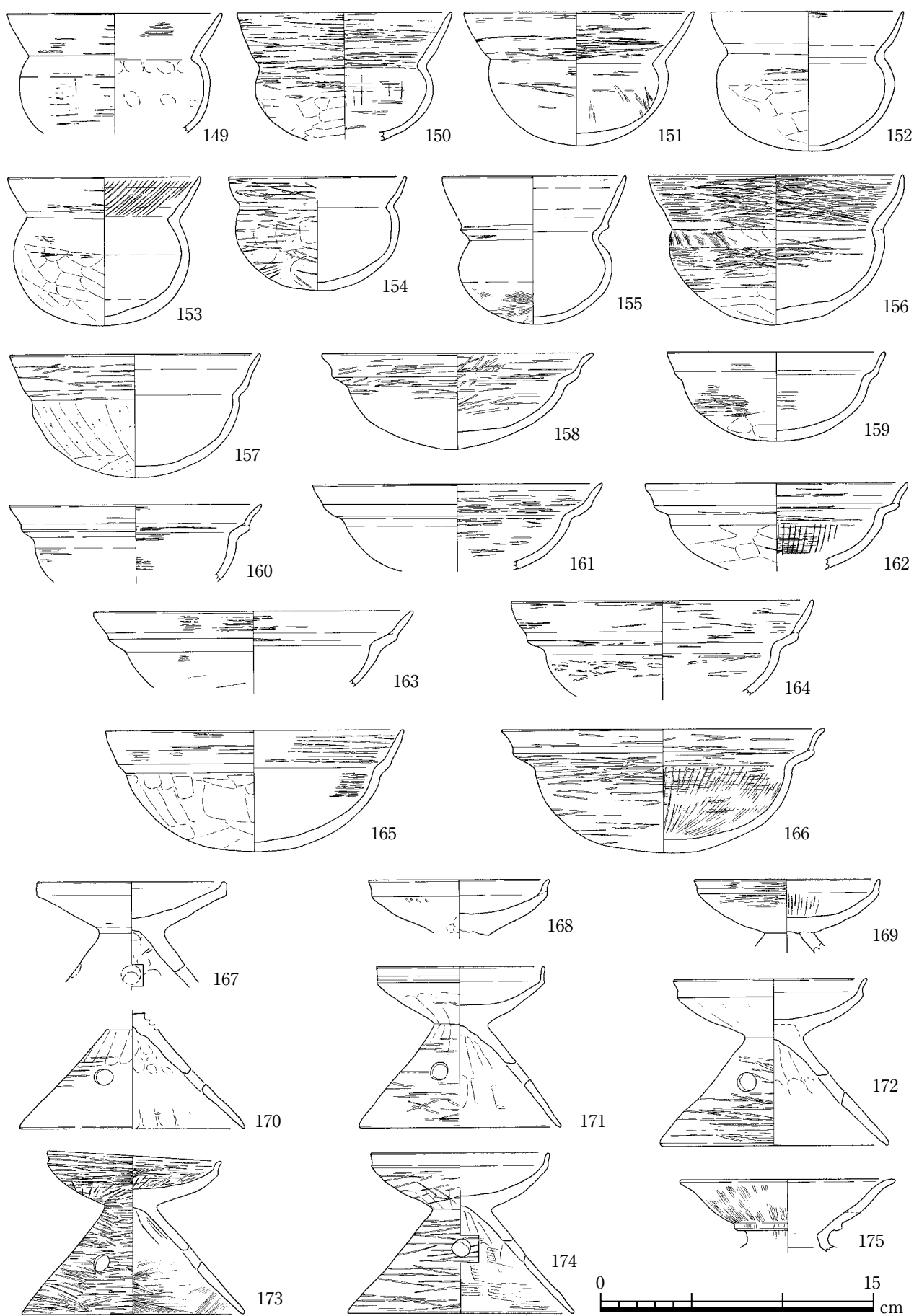


図27 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図12 (1/3)
149~175 溝3

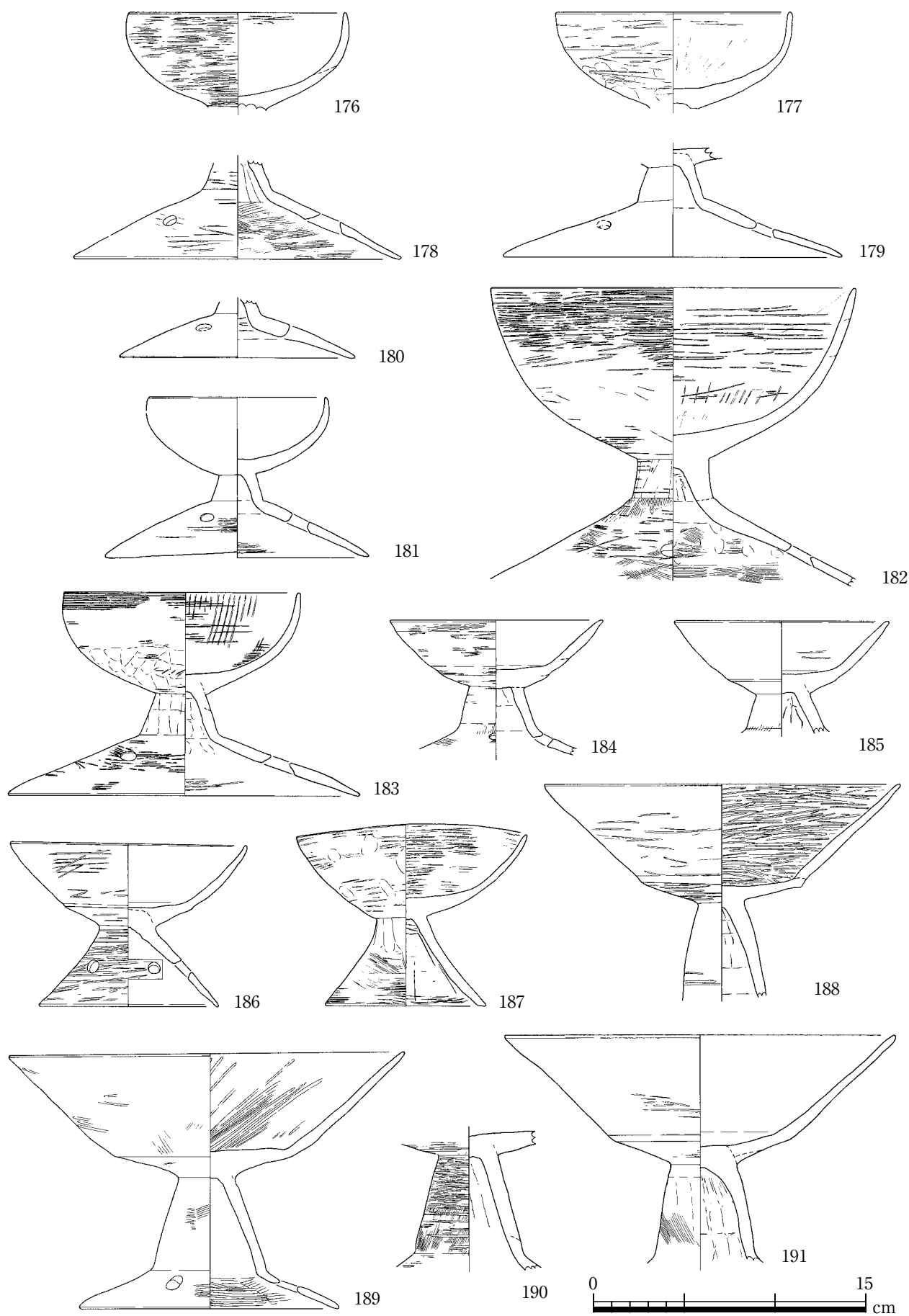


図28 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図13 (1/3)
176~191 溝3

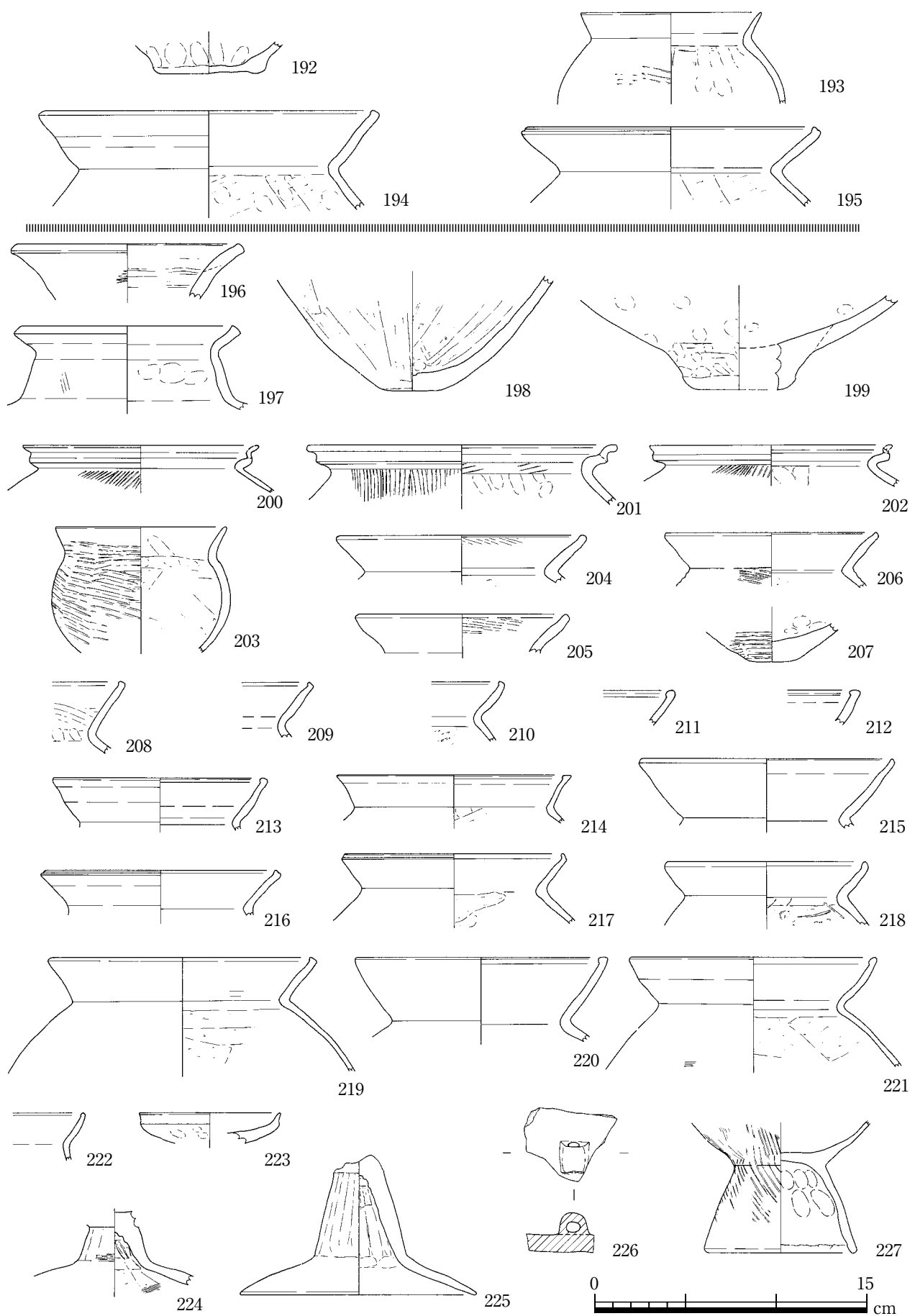


図29 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図14 (1/3)
192~195 土坑2 196~227 落ち込み1上層

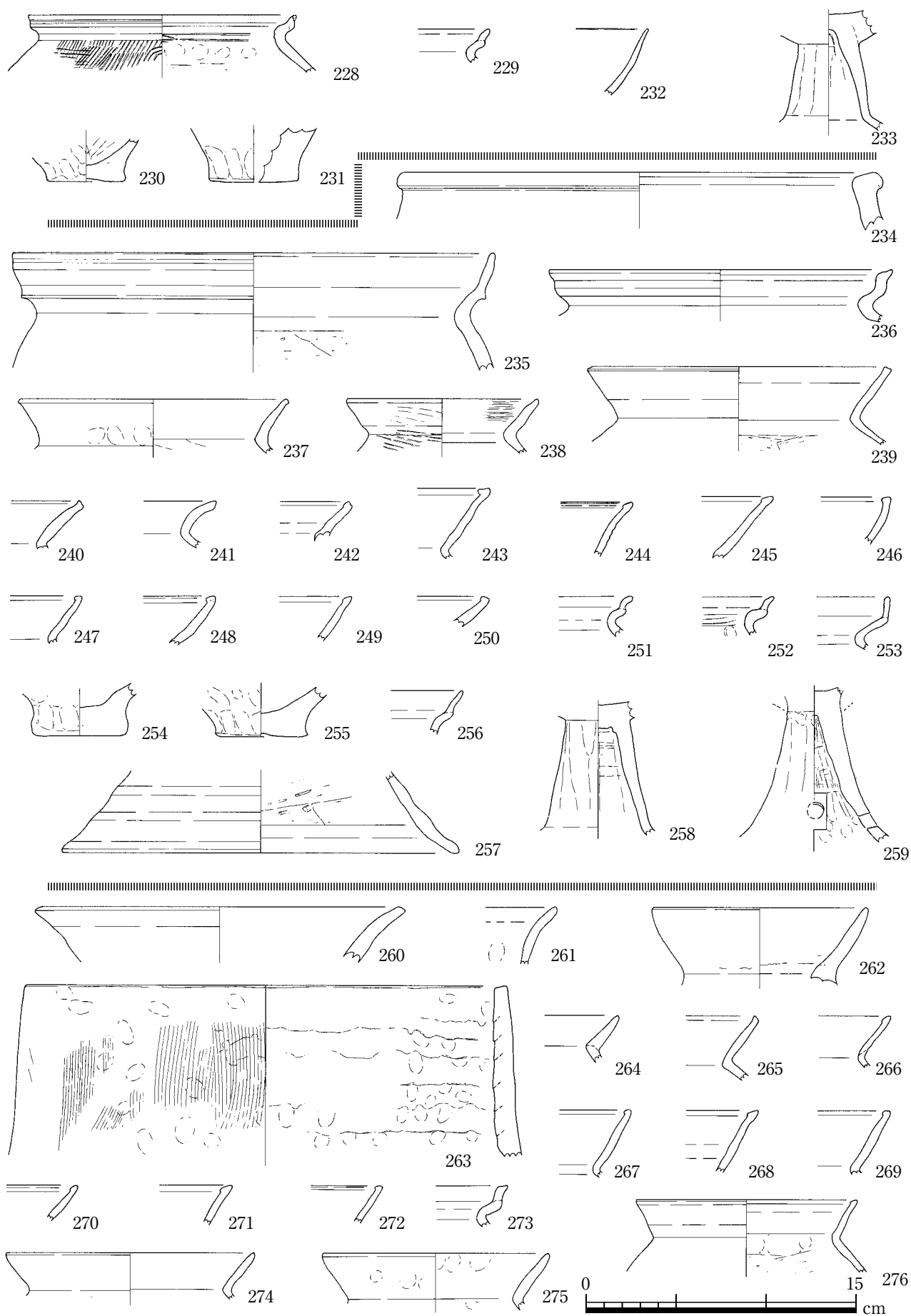


図30 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図15 (1/3)
 228~233 落ち込み1 上層埋土内45・61層 234~259 落ち込み1 上・下層埋土界面 260~276 落ち込み1 下層

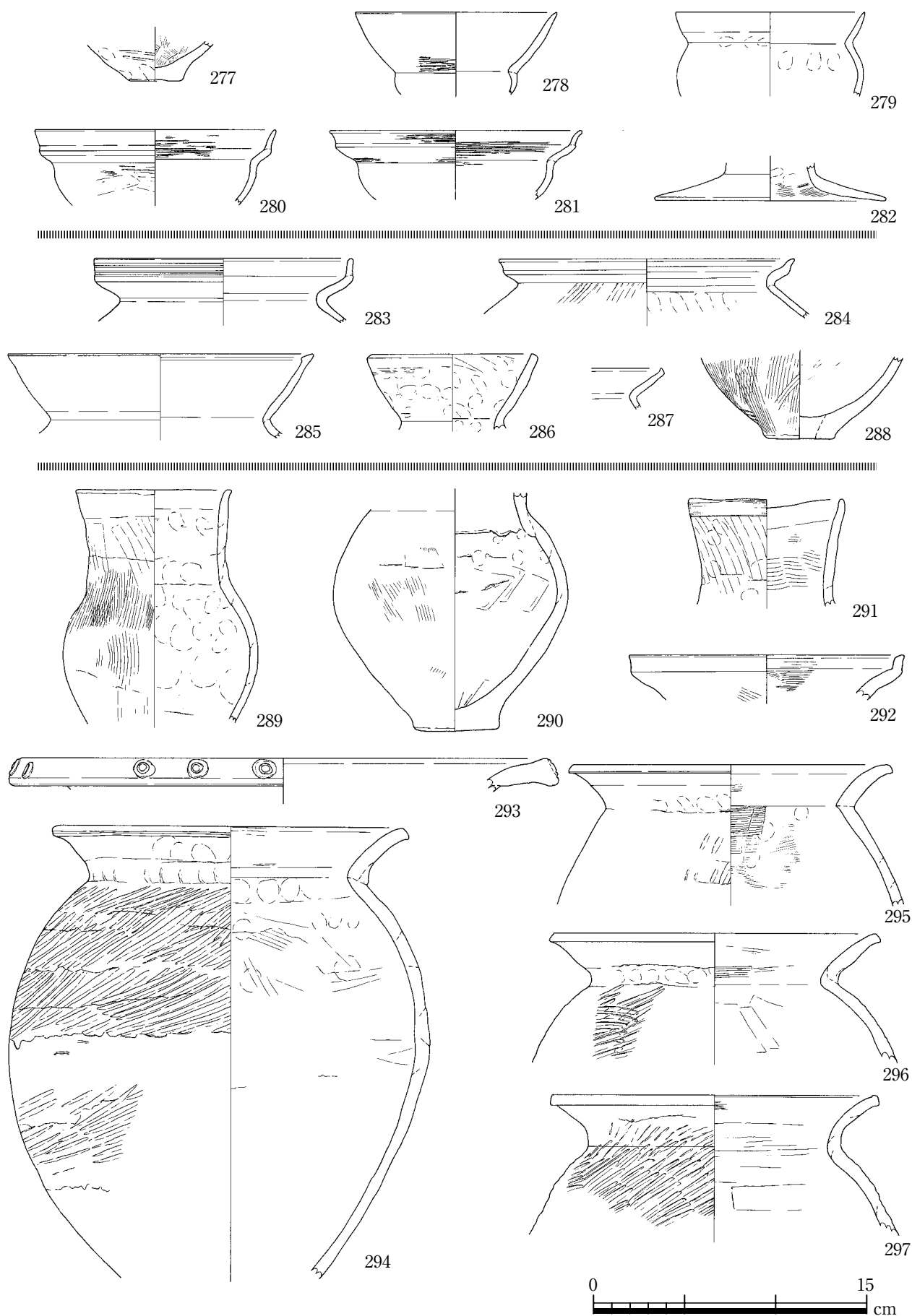


図31 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図16 (1/3)
 277~282 落ち込み1下層埋土内 283~285 B区ピット群 268, 287 E区ピット8 288 D区ピット10 289~297 土坑1

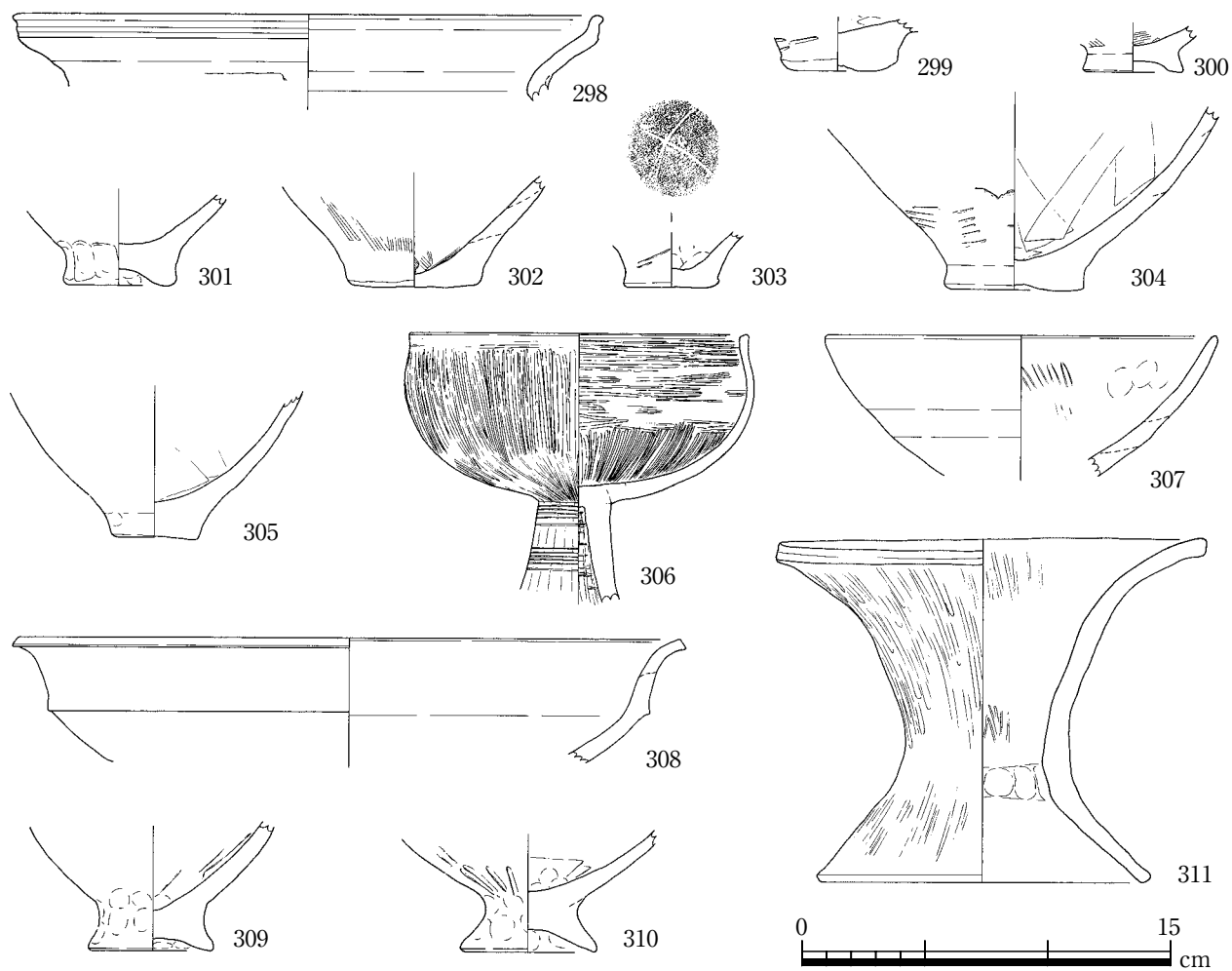


図32 纏向遺跡第42次調査出土土器実測図17 (1/3)
298~311 土坑1

(3) その他の遺物

1. 轆羽口 (図33・図版46-312)

土製品としては轆羽口の小片が1点出土している。先述した溝3の黒褐色土層からの出土であり、残存重量は17.08g、所属時期は他の土器群と同様に布留1式期古相段階のものと考えられるが、この羽口以外には鍛冶関連資料の出土が無いことから鍛冶遺構の正確な操業時期を限定する事は困難である。溝3出土土器の年代を下限として考えるならば布留1式期古相段階を含めてそれ以前には周辺で鍛冶遺構が操業していたことは間違いないと考えられ、纏向遺跡では第80・90・102次^{1)・2)・3)}調査出土の布留0式期の鍛冶資料に次いで古いものといえよう。

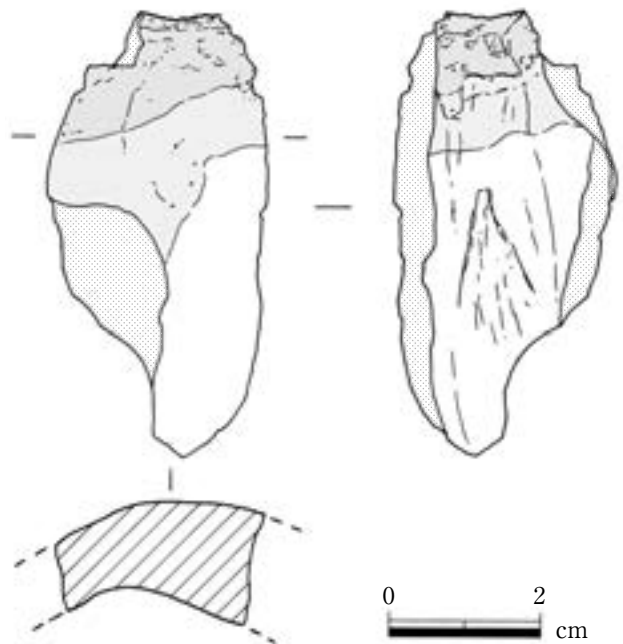


図33 溝3出土轆羽口実測図 (1/1)

全体の形状については小片のため本来の形を復元する事は困難だが、体部表面には取り付けによりできた可能性のある剥離痕が一部に認められる。図上で復元すると外径は9cm前後、口径は残存部分が判然としないが、およそ2～3cm前後と考えられる。器壁の厚みは図上段左図の右上部分だけが1.5cmと厚く、他の部分は8mm～1cmと非常に薄い。先端部分は風化により光沢は失われているものの黒色ガラス質滓となっており、小さな気孔が散在して認められる。焼成痕跡からは炉内への突出長は約9mm前後と見られ、胎土中には1～2mm前後とやや細かな長石粒が数多く含まれている。

色調は外面の最も強く焼成を受けた先端部分がN4/0灰色で、2次焼成部分が2.5Y5/0黄灰色、焼成を受けていない胎土そのものは10YR6/2灰黄褐色であり、内面では先端部分がN4/0灰色で2次焼成を受けた部分は先端に近い所が5YR4/2灰褐色、その他の部分が5YR6/6橙、焼成を受けていない胎土の部分は外面と同じ10YR6/2灰黄褐色であった。先端の溶解や体部の色調の変化から見て、高温での操業は考えられない。

1. 石鏃 (図34・図版46-313)

調査区西側の遺構面を覆う包含層より出土したものである。取り上げ時の出土層位は淡灰褐色砂質土層であったが、記録の不備のため詳細な出土地点は判然としない。材質はサヌカイト製で石鏃の全長は2.66cm、最大幅1.7cm、最大厚7mm、重量は2.05gで欠損は認められない。形態からは縄文時代ものと判断されるが、現在までの調査では西方約200mの地点で行われた纏向遺跡第86次⁴⁾調査地の旧河道内からは東側から流れてきたと考えられる数点の縄文時代後期の土器片や

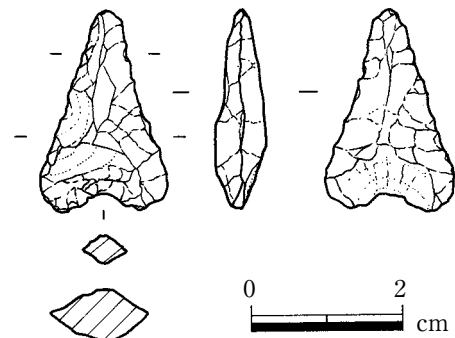


図34 包含層出土石鏃実測図 (1/1)

サヌカイト製の石鏃1点と数点の石屑が少量出土しており、調査区周辺から東側の微高地上に後期の居住区が展開する可能性も考えられる。今後の調査に期待したい。

3. 砥石（図35・図版46－314）

調査区内B地区のピット15（図6のP-15ではない）より出土したものとの記録が残るが、取り上げ時の記録の欠落により平面図上のどのピットから出土したものかは明らかではない。従って所属時期も明らかなものではないが、先述したようにB地区のピット群の多くが概ね布留式期前半期に掘削された可能性が高いことから本資料もこの頃のものである可能性が高いと考えている。

砥石そのものはその殆どが欠損してしまっており、本来の形状については知る由もないが、図上の正面及び向かって右側側面には僅かながら鉄製品を研いだと見られる滑らかな面が残存していた。また、正面の中央左側には使用時についたと見られる長さ3.9cm、幅2mmの溝状の比較的大きなケズリ痕が認められ、他の部分には擦痕を確認することが出来た。なお、残存する石材の全長は10.5cm、厚みは2.1cmで研磨痕の残る面は最大幅1.7cm、重量は38.70gであった。（橋本）

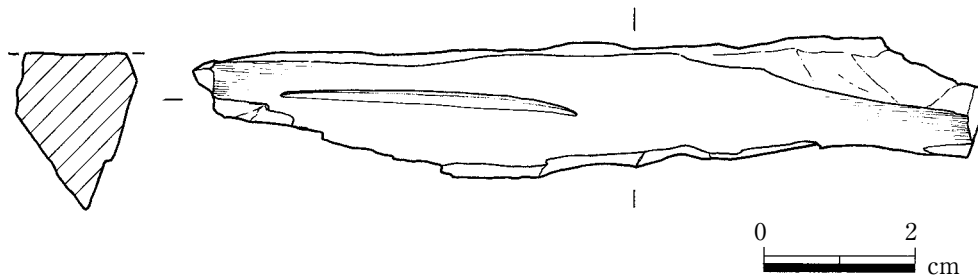


図35 B区ピット内出土砥石実測図（1/1）

【註記】

- 1) 橋本輝彦「纏向遺跡第80次発掘調査報告」『平成6年度国庫補助事業による発掘調査報告書2』桜井市教育委員会 1995
- 2) 橋本輝彦「纏向遺跡第90次発掘調査概要報告」『平成8年度国庫補助事業による発掘調査報告書』桜井市教育委員会 1997
- 3) 青木香津江「桜井市纏向遺跡第102次（勝山古墳第1次）発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1997年度』奈良県立橿原考古学研究所1998
- 4) 橋本輝彦「纏向遺跡第86次発掘調査報告」『平成7年度国庫補助事業による発掘調査報告書』桜井市教育委員会 1996

表 1 纏向遺跡第42次調査出土埴輪観察表 (1)

図番号 図版番号	地区・層位	器種 部位	法量cm ※()は復元値			調整技法		突帯 (断面・突出 ・突帯間隔設定)	色調	胎土	備考
			直径	高さ	厚	外面	内面				
9-10-1 25-26-1	B区拡張落ち込み1	鶏形	(円筒基部18.8cm)	(全高76.8cm)	—	ナデ	ナデ	各辺を強くなでる 突出1.5cm	10YR7/3にぶい黄橙	精良。1mm大の長石粒・ 金雲母微粒を多く含む。	・外面全体に赤色顔料 を塗布
11-2 27-2	B区拡張落ち込み1	冠帽形	(円筒基部 底径23.6cm ・最細部21.8cm)	(全高59.8cm)	—	指ナデ	ナデ	扁平 突出0.6cm	10YR 8/1～8/2 白灰	精良。石英・長石・金雲 母微粒を少量含む。 全体に赤色顔料を塗布 (7R 3.5/11.5 ラッカーレ ット)	
12-3 46-3	B区拡張落ち込み1下層 暗灰褐色粘質土	冠帽形?			0.9cm	横ナデ	指ナデ	—	10YR7/3にぶい黄橙	精良。0.5～1mm大の長 石粒・雲母の微粒を含む。	・冠端部より厚い、 ・縦線刻あり ・表面に赤色顔料 (10R4/8赤)濃く残る
12-4 29-4	B区拡張落ち込み1上・下層 埋土界面 黒褐色土下層	冠帽形?			0.9～ 1.1cm	指ナデ	指ナデ	—	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:2.5Y7/3浅黄	良。0.5～1mm大の長石 粒・雲母の微粒を含む。	
12-5 29-5	B区拡張落ち込み1下層 暗灰褐色粘質土	冠帽形?			0.6cm	指ナデ	—	—	10YR7/3にぶい黄橙	精良。0.5mm長石粒・金 雲母を含む。	・赤色顔料(10R4/8赤) 塗布
12-6 29-6	B区拡張落ち込み1下層 暗灰褐色粘質土	不明			0.7～ 0.9cm	ナデ	ナデ	—	外:10YR7/2にぶい黄橙 内:10YR7/3浅黄	精良。1mm大の長石粒・ 金雲母微粒少量含む。	・縦方向に帯状の剥離 があり、剥離面に沈線 が入る ・外面に赤色顔料残る ・器壁が薄い
12-7 29-7	B区拡張落ち込み1下層 暗灰褐色粘質土	不明			1.0cm	指ナデ	指ナデ	—	10YR7/3にぶい黄橙	1～0.5mm大の長石粒・ 金雲母の微粒含む。	・帯状の剥離がみられ、 剥離面に沈線が入る ・径0.7cm程度の小円孔 あり ・外面に赤色顔料 (10R4/8赤)濃く残る
12-8 29-8	B区拡張落ち込み1上・下層 埋土界面 黒褐色土下層	不明形象			1.2cm	ナデ	ナデ	—	外:5YR7/4にぶい橙 内:7.5YR7/4にぶい黄橙	精良。0.5～1mm大の長 石粒・雲母の微粒を含む。	・2条の平行沈線あり
12-9 29-9	B区拡張落ち込み1上・下層 埋土界面 黒褐色土下層	不明形象			0.8～ 1.0cm	指ナデ	指ナデ	—	10YR7/3にぶい黄橙	良。1mm大の長石粒多 く、1mm大のチャート少 しと金雲母の微粒子を 含む。	・径0.9cm程度の小円孔 あり ・赤色顔料残る ・幅0.8cm程度の強い指 ナデ
13-10 28-10	B区拡張落ち込み1	朝顔形	(口縁部53.0cm) 口縁部突帯上27.7cm 頸部突帯上17.1cm 胴部33.3～34.6cm	残高42.2cm 一次口縁8.0cm 肩部14.2cm 胴部最上段17.1cm	0.9～ 1.2cm	斜ハケメ 縦ハケメ 板ナデ	ハケメ 指ナデ	断面台形 突出0.8～1.1cm 方形刺突	10YR 7/3にぶい黄橙	精良。石英・長石・金雲母・ 微粒を少量含む。	
13-11 28-11	B区拡張落ち込み1	朝顔形	口縁部64.4cm 口縁部突帯上38.6cm 頸部突帯上25.3cm 胴部42.6～44.3cm	残高68.8cm 二次口縁10.6cm 一次口縁9.7cm 肩部18.2cm 胴部最上段18.0cm	0.9～ 1.2cm	板ナデ	ナデ	各辺を強くなでる 突出0.9～1.2cm 断続凹線	7.5YR 6/3 にぶい褐	良。1mm以下の長石粒 が多く、3～4mm程度の ものが多い箇所もある。 金雲母の微粒含む。	・赤色顔料残る

表2 纏向遺跡第42次調査出土土輪観察表 (2)

図番号 図版番号	地区・層位	器種 部位	法量cm ※()は復元値			調整技法		突帯 (断面・突出 ・突帯間隔設定)	色調	胎土	備考
			直径	高さ	厚	外面	内面				
14-12 29-12	B区拡張落ち込み1上・下層 埋土界面 黒褐色土下層	朝顔形? 一次口縁	(突帯下約31.2cm)		0.75～ 1.1cm	指ナデ 板ナデ	指ナデ 板ナデ	突帯剥離 方形刺突(0.4× 0.4cm)	7.5YR7/4にぶい橙	精良。0.5～2mm大の長 石粒と金雲母微粒を少 量含む。	
14-13 29-13	B区拡張落ち込み1上・下層 埋土界面 黒褐色土下層	朝顔形? 胴部	(30.8cm)		0.8～ 1.0cm	横ハケメ	縦ハケメ	—	外:10YR7/3にぶい黄橙 ～N3/暗灰 2.5YR6/6橙	良。1～3mm大の長石 粒多い。金雲母の微粒 含む。 ・方形透孔の一部が残 存 ・内面は粘土紐の継ぎ 目残す ・ハケメ 5本/cm	
14-14 29-14	B区拡張落ち込み1下層 暗灰褐色粘質土	朝顔形? 胴部	(30cm～32cm ・突帯上33.8cm)		0.8～ 1.0cm	板ナデ	指ナデ	断面台形 突出0.9cm	外:5Y6/1灰～5/1灰 内:2.5YR7/6橙	良。0.5～3mmの長石粒 と金雲母微粒が多い。	
14-15 29-15	B区拡張落ち込み1下層 暗灰褐色粘質土	朝顔形? 肩部?			1.1cm	ナデ	ナデ	突帯剥離 方形刺突(0.4× 0.4cm)	10YR7/3にぶい黄橙	精良。0.5～1mm大の長 石粒と金雲母の微粒含 む。 ・両面に赤色顔料 (10R4/8赤)を塗布	
14-16 29-16	B区拡張落ち込み1下層 暗灰色粘質土	朝顔形? 胴部	(約30cm)		0.9cm	ナデ	指ナデ	各辺を強くなる 突出1.0cm	10YR7/3にぶい黄橙	精良。0.5～1mm大の長 石粒と金雲母の微粒含 む。 ・外面に赤色顔料を塗 布	
14-17 29-17	B区拡張落ち込み1上・下層 埋土界面 黒褐色土下層	朝顔形? 胴部			0.7～ 0.9cm	板ナデ	板ナデ	突帯剥離 断続凹線	10YR6/3にぶい黄橙	精良。0.5～1mmの長石 粒と金雲母の微粒含む。	・内面は粘土紐の継ぎ 目残す
14-18 29-18	B区拡張落ち込み1上・下層 埋土界面 黒褐色土下層	朝顔形? 胴部			1.1cm	ナデ	指ナデ	突帯剥離 断続凹線・沈線	10YR7/3にぶい黄褐	精良。1mm以下の長石 粒と金雲母の微粒含む。	
14-19 29-19	B区拡張落ち込み1上・下層 埋土界面 黒褐色土下層	朝顔形? 胴部			1.0～ 1.2cm	ナデ	ナデ	各辺を強くなる 突出1.1cm 方形刺突か凹線	10YR7/3にぶい黄橙	精良。1mm以下の長石 粒と金雲母の微粒含む。	・長方形透孔の上辺が 残存
14-20 29-20	B区拡張落ち込み1下層 暗灰褐色粘質土	朝顔形? 突帯			—	—	—	断面M字形 突出1.2cm 断続凹線	10YR7/4にぶい黄橙	良。1mm大の長石粒が 多く、金雲母の微粒含む。	
14-21 29-21	B区拡張落ち込み1上・下層 埋土界面 黒褐色土下層	朝顔形? 胴部			0.85～ 1.1cm	ハケメ のち ナデ	縦ハケメ	—	10YR7/3にぶい黄橙～ N4/灰(黒斑) 内:5YR6/4にぶい橙	良。1～2mm大の長石 粒多い。金雲母の微粒 少量含む。 ・外面に赤色顔料が残 存 ・方形透孔の一部が残 存 ・ハケメ 4～5本/cm ・内面に粘土紐の継ぎ 目残る	
14-22 29-22	B区拡張落ち込み1上層 暗灰褐色粘質土 B区拡張落ち込み1上層 淡灰色混土粗砂層	朝顔形? 胴部	(約28～31.5cm)		0.7～ 1.2cm	板ナデ ハケメ	ハケメ ナデ	断面台形 突出0.9cm	外:2.5Y7/2灰黄～ 7.5YR7/6橙	良。1～3mm大の長石 粒が多く、黒・金雲母の 微粒含む。 ・方形透孔の一部が残 存 ・ハケメ 4～5本/cm	
14-23 29-23	B区拡張落ち込み1下層 暗灰褐色粘質土	朝顔形? 突帯			—	—	—	断面台形 突出1.1cm 方形刺突	外:10YR7/3にぶい黄橙 ～N9/灰	非常に精良。0.5mm大 の長石粒と金雲母の微 粒含む。	

表3 経向遺跡第42次調査出土埴輪観察表(3)

図番号	図版番号	地区・層位	器種 部位	法量cm ※()は復元値			調整技法		突帯 (断面・突出 ・突帯間隔設定)	色調	胎土	備考
				直径	高さ	厚	外面	内面				
14-24	29-24	B区拡張落ち込み1上・下層 埋土界面 黒褐色土下層	朝顔形? 突帯			—	—	—	断面M字形 突出1.1cm 方形刺突	10YR7/3にぶい黄橙	非常に精良。長石粒と 金雲母が微粒子状に入 る。	
14-25	29-25	B区拡張落ち込み1上・下層 埋土界面 黒褐色土下層	朝顔形? 突帯			—	—	—	扁平 突出0.8cm	2.5Y4/1黄灰	精良。長石粒と金雲母 が微粒子状に入る。	・赤色顔料残る
15-26	29-26	B区拡張落ち込み1下層 暗灰褐色粘質土	朝顔形? 胴部			0.55～ 0.7cm	ナデ	ナデ	—	10YR7/3にぶい黄橙	精良。0.5～1mm大の長 石粒が多く、金雲母の 微粒含む。	・外面に赤色顔料を塗 布 ・方形透孔の一部が残 存 ・器壁が薄い
15-27	29-27	B区拡張落ち込み1下層 暗灰褐色粘質土	胴部? ヒレ?			0.9～ 1.15cm	横ハケメ	縦ハケメ	—	7.5YR 7/4にぶい橙	良。1～2mm大の長石粒・ 金雲母の微粒含む。	・端面へラケズリ ・朝顔形埴輪の透孔の 一辺が ・片面に赤色顔料残る ・ハケメ 5本/cm
15-28	29-28	B区拡張落ち込み1上層 暗褐色土下層	朝顔形? 底部			1.5～ 1.8cm	縦ハケメ	ナデ	—	10YR7/4にぶい黄橙 (部分的に7.5YR7/4に ぶい橙)	精良。0.5～1mm大の長 石粒と金雲母の微粒を 少量含む。	・ハケメ 6本/cm
15-29	29-29	B区拡張落ち込み1上層 暗褐色土下層	朝顔形? 底部	(約45cm)		1.4cm	斜ハケメ	横ハケメ のち 指ナデ	—	外:7.5YR7/4にぶい黄 橙～5Y6/1灰(黒斑) 内:10YR7/3にぶい黄橙	良。1～2mm大の長石 粒を含む。	・底面の2ヶ所に棒状痕 跡残る ・ハケメ 7本/cm

表 4 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (1)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
16-1 30-1	溝2 灰褐色粘質土	甕 Y	I-C-2b	C:(16.5)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. 押捺A→スリナデヨコICa	O. マメヅ不明 i. ケズリA		O. 7.5YR6/6橙 ～10YR5/2灰黄褐 i. 10YR7/3にぶい黄橙	
16-2 30-2	溝2 灰褐色粘質土	甕 Y	II-B-2a	C:(14.8)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. 押捺A		O. 10YR5/2灰黄褐 i. 10YR6/3にぶい黄橙	
16-3 30-3	溝2 灰褐色粘質土	底部 (甕)	3-A--	B:(4.7)				O. 2.5Y4/1黄灰 i. 10YR6/3にぶい黄橙	
16-4 30-4	溝2 灰褐色粘質土	底部 (甕)	3-C--	B:4.6				O. 10YR7/3にぶい黄橙 i. 10YR7/4にぶい黄橙	底部内側より 焼成前穿孔
16-5 30-5	溝2 灰褐色粘質土	甕 Y	I-B--	W:17.0 B:3.6		O. タタキ i. スリナデヨコIAb	30/CM	O. 10YR8/2灰白～ 7.5YR8/4浅黄橙 i. 10YR8/2灰白～ 7.5YR8/4浅黄橙	
16-6 30-6	溝2 灰褐色粘質土	甕 Y	I-D-1a	H:20.6 C:12.7 W:17.2 B:4.3	O. スリナデICa i. スリナデナナクIAa	O. タタキ i. スリナデタテIAb	20/CM	O. 5YR7/4にぶい橙 ～5YR6/4にぶい橙 i. 5YR7/6橙～5YR 6/4にぶい橙	
16-7 30-7	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	II-C-5e1	C:(13.8)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリA		O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
16-8 30-8	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	II-C-5e2	C:(13.4)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコIAa i. 押捺A→ケズリA	8/cm	O. 7.5YR6/2灰褐 i. 7.5YR7/3にぶい橙	
16-9 30-9	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	II-C-5e1	C:(13.9)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリA		O. 7.5YR6/4 にぶい橙 i. 2.5YR7/6橙	
16-10 30-10	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	III-C-5b	C:(11.1)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコIAa i. ケズリA	12/cm	O. 5YR7/6橙 i. 7.5YR7/4にぶい橙	

表5 経向遺跡第42次調査出土土器観察表(2)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
16-11 30-11	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅱ-C-5a	C:(11.7)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデICa i. 押捺A→ケズリA		O. 7.5YR7/4にぶい・橙 i. 7.5YR7/3にぶい・橙	
16-12 30-12	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅰ-C-5gi	C:(12.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコIB→ スリナデヨコIAa→ スリナデナナスIAa i. ケズリA	多/cm 10/cm 10/cm	O. 5YR7/4にぶい・橙 i. 10YR8/4浅黄橙	
16-13 30-13	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅰ-C-5ei	C:(15.3)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5YR6/3にぶい・橙 i. 7.5YR7/4にぶい・橙	
16-14 30-14	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅰ-C-5b	C:(16.6)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. マメツ i. ケズリA		O. 7.5YR6/3にぶい・橙 i. 7.5YR7/4にぶい・橙	
16-15 30-15	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅱ-C-5f	C:(12.4)	O. スリナデヨコIB i. スリナデヨコIB	O. スリナデヨコIAa i. 押捺A ケズリA	8/cm	O. 10YR7/4にぶい・黄橙 i. 10YR7/4にぶい・黄橙	
16-16 30-16	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅱ-C-5ei	C:(14.8)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコIAa i. ケズリA	7/cm 7/cm	O. 10YR7/2にぶい・黄橙 i. 10YR6/2灰黄褐	
16-17 30-17	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅰ-C-5d	C:(17.6)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコIAa i. ケズリA	7/cm	O. 10YR6/3にぶい・黄橙 i. 10YR6/3にぶい・黄橙	
16-18 30-18	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅰ-C-5gs	C:(19.0)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			O. 5YR7/6橙 i. 5YR7/6橙	
17-19 31-19	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅱ-C-5f	C:(14.2)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. マメツ不明 i. 押捺A→ケズリA		O. 5YR6/4にぶい・橙 i. 7.5YR6/3にぶい・橙	
17-20 31-20	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅱ-C-5ei	C:(14.2) W:(18.35)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデIAa i. (上半)スリナデタテIAa →スリナデICa (下半)ケズリA	8/cm 8/cm	O. 10YR6/3にぶい・黄橙 ～2.5YR4/1黄灰 i. 10YR6/3にぶい・黄橙 ～2.5YR4/1黄灰	

表6 経向遺跡第42次調査出土土器観察表(3)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
17-21 31-21	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	I-C-5e2	C:(14.6)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコIAa i. 押捺A→ ケズリA	11/cm	O. 7.5YR8/3浅黄橙 i. 10YR7/1灰白～ 10YR8/2灰白	
17-22 31-22	溝2 灰褐色粘質土	甕 F	I-C-5gi	H:26.9 C:17.6 W:24.9	O. スリナデヨコIB i. スリナデヨコIB	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコIAa i. ケズリA	4/cm 6/cm	O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙	
17-23 31-23	溝2 灰褐色粘質土	小形 丸底鉢	II-A1-a	C:(8.1) W:(10.4)	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. スリナデヨコIAb		O. 10YR7/3にぶい黄橙 ～7.5YR4/1褐灰 i. 10YR7/3にぶい黄橙 ～7.5YR4/1褐灰	
17-24 31-24	溝2 灰褐色粘質土	小形 丸底鉢	II-A1-2	H:8.1 C:8.6 W:9.5	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. (上半)スリナデタテIAa (下半)ケズリA i. (上半)押捺A (下半)ケズリA→ スリナデICa	9/cm	O. 5YR6/4にぶい橙 2.5YR6/3にぶい黄 i. 5YR6/4にぶい橙	
17-25 31-25	溝2 灰褐色粘質土	小形 丸底鉢	III-A1-a	H:6.3 C:12.85 W:11.3	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. ケズリA i. スリナデICa		O. 10YR7/4にぶい黄橙 ～7.5YR6/4にぶい橙 i. 10YR7/4にぶい黄橙 ～7.5YR6/4にぶい橙	
17-26 31-26	溝2 灰褐色粘質土	小形 丸底鉢	II-A1-a	H:6.4 C:12.6 W:11.3	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. ケズリA i. マメツ不明		O. 7.5YR6/6橙 ～5YR6/6橙 i. 7.5YR6/6橙	
17-27 31-27	溝2 灰褐色粘質土	小形 丸底鉢	II-A1-a	H:(5.8) C:(9.5) W:(9.4)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. ケズリA i. スリナデヨコICa		O. 10YR7/4にぶい黄橙 ～7.5YR7/4にぶい橙 i. 7.5YR7/4にぶい橙	
17-28 31-28	溝2 灰褐色粘質土	鉢	I-E1-b	C:(28.0) W:(24.6)	O. スリナデヨコICa i. マメツ不明	O. スリナデICa i. スリナデヨコIAa→ 押捺A・スリナデICa	9/cm	O. 7.5YR5/4にぶい褐 i. 7.5YR5/3にぶい褐	
17-29 31-29	溝2	脚台 (高坏)	E4-3-A-1	B:(19.0)		O. ミガキA i. スリナデIAa	6/cm	O. 5YR5/0明赤褐 i. 5YR5/0明赤褐	3方スカシ
17-30 31-30	溝2 灰褐色粘質土	脚台 (高坏)	1-3-A-b	B:14.6		O. ケズリA→ マメツ不明 i. 押捺A→ スリナデICa		O. 5YR5/6明赤褐 i. 7.5YR6/3にぶい褐	4方スカシ

表7 経向遺跡第42次調査出土土器観察表(4)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
18-31 32-31	溝3 E区 黒褐色土	壺	H-D-a	C:(14.5)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデICa i. ケズリA		O. 10YR8/2灰白 i. 10YR8/2灰白	
18-32 32-32	溝3 E区 黒褐色土	壺	南関東形?	C:(15.0)	O. スリナデIAa i. 押捺A→ スリナデIAa	O. スリナデICa i. 押捺A		O. 7.5YR7/6橙 i. 5YR7/6橙	搬入品 (南関東?)
18-33 32-33	溝3 E区 黒褐色土	壺	TC-B-a	C:(17.2)	O. マメツ不明 i. 押捺A	O. マメツ不明 i. ケズリA		O. 7.5YR6/3にぶい・褐 i. N5/0灰	
18-34 32-34	溝3 E区 黒褐色土	壺	T-A1-a	C:14.0	O. スリナデタテIAa i. スリナデヨコIAa				
18-35 32-35	溝3 F区 黒褐色土	壺	T-C2-a	C:(12.2)	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. 2.5YR5/4にぶい・橙 i. 2.5Y5/1黄灰	
18-36 32-36	溝3 E区 黒褐色土	壺	H-C-b	C:20.8	O. スリナデヨコICa スリナデタテIAa i. スリナデヨコICa スリナデタテIAa			O. 7.5YR6/4にぶい・橙 i. 7.5YR6/4にぶい・橙	東部瀬戸内から の搬入品か?
18-37 32-37	溝3 F区 黒褐色土	壺	H-C-b	C:21.2	O. スリナデICa 押捺A i. ケズリB→スリナデICa 押捺A				東部瀬戸内から の搬入品か?
18-38 32-38	溝3 F区 黒褐色土	壺	H-C-a	C:14.6	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. 押捺A		(口縁) O:1ともに 10YR8/4浅黄橙 (体部) O:1ともに 7.5YR7/4にぶい・黄橙	口縁と体部は 異なった胎土を 使用している。
18-39 32-39	溝3 E区 黒褐色土	壺	TC-D-a	C:18.5	O. ミガキA i. マメツ不明			O. 10YR8/2灰白～ 2.5Y8/2灰白 i. 10YR7/3にぶい・黄橙 ～10YR6/2灰黄褐	
18-40 32-40	溝3 F区 黒褐色土	壺	C-A2-a	H:15.2 C:21.55 W:15.6 B:4.8	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. ミガキA i. 押捺A	O. ミガキA i. スリナデIAb	O. 7.5YR7/4にぶい・橙 ～7.5YR6/4にぶい・橙 i. 7.5YR6/3にぶい・橙 ～7.5YR5/3にぶい・橙	

表 8 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (5)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
18-41 32-41	溝3 F区 黒褐色土	壺	西部瀬戸内形?	C:(200)	O. スリナデICa i. スリナデIAa 4/cm	O. スリナデICa i. ケズIA		O. 2.5Y8/2灰白 i. 2.5Y8/2灰白	搬入品 (西部瀬戸内?)
18-42 32-42	溝3 F区 黒褐色土	壺	N-F1-		O. スリナデICa i. スリナデICa	O. スリナデICa i. ケズIA		O. 5YR5/4にぶい赤褐 i. 5YR5/4にぶい赤褐	搬入品?
18-43 32-43	溝3 F区 黒褐色土	壺	C-B1-a	H:163 C:(10.1) W:13.1 B:2.2	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. スリナデICa	O. ミガキA i. ケズIB	O. 2.5YR8/2灰白～ 10YR8/3浅黄橙 i. 2.5YR8/2灰白～ 10YR8/3浅黄橙	
18-44 32-44	溝3 E区 黒褐色土	壺		W:13.9 B:2.0		O. マメツ不明 i. スリナデICa	O. マメツ不明 i. スリナデICa	O. 10YR7/3にぶい橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙	
18-45 32-45	溝3 F区 黒褐色土	壺		W:14.8		O. ミガキA i. 押捺A	O. マメツ不明 i. スリナデICa	O. (上半)5YR6/4にぶい 橙～6.6橙 (下半)N2/0黒 i. 10YR7/3にぶい黄橙	
19-46 32-46	溝3 F区 黒褐色土	壺	東海形 柳ヶ坪型壺	C:(20.8)	O. (上部)スリナデヨコICa (下部)ミガキA i. スリナデヨコICa			O. 7.5YR8/6浅黄橙 ～7.5YR7/0橙 i. 7.5YR8/6浅黄橙 ～7.5YR7/0橙	搬入品 (東海)
19-47 32-47	溝3 F区 黒褐色土下層	壺	東海形 柳ヶ坪型壺	C:(20.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデナナミIAa i. マメツ不明	5/cm		O. 10YR8/4浅黄橙～ 2.5YR6/8橙 i. 5YR6/6橙～ 10YR6/4にぶい黄橙	搬入品 (東海)
19-48 32-48	溝3 E区 黒褐色土	壺	C-A1-a	C:(20.5)	O. スリナデタテIAa→ ミガキA i. 押捺A→ スリナデヨコIAa→ ミガキA 10/cm	10/cm		O. 5YR6/4にぶい橙 i. 2.5YR7/3浅黄	
19-49 32-49	溝3 F区 黒褐色土下層	壺	T-A1-a	C:(13.7) W:(18.6)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	20/CM O. タタキ スリナデICa i. スリナデICa ケズIA		O. 2.5Y7/2灰黄 ～5Y4/1灰 i. 2.5Y7/2灰黄 ～5Y4/1灰	
19-50 32-50	溝3 E区 黒褐色土	壺	T-B-a	H:20.7 C:13.4 W:14.7	O. マメツ不明 i. 押捺A→ スリナデナナミIAa 6/cm	O. マメツ不明 i. 押捺B→ スリナデIAa 6/cm		O. 5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR7/3にぶい橙	搬入品

表9 経向遺跡第42次調査出土土器観察表(6)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
19-51 33-51	溝3 E・F区 黒褐色土	壺	阿波形壺	C:14.1 W:21.1	O. スリナデヲヨコICa i. スリナデヲヨコICa ケズリA	O. スリナデナナスIAa スリナデヲテIAa i. 押捺A ケズリA	12/cm 12/cm	O. 7.5YR7/4にぶい橙 i. 5YR7/6橙	搬入品(阿波)
19-52 33-52	溝3 E区 黒褐色土	壺	T-A2-a	C:15.5 W:18.4	O. スリナデICa i. スリナデICa	O. タタキ i. スリナデIAb(上半) スリナデICa(下半)	40/CM	O. 5YR8/4淡橙 i. 5YR8/4淡橙 ~5YR7/6橙	搬入品?
19-53 33-53	溝3 E区 黒褐色土	壺	T-A1-a	H:(22.5) C:13.5 W:17.1	O. 押捺A スリナデICa i. スリナデヲヨコICa	O. 押捺A スリナデICa i. ケズリA		O. 7.5YR7/4にぶい橙 (底部) 2.5YR6/4 にぶい橙 i. 7.5YR6/3にぶい褐	搬入品?
19-54 33-54	溝3 E区 黒褐色土	壺	N-F1-a	C:(24.8)	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. ケズリA		O. 7.5YR6/3にぶい褐 i. 7.5YR6/4にぶい橙	
20-55 34-55	溝3 F区 黒褐色土	壺	TC-A-a	C:(14.4) W:(25.5)	O. スリナデICa i. スリナデICa	O. スリナデIAa i. ケズリA	6/cm	O. 10YR8/2灰白~ 2.5Y8/2灰白 i. 2.5Y5/1黄灰	
20-56 34-56	溝3 E・F区 黒褐色土下層	壺	東部瀬戸内形?	W:21.0 B:6.0	O. スリナデヲテIB i. スリナデヲヨコIB	O. スリナデナナスIB→ スリナデICa i. スリナデIAb	多/cm 多/cm	O. 5YR7/6橙 i. 5YR7/6橙	搬入品 (東部瀬戸内?)
20-57 34-57	溝3 E区 地山直上	壺	TC-A-a	C:14.0 W:27.0	O. 押捺A→ スリナデヲヨコICa i. 押捺A→ スリナデヲヨコICa	O. 押捺A i. 押捺A		O. 10YR7/4にぶい黄橙 i. 10YR7/4にぶい黄橙	
20-58 34-58	溝3 E区 黒褐色土	壺	TC-D-a	H:24.7 C:16.3 W:22.1 B:3.7	O. スリナデICa i. スリナデICa	O. スリナデICa i. スリナデICa		O. 10YR7/1灰白 i. 2.5Y3/4黒褐	
21-59 35-59	溝3 E区 地山直上	壺	TC?-D?-1	W:27.1		O. スリナデヲテIAa→ スリナデヲヨコIAa i. ケズリA	8/cm 8/cm	O. 10YR7/4にぶい黄橙 i. 10YR7/4にぶい黄橙	
21-60 35-60	溝3 E区 黒褐色土	壺	TC-D-e2	H:36.6 C:18.8 W:29.8	O. スリナデヲヨコICa i. スリナデヲヨコICa	O. スリナデヲテIAa→ スリナデヲヨコIAa i. ケズリA	6/cm 6/cm	O. 10YR8/3浅黄橙 ~5YR7/6橙 i. 5YR7/6橙 ~7.5YR8/4浅黄橙	

表10 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (7)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
22-61 35-61	溝3 F区 黒褐色土	壺	東海形広口壺	H:28.0 C:17.4 W:27.2 B:6.85	O. スリナデナナⅠAa i. スリナデナナⅠAa	O. スリナデナナⅠAb i. スリナデナナⅠAb	O. スリナデナナⅠAa→ スリナデⅠCa i. ケズⅠB→スリナデⅠCa	O. 5YR8/4淡橙 i. 10YR7/2にぶい黄橙	搬入品(東海)
22-62 36-62	溝3 E区 黒褐色土下層	底部 (壺)	3-C-a	B:5.8			O. 押捺A i. ケズⅠB	O. 10YR7/2にぶい黄橙 i. 10YR8/2灰白	
22-63 36-63	溝3 E区 黒褐色土	底部 (壺)	3-C-・	B:7.4			O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. 10YR8/3浅黄橙 i. 7.5Y5/1灰	
22-64 36-64	溝3 E区 黒褐色土	底部 (壺)	3-C-a	B:6.0			O. マメツ不明 i. スリナデⅠCa	O. 7.5YR6/3にぶい褐 i. 10YR7/1灰白	
22-65 36-65	溝3 F区 黒褐色土	底部 (壺)	2-C-・	B:2.3			O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. 2.5Y8/1灰白 i. N5/0灰	
22-66 36-66	溝3 E区 黒褐色土	底部 (壺)	3-C-・	B:9.3			O. マメツ不明 i. 押捺A スリナデナナⅠAa	O. 10YR8/2灰白 i. 10YR8/2灰白	
22-67 36-67	溝3 E区 黒褐色土	底部 (壺)	3-C-・	B:6.3			O. マメツ不明 i. スリナデⅠAb	O. 7.5YR7/4にぶい橙 i. 10YR7/2にぶい黄橙	
22-68 36-68	溝3 F区 黒褐色土	底部 (壺)	2-C-c	B:7.7			O. 押捺A i. 押捺A	O. 7.5YR7/6橙 i. 2.5Y7/3浅黄～ 2.5Y5/3黄褐	
22-69 36-69	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	I-C-5e2	C:(16.0)	O. スリナデヨⅠCa i. スリナデヨⅠCa	O. マメツ不明 i. スリナデⅠAa	O. スリナデⅠCa i. ケズⅠA	O. 7.5YR6/2灰褐 i. 5YR6/4にぶい橙	
22-70 36-70	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	I-C-5e2	C:16.5	O. スリナデⅠCa i. スリナデⅠCa			O. 7.5YR8/3浅黄橙 i. 7.5YR8/3浅黄橙	

表11 経向遺跡第42次調査出土土器観察表（8）

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
22-71 36-71	溝3 E区 黒褐色土	甕 Y	Ⅱ-C-5a	C:(12.9) W:(13.6)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAa	8/cm O. マメツ不明 i. 押捺A→ ケズリA		O. 7.5YR6/3にぶい・褐 i. 5YR6/4にぶい・褐	
22-72 36-72	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	Ⅰ-C-5e2	C:(14.8)	O. スリナデヨコIB スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAa	多/cm 14/cm O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコIAa i. 押捺A→ ケズリA→ スリナデヨコIAa	10/cm 10/cm 14/cm	O. 10YR7/3にぶい・黄橙 i. 10YR7/3にぶい・黄橙	
22-73 36-73	溝3 E区 黒褐色土	甕 Y	Ⅱ-D-・a	C:(11.6)	O. スリナデヨコICa i. マメツ不明	O. タタキ i. マメツ不明	30/CM	O. 10YR7/3にぶい・黄橙 i. 10YR7/3にぶい・黄橙	
22-74 36-74	溝3 F溝 黒褐色土	甕 Y	Ⅰ-B-5a	C:(18.2)	O. 押捺A→ スリナデIAa i. スリナデIAb	10/cm O. スリナデタテIAa i. ケズリA	10/cm	O. 2.5Y7/3浅黄 i. 2.5Y7/3浅黄	
22-75 36-75	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	Ⅱ-C-5g2	C:(13.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリA		O. 10YR7/3にぶい・黄橙 i. 10YR7/3にぶい・黄橙	
22-76 36-76	溝3 F溝 黒褐色土	甕 F	Ⅰ-C-5g2	C:(14.5)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa i. ケズリA	8/cm	O. 5YR7/4にぶい・橙 i. 7.5YR7/4にぶい・橙	
22-77 36-77	溝3 E区 淡黄褐色土	甕 F	Ⅱ-C-5e1	C:(13.8)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. マメツ不明 i. ケズリA		O. 7.5YR7/3にぶい・橙 i. 5YR7/4にぶい・橙	
23-78 36-78	溝3 F区 黒褐色土	甕 F	Ⅲ-C-5a	H:(6.35) C:(7.7) W:(7.7)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. (上半)スリナデヨコIAa→ スリナデタテIAa (下半)スリナデヨコIAa i. ケズリA	10/cm 10/cm 10/cm	O. 10YR5/6赤～7.5YR 6/4にぶい・橙 i. 10YR6/4にぶい・黄橙 ～10YR6/3にぶい・黄橙	口縁部に赤色顔 料が認められる
23-79 36-79	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	Ⅲ-C-5a	H:11.7 C:10.8 W:13.4	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデナナスIAa i. 押捺A→ ケズリB	8/cm O. スリナデナナスIAa i. 押捺A→ ケズリA→ ケズリB	O. 7.5YR8/4浅黄橙 ～7.5YR7/4にぶい・橙 i. 7.5YR8/4浅黄橙 ～7.5YR7/4にぶい・橙	底部焼成後 穿孔
23-80 37-80	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	Ⅲ-C-5e1	C:(12.3)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa i. 押捺A→ ケズリA	10/cm	O. 2.5Y8/1灰白 i. 2.5Y8/2灰白	

表12 纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (9)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
23-81 37-81	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	II-C-5f	C:(130)	O. スリナデI Ca i. スリナデI Ca	O. スリナデI Ca i. ケズリA		O. 7.5YR7/3にぶい橙 i. 7.5YR7/4にぶい橙	
23-82 37-82	溝3 F区 黒褐色土	甕 F	II-C-5f	H:147 C:118 W:129	O. スリナデヨコIB i. スリナデヨコIB	O. スリナデI Ca→ スリナデヨコI Ca i. ケズリA	O. スリナデI Ca i. 押捺A→ ケズリA	O. 7.5YR7/4～6/4にぶ い橙 i. 10YR7/4にぶい黄橙	
23-83 37-83	溝3 F区 黒褐色土	甕 F	II-C-5g2	C:(120)	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. スリナデタテIAa i. ケズリA		O. 5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR6/3にぶい橙	
23-84 37-84	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	II-C-5g1	C:(144)	O. スリナデヨコI Ca i. スリナデヨコI Ca	O. スリナデタテIAa→ スリナデI Ca i. ケズリA		O. 10YR7/3にぶい黄橙 ～7.5YR5/4にぶい褐 i. 10YR7/3にぶい黄橙 ～7.5YR5/4にぶい褐	
23-85 37-85	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	I-C-5g1	C:1465	O. スリナデヨコI Ca i. スリナデヨコI Ca	O. スリナデタテIAa i. ケズリA		O. 10YR8/1灰白 i. 10YR8/1灰白	
23-86 37-86	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	II-C-5g1	C:(134)	O. スリナデヨコI Ca i. スリナデヨコI Ca	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコIAa i. ケズリA		O. 10YR6/3にぶい黄橙 i. 10YR6/3にぶい黄橙	
23-87 37-87	溝3 E溝 黒褐色土	甕 F	II-C-5g2	C:(125)	O. スリナデヨコI Ca i. スリナデヨコI Ca	O. スリナデヨコIAa i. 押捺A→ ケズリA		O. 7.5YR8/6浅黄橙 i. 5YR6/6橙	
23-88 37-88	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	II-C-5a	C:(142)	O. スリナデヨコI Ca i. スリナデヨコI Ca	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコIAa i. ケズリA		O. 5YR6/6橙～ 5YR6/4にぶい橙 i. 10YR7/4にぶい黄橙	
23-89 37-89	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	II-C-5a	C:(138) W:(170)	O. スリナデヨコI Ca i. スリナデヨコI Ca	O. (上半)タタキ→ スリナデタテIAa (下半)タタキ i. ケズリA		O. 10YR7/3にぶい黄橙 i. 10YR7/2にぶい黄褐 ～10YR6/1褐灰	
23-90 37-90	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	II-C-5g2	C:(128) W:(163)	O. スリナデヨコI Ca i. スリナデヨコI Ca	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコIAa i. 押捺A→ ケズリA		O. 7.5YR7/4にぶい橙 i. 7.5YR6/3にぶい橙	

表13 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (10)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
23-91 37-91	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	I-C-5e1	H:20.2 C:13.9 W:22	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. マメツ i. 押捺A→ケズリA	O. スリナデナナズIAa i. 押捺A	O. 10YR8/4浅黄橙～ 10YR5/1褐灰 i. 10YR8/4浅黄橙～ 10YR5/1褐灰	
23-92 37-92	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	II-C-5g2	C:(13.6)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコIAa i. ケズリA	10/cm	O. 10YR7/3にぶい黄橙 i. 7.5YR7/4にぶい黄橙	
23-93 37-93	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	I-C-5g2	C:(16.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa i. ケズリA	8/cm	O. 10YR6/3にぶい黄橙 i. 10YR7/4にぶい黄橙	
24-94 37-94	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	I-C-5f	C:(15.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa→ スリナデICa i. 押捺A→ケズリA	8/cm	O. 7.5YR8/6 浅黄橙 i. 5YR7/4にぶい橙 2.5Y5/1黄灰	
24-95 37-95	溝3 F区 黒褐色土下層	甕 F	I-C-5g2	C:(16.4)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. マメツ不明 i. ケズリA		O. 10YR8/4浅黄橙 i. 7.5YR7/3にぶい橙	
24-96 37-96	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	I-C-5g2	C:(16.0)	O. スリナデヨコICa i. マメツ不明	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコIAa i. ケズリA	7/cm 7/cm	O. 7.5YR7/4にぶい橙 i. 7.5YR7/4にぶい橙	
24-97 37-97	溝3 F区 黒褐色土	甕 F	I-C-5g1	C:16.9	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデICa i. ケズリA		O. 10YR6/3にぶい 黄橙 i. 2.5Y7/3にぶい浅黄	
24-98 37-98	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	I-C-5e1	C:(15.2)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAa	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコIAa i. ケズリA	6/cm 6/cm	O. 10YR8/4浅黄橙 i. 10YR8/4浅黄橙	
24-99 38-99	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	I-C-5g2	C:(19.8)	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa i. ケズリA	8/cm	O. 10YR7/2にぶい黄橙 i. 10YR7/3にぶい黄橙	
24-100 38-100	溝3 E区 黒褐色土下層	甕 F	I-C-5g2	C:(17.9)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリA		O. 7.5YR7/3にぶい橙 i. 7.5YR7/4にぶい橙	

表14 纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (11)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
24-101 38-101	溝3 F区 黒褐色土	甕 F	I-C-5f	C:(19.4)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. マメヅ不明 i. ケズリA		O. 7.5YR7/4にぶい橙 i. 10YR8/3浅黄橙	
24-102 38-102	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	I-C-5g ₁	C:(16.0) W:(20.1)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. タキ→ スリナデタテIAa i. ケズリA	7/cm	O. 10YR7/3にぶい黄橙 i. 7.5YR7/4にぶい橙	肩部に刺突文3 ヶ所あり
24-103 38-103	溝3 E区 黒褐色土下層	甕 F	I-C-5g ₂	C:(20.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコIAa i. ケズリA	10/cm	O. 7.5YR7/4にぶい橙 i. 7.5YR7/4にぶい橙	
24-104 38-104	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	I-C-5e ₂	C:(17.6)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコIAa i. ケズリA	6/cm 6/cm	O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙	
24-105 38-105	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	I-C-5g ₃	C:(15.5) W:(21.4)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコIAa i. ケズリA	6/cm	O. 10YR7/3にぶい黄橙 ~7.5YR6/2灰褐 i. 10YR7/3にぶい黄橙 ~7.5YR7/3にぶい橙	
24-106 38-106	溝3 F区 黒褐色土	甕 F	I-C-5f	C:17.6	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa i. ケズリA	9/cm	O. 10YR7/2にぶい黄橙 i. 7.5YR5/4にぶい褐	
25-107 38-107	溝3 E区 黒褐色土	甕 F	I-C-5g ₁	C:(15.5) W:(21.4)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコIAa i. 押捺A→ ケズリA	14/cm	O. 10YR7/4にぶい黄橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙	
25-108 38-108	溝3 F区 黒褐色土	甕 F	I-C-5-g ₁	C:(17.2) W:(26.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa→ スリナデタテIAa i. ケズリA	8/cm 8/cm	O. 10YR7/3にぶい黄橙 i. 10YR7/3にぶい黄橙	
25-109 39-109	溝3 E区 黒褐色土下層	甕	吉備形甕	C:(13.4)	O. (口唇部) 横状スリナデヨコIAa i. スリナデヨコICa	O. スリナデICa i. ケズリA	7/cm	O. 5YR7/4にぶい橙 i. 7.5YR8/3浅黄橙	搬入品 (吉備)
25-110 39-110	溝3 F区 黒褐色土	甕	吉備形甕	C:(15.0)	O. マメヅ不明 i. スリナデヨコICa	O. スリナデICa i. 押捺A→ ケズリA		O. 10YR7/4にぶい黄橙 i. 10YR7/3にぶい黄橙	搬入品 (吉備)

表15 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (12)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
25-111 39-111	溝3 F区 黒褐色土	甕	吉備形甕	C : (17.0) W : (20.8)	O. (口唇部) 瓣状スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa→ スリナデICa i. ケズリA	5/cm	O. 10YR7/2にぶい黄橙 i. 10YR6/3にぶい黄橙	搬入品 (吉備)
25-112 39-112	溝3 F区 黒褐色土	甕	吉備形甕	C : (13.4)	O. (口唇部) 瓣状スリナデヨコICa (下半) スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. 押捺A→ スリナデタテIAa i. ケズリA	8/cm	O. 10YR7/4にぶい黄橙 i. 10YR7/4にぶい黄橙	搬入品 (吉備)
25-113 39-113	溝3 E区 黒褐色土	甕	吉備形甕	C : (13.8)	O. (口唇部) 瓣状スリナデヨコICa (下半) スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. 押捺A→ スリナデタテIAa i. ケズリA	6/cm	O. 7.5YR7/4にぶい橙 ~5YR7/4にぶい橙 i. 10YR6/1褐灰 ~10YR5/1褐灰	搬入品 (吉備)
25-114 39-114	溝3 E区 黒褐色土	甕	東海形S字 口縁甕	C : (14.6)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa i. 押捺A→ ケズリA	7/cm	O. 10YR6/2灰黄褐 ~10YR5/2灰黄褐 i. 10YR6/2灰黄褐 ~10YR5/2灰黄褐	搬入品 (東海)
25-115 39-115	溝3 E区 黒褐色土	甕	東海形S字 口縁甕	C : (14.8)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa i. 押捺A	5/cm	O. 10YR6/2灰黄褐 ~10YR6/1褐灰 i. 10YR6/2灰黄褐	搬入品 (東海)
25-116 39-116	溝3 E区 黒褐色土	甕	東海形S字 口縁甕	C : (14.2)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa i. 押捺A	6/cm	O. 10YR7/3にぶい黄橙 i. 10YR6/2灰黄褐	搬入品 (東海)
25-117 39-117	溝3 F区 黒褐色土	甕	東海形S字 口縁甕	C : (14.2)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコICa i. 押捺A→ ケズリA	6/cm 6/cm	O. 10YR8/4浅黄橙 i. 10YR5/1褐灰	搬入品 (東海)
25-118 39-118	溝3 E区 黒褐色土	甕	東海形S字 口縁甕	C : (16.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコICa i. ケズリA	4/cm 4/cm	O. 5YR8/4漆橙~ 2.5Y8/3漆黄 i. 2.5Y7/3浅黄	搬入品 (東海)
25-119 39-119	溝3 E区 黒褐色土	甕	東海形S字 口縁甕	C : (18.4)	O. スリナデヨコICa i. 押捺A i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa i. 押捺A	10/cm	O. 2.5Y8/2灰白 i. 10YR8/2灰白	搬入品 (東海)
25-120 39-120	溝3 E区 黒褐色土	甕	東海形S字 口縁甕	C : (19.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa i. スリナデICa	4/cm	O. 7.5YR8/1灰白 i. 7.5YR8/1灰白	搬入品 (東海)

表16 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (13)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
25-121 39-121	溝3 E区 黒褐色土下層	甕	山陰形甕	C : (15.4)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. マメツ不明 i. ケズリA		O. 10YR8/3浅黄橙 i. 10YR8/3浅黄橙	搬入品 (山陰)
25-122 39-122	溝3 F区 黒褐色土	甕	山陰形甕	H : 16.0 C : 14.4 W : 16.5	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデナメIAa→ スリナデヨコIAa i. ケズリA	8/cm 8/cm	O. 10YR8/3浅黄橙 ~10YR8/2灰白 i. (上半)10YR8/4浅黄橙 (下半)10YR7/2こぶい黄橙	搬入品 (山陰)
26-123 39-123	溝3 E区 黒褐色土	甕	山陰形甕	H : 19.2 C : 13.9 W : 17.5	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコIAa i. ケズリA	8/cm	外面上半・内面 7.5YR7/4にぶい橙 外面下半 10YR5/2灰黄褐~ 10YR3/1黒褐	搬入品 (山陰)
26-124 39-124	溝3 E区 黒褐色土	甕	山陰形甕	C : (17.2)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデナメIAa i. ケズリA	14/cm	O. 10YR6/2灰黄褐~ 10YR5/2灰黄褐 i. 10YR4/1褐灰	搬入品 (山陰)
26-125 39-125	溝3 E区 黒褐色土	甕	近江形甕	C : (16.4)	O. スリナデヨコIAa→ スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコIAa i. ケズリA	6/cm	O. 10YR8/2灰白 i. 10YR8/2灰白	搬入品 (近江)
26-126 40-126	溝3 E区 黒褐色土	底部 (甕)	3-C-・	B : 3.4		O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. 7.5YR7/3こぶい橙 i. 7.5YR7/4こぶい橙	
26-127 40-127	溝3 E区 黒褐色土	底部 (甕)	3-C-・	B : 2.5				O. 7.5YR7/6橙 i. 7.5YR7/6橙	
26-128 40-128	溝3 E区 黒褐色土	底部 (甕)	東海形S字 口縁甕	B : (10.2)		O. スリナデナメIAa i. スリナデICa	8/cm	O. 10YR7/1灰白 i. 10YR7/2こぶい黄橙	
26-129 40-129	溝3 F区 黒褐色土下層	底部 (鉢?)	2-B-・	B : (3.75)		O. スリナデICa i. スリナデICa		O. 7.5YR6/2灰褐 i. 10YR6/1褐灰	
26-130 40-130	溝3 F区 黒褐色土下層	底部 (鉢?)	2-B-c	B : 4.2		O. 押捺A i. スリナデICa		O. 7.5YR5/2灰褐 i. 7.5YR5/3こぶい褐	

表17 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (14)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
26-131 40-131	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	Ⅲ-A2-a	C:(12.9) W:(10.2)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデICa i. 押捺A→ スリナデICa		O. 7.5YR7/3にぶい橙 i. 7.5YR7/4にぶい橙	
26-132 40-132	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	Ⅱ-A1-a	H:7.9 C:10.3 W:10.3	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデテIB i. ケズIA	多/cm	O. 10YR6/4にぶい黄橙 i. 10YR4/1褐灰	
26-133 40-133	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	Ⅰ-A1-a	H:7.4 C:(11.9) W:9.2	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. 5YR7/8橙 i. 5YR7/8橙	
26-134 40-134	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	Ⅰ-A1-a	H:6.5 C:10.35 W:10.4	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. 5YR6/6橙 i. 2.5YR6/8橙	
26-135 40-135	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	Ⅱ-A1-ei	H:8.75 C:9.2 W:10.8	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコIAa i. スリナデナナスIAb	8/cm	O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
26-136 40-136	溝3 E区 黒褐色土下層	小形 丸底鉢	Ⅱ-A2-a	H:(8.9) C:(10.4) W:(11.2)	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. 押捺A→ スリナデICa	10/cm	O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
26-137 40-137	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	Ⅰ-A2-a	H:6.1 C:(10.7) W:(9.6)	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. スリナデナナスIAb		O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
26-138 40-138	溝3 F区 黒褐色土	小形 丸底鉢	Ⅰ-A1-a	H:5.2 C:10.4 W:9.0	O. ミガキA i. スリナデヨコIAa	O. ミガキA i. ミガキA	10/cm	O. 2.5YR5/6明赤褐 i. N3/0暗灰	
26-139 40-139	溝3 F区 黒褐色土	小形 丸底鉢	Ⅰ-A1-a	H:6.7 C:10.4 W:8.7	O. ミガキA i. スリナデICa	O. ミガキA i. スリナデIAb→ スリナデICa		O. 10YR6/3にぶい黄橙 i. 10YR6/3にぶい黄橙	
26-140 40-140	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	Ⅰ-A1-a	H:(6.1) C:(11.6) W:(9.9)	O. 押捺A→ i. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. スリナデICa		O. 5YR6/6橙 i. 2.5YR4/1黄灰	

表18 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (15)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
26-141 40-141	溝3 F区 黒褐色土	小形 丸底鉢	I-A ₂ -a	H:(6.2) C:(12.4) W:(10.3)	O. 押捺A→ マメツ不明 i. 押捺A→ マメツ不明	O. 押捺A→ マメツ不明 i. 押捺A→ マメツ不明	O. 押捺A→ マメツ不明 i. 押捺A→ マメツ不明	O. 7.5YR6/6橙 i. 7.5YR6/6橙	
26-142 40-142	溝3 F区 黒褐色土	小形 丸底鉢	II-A ₁ -a	C:10.8 W:9.7	O. ミガキA O. ミガキA	O. (上半)ミガキA (下半)ケズリA i. マメツ不明		O. 5YR6/4にぶい橙 ～5YR5/4にぶい赤褐 i. 7.5YR6/4にぶい橙	
26-143 40-143	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	II-A ₂ -a	H:6.9 C:9.5 W:9.1	O. ミガキA O. ミガキA	O. ケズリA→ ミガキA i. スリナデICa	O. ケズリA i. スリナデICa	O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙	
26-144 40-144	溝3 F区 黒褐色土	小形 丸底鉢	II-B ₂ -a	C:(11.2) W:(9.8)	O. ミガキA i. ミガキA	O. (上部)スリナデヨコICa (下部)ケズリA i. マメツ不明		O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
26-145 40-145	溝3 E溝 黒褐色土	小形 丸底鉢	II-B ₂ -a	H:7.3 C:11.0 W:9.6	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. スリナデICa	O. ケズリA i. スリナデICa	O. 5YR5/6明赤褐 i. 5YR5/6明赤褐	
26-146 40-146	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	II-B ₁ -a	H:8.2 C:10.8 W:9.0	O. ミガキA i. ミガキA	O. ケズリA→ ミガキA i. 押捺A→ スリナデICa	O. ケズリA i. スリナデICa	O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
26-147 40-147	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	II-A ₁ -a	C:(10.0) W:(9.0)	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. スリナデICa		O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙	
26-148 41-148	溝3 E区 淡黄褐色土	小形 丸底鉢	II-A ₁ -a	H:(7.1) C:(9.8) W:(8.4)	O. ミガキA i. ミガキA	O. ケズリA→ ミガキA i. ミガキA	O. ケズリA i. スリナデICa	O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
27-149 41-149	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	II-B ₁ -a	C:(11.7) W:10.4	O. ミガキA i. ミガキA	O. ケズリA→ ミガキA i. 押捺A		O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
27-150 41-150	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	II-B ₁ -a	C:11.8 W:9.8	O. ミガキA i. ミガキA	O. ケズリA i. ミガキA		O. 5YR6/6橙 i. 2.5YR6/6橙	

表19 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (16)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
27-151 41-151	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	II-B ₁ -a	H:73 C:(126) W:(98)	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. 押捺A→ ミガキA	O. マメツ不明 i. ミガキA	O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
27-152 41-152	溝3 E溝 黒褐色土	小形 丸底鉢	II-A ₂ -a	H:76 C:100 W:97	O. ミガキA i. ミガキA	O. (上半)ミガキA (下半)ケズリ i. マメツ不明	O. ケズリA i. マメツ不明	O. 5YR6/6橙 i. 2.5YR4/1黄灰	
27-153 41-153	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	II-A ₁ -a	H:81 C:106 W:97	O. ミガキA i. ミガキA	O. (上半)ミガキA (下半)ケズリA i. スリナデICa	O. ケズリA i. スリナデICa	O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	漆付着
27-154 41-154	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	II-A ₂ -a	H:62 C:96 W:90	O. ミガキA i. マメツ不明	O. ケズリA→ ミガキA i. マメツ不明	O. ケズリA→ ミガキA i. マメツ不明	O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙	
27-155 41-155	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	山陰形 小形丸底鉢	H:81 C:101 W:84	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. スリナデICa	O. スリナデヨコIAa i. スリナデICa	O. 5YR6/4にぶい橙 i. 5YR6/4にぶい橙	
27-156 41-156	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	I-A ₁ -a	H:82 C:138 W:118	O. ミガキA i. ミガキA	O. スリナデナナMB→ ミガキA i. ミガキA	O. ケズリA i. スリナデICa	O. 5YR7/6橙 i. 5YR7/6橙	
27-157 41-157	溝3 F溝 黒褐色土	小形 丸底鉢	III-B ₁ -a	H:67 C:136 W:113	O. ミガキA i. マメツ不明	O. ケズリA i. マメツ不明	O. ケズリA i. マメツ不明	O. 5YR5/6明赤褐 i. 5YR6/6橙	
27-158 41-158	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	III-B ₂ -a	H:52 C:148 W:119	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. ミガキA	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. 7.5YR7/4にぶい橙 ~10YR7/4にぶい黄橙 i. 7.5YR7/4にぶい橙 ~10YR7/4にぶい橙	
27-159 41-159	溝3 F区 黒褐色土	小形 丸底鉢	III-B ₁ -a	H:49 C:119 W:104	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. ミガキA	O. ケズリA i. マメツ不明	O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
27-160 41-160	溝3 F区 黒褐色土下層	小形 丸底鉢	III-B ₂ -a	C:(138) W:(110)	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. ミガキA	O. ケズリA i. マメツ不明	O. 2.5YR6/8橙 i. 2.5YR6/6橙	

表20 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (17)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
27-161 41-161	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	Ⅲ-B ₂ -a	C:(15.8) W:(12.4)	O. マメツ不明 i. ミガキA	O. マメツ不明 i. ミガキA		O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
27-162 41-162	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	Ⅲ-B ₂ -a	C:(14.4) W:(11.6)	O. ミガキA i. ミガキA	O. ケズリA i. ミガキA		O. 5YR6/6橙 i. 2.5YR6/6橙	
27-163 41-163	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	Ⅲ-B ₂ -a	C:(17.5) W:(14.0)	O. ミガキA i. ミガキA	O. ケズリA i. マメツ不明		O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
27-164 41-164	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	Ⅲ-B ₂ -a	C:(16.6) W:(12.8)	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. ミガキA		O. 2.5YR7/8橙 i. 5YR7/6橙	
27-165 41-165	溝3 E区 黒褐色土	小形 丸底鉢	Ⅲ-A ₂ -a	H:6.6 C:16.3 W:13.9	O. ミガキA i. ミガキA	O. ケズリA i. ミガキA	O. ケズリA i. スリナデICa	O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
27-166 41-166	溝3 E区	小形 丸底鉢	Ⅲ-B ₂ -a	H:6.75 C:17.5 W:14.0	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. ミガキA		O. 2.5YR5/6明赤褐 ～5YR5/6明赤褐 i. 2.5YR5/6明赤褐 ～5YR5/6明赤褐	
27-167 41-167	溝3 E区 黒褐色土	小形 器台	Ⅱ-C ₂ -a	C:10.1	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. 押捺A	O. 7.5YR8/4浅黄橙 i. 7.5YR8/4浅黄橙	
27-168 41-168	溝3 E区 黒褐色土	小形 器台	Ⅱ-C ₄ -a	C:(9.7)	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. ミガキA i. マメツ不明		O. 5YR7/8橙 i. 5YR6/6橙	
27-169 41-169	溝3 F区 黒褐色土	小形 器台	Ⅱ-C ₄ -a	C:(10.1)	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. ミガキA	O. マメツ不明 i. スリナデICa	O. 5YR6/8橙 i. 5YR6/8橙	
27-170 41-170	溝3 E区 黒褐色土	脚台 (小形器台)	Ⅱ-5-A-c	B:12.3			O. ミガキA i. 押捺A	O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	3方スカシ

表22 纏向遺跡第42次調査出土土器観察表 (19)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考	
					口 縁 部	体 部	底 部(脚部)			
28-181 42-181	溝3 F区 黒褐色土	高坏	E ₁ -3-A-b	H :88 C :96 B :14.5	O. ママツ不明 i. ママツ不明	O. ママツ不明 i. ママツ不明	O. ミガキヨコA i. スリナデヨコIAa	8/cm	O. 5YR7/6橙～ 5YR6/6橙 i. 5YR7/6橙～ 5YR6/6橙	3方スカシ
28-182 42-182	溝3 E・F区 黒褐色土	高坏	E ₁ -3-A-b	C : (20.0)	O. ミガキA i. ミガキA	O. ケズリA→ ミガキA i. ミガキA	O. スリナデIAa→ ミガキA i. 押捺A→ スリナデヨコIAa	11/cm 12/cm	O. 5YR6/6橙 i. 7.5YR7/6橙	4方スカシ
28-183 42-183	溝3 E・F区 黒褐色土下層	高坏	E ₁ -3-A-c	H :11.1 C :12.9 B :19.4	O. スリナデヨコIAa i. ミガキA	O. ケズリA→ ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. 押捺A→ ミガキA		O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙	3方スカシ
28-184 42-184	溝3 E溝 黒褐色土下層	高坏	E ₁ -3-A-b	C :11.6	O. ミガキA i. ママツ不明	O. ミガキA i. ママツ不明	O. スリナデヨコIAa i. スリナデICa	10/cm	O. 7.5YR6/6橙～ 10YR6/3にぶい黄橙 i. 7.5YR6/6橙～ 10YR6/3にぶい黄橙	4方スカシ
28-185 42-185	溝3 E区 黒褐色土下層	高坏	E ₁ -3-A-b	C : (11.6)	O. ママツ不明 i. ママツ不明	O. ママツ不明 i. ミガキA	O. スリナデタテIAa i. スリナデICa	8/cm	O. 5YR6/6橙 i. 2.5YR6/8橙	
28-186 42-186	溝3 F区 黒褐色土	高坏	B ₅ -1-A-c	H :9.0 C :12.9 B :9.8	O. ミガキA i. スリナデICa	O. ミガキA i. スリナデICa	O. ミガキA i. スリナデICa		O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙	5方スカシ
28-187 42-187	溝3 E区 黒褐色土	高坏	E ₂ -1-A-b	H :10.0 C :12.6 B :8.8	O. 押捺A→ ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA→ スリナデIB i. ケズリA→ ミガキA	多/cm	O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	スカシ無し
28-188 42-188	溝3 E区 黒褐色土	高坏	B ₅ -4-A-c	C :16.4	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. スリナデICa		O. 10YR7/3にぶい黄橙 i. 7.5YR6/3にぶい褐	
28-189 43-189	溝3 E・F区 黒褐色土下層	高坏	B ₅ -4-A-c	H :14.1 C :21.7 B :14.2	O. ミガキA i. ミガキA	O. スリナデタテIAa i. ミガキA	O. ミガキA i. スリナデヨコIAa	5/cm	O. 7.5YR7/6橙 i. 7.5YR7/6橙	3方スカシ
28-190 43-190	溝3 F区 黒褐色土	脚台 (高坏)			O. ミガキA i. ミガキA	O. スリナデタテIAa→ ミガキA i. スリナデICa		14/cm	O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	

表23 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (20)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
28-191 43-191	溝3 E区 黒褐色土	高坏	Bs-3-A-c	C : 21.4	O. ミガキA i. マメツ不明	O. ミガキA i. マメツ不明	O. ケズリA→ スリナデタテIAa i. スリナデICa 10/cm	O. 5YR7/6橙 i. 5YR7/6橙	
29-192 43-192	土坑2 灰褐色土	底部 (壺)	3-C-・	B : 6.1			O. 押捺A i. 押捺A	O. 10YR6/3にぶい黄褐 i. 10YR6/3にぶい黄褐	
29-193 43-193	土坑2 灰褐色土	甕 Y	Ⅲ-C-5a	C : (9.9)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. タタキ i. 押捺A→ ケズリA 30/CM		O. 5YR6/0橙 i. 5YR6/0橙	
29-194 43-194	土坑2 灰褐色土	甕 F	I-C-5e1	C : (18.6)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. マメツ不明 i. 押捺A→ ケズリA		O. 2.5YR6/8橙 i. 2.5YR6/8橙	
29-195 43-195	土坑2 灰褐色土	甕 F	I-C-5e2	C : (14.4)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. マメツ不明 i. ケズリA		O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 10YR7/3にぶい黄橙	
29-196 43-196	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	壺	H-・-b	C : (12.8)	O. スリナデヨコICa ミガキA i. スリナデヨコICa スリナデヨコIAa 5/cm			O. 10YR5/3にぶい黄褐 i. 10YR5/3にぶい黄褐	
29-197 43-197	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	壺	阿波形壺	C : (12.5)	O. スリナデヨコICa スリナデヨコIAa i. スリナデヨコICa 押捺A 8/cm			O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙 搬入品 (阿波)	
29-198 43-198	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	底部 (壺)	3-C-・	B : 3.0			O. ケズリA i. ケズリA	O. 10YR5/2灰黄褐 i. 10YR6/2灰黄褐	
29-199 43-199	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	底部 (壺)	2-C-a	B : (6.2)		O. 押捺A→ スリナデICa i. 押捺A 4/cm	O. スリナデヨコIAa→ 押捺A スリナデICa i. 押捺A	O. 10YR5/3にぶい黄褐 i. N3/0暗灰	
29-200 43-200	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕	東海形S字 口縁甕	C : (14.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa i. マメツ不明 7/cm		O. 10YR7/3にぶい黄橙 i. 10YR7/3にぶい黄橙	

表24 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (21)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
29-201 43-201	落ち込み1 上層 淡灰褐色土	甕	東海形S字 口縁甕	C : (17.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa→ スリナデナメIAa	4/cm	O. スリナデタテIAa i. 押捺A	5/cm	O. 10YR6/2灰黄褐 i. 10YR6/2灰黄褐
29-202 43-202	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕	東海形S字 口縁甕	C : (13.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa		O. スリナデタテIAa i. 押捺A	6/cm	O. 10YR5/3にぶい黄褐 i. 10YR7/3にぶい黄褐
29-203 43-203	落ち込み1 上層 淡灰褐色土	甕 Y	Ⅲ-C-1a	C : (9.4) W : (9.8)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa		O. タタキ i. 押捺A→ ケズリA	30/CM	O. 7.5YR7/9にぶい橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙
29-204 43-204	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 Y	Ⅱ-・-・a	C : (13.7)	O. スリナデヨコICa i. スリナデナメIAa→ スリナデヨコICa	5/cm			O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙
29-205 43-205	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 Y	Ⅲ-・-・b	C : (11.8)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAa	7/cm			O. 10YR5/2灰黄褐 i. 10YR5/2灰黄褐
29-206 43-206	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 SY	Ⅲ-C-・a	C : (11.7)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa		O. タタキ i. ケズリA	60/CM	O. 10YR7/3にぶい黄橙 i. 10YR7/3にぶい黄橙
29-207 43-207	落ち込み1 上層 淡灰色土混り粗砂	底部 (甕)	6-C-・	B : 3.0			O. タタキ i. 押捺A	20/CM	O. 10YR6/2灰黄褐 ~2Y4/1黄灰 i. 10YR6/3にぶい黄橙
29-208 43-208	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 F	・-C-5e1		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAa	4/cm	O. スリナデタテIAa i. 押捺A	4/cm	O. 10YR7/3にぶい黄橙 ~10YR6/3にぶい黄橙 i. 10YR7/3にぶい黄橙 ~10YR6/3にぶい黄橙
29-209 43-209	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 F	・-C-5e1		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 7.5YR7/6橙 i. 7.5YR7/6橙
29-210 43-210	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 F	・-C-5e1		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa		O. スリナデヨコICa i. ケズリA		O. 5YR7/6橙 i. 5YR7/6橙

表25 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (22)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
29-211 43-211	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅰ-C-5e1		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. N3/0暗灰 ～N4/0灰 i. 7.5YR7/4いぶい橙	
29-212 43-212	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅰ-C-5f		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 2.5YR6/6橙 i. 2.5YR6/6橙	
29-213 43-213	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅰ-C-5e1	C : (11.8)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
29-214 43-214	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅱ-C-5f	C : (12.9)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデICa i. ケズリA		O. 10YR6/3にぶい黄橙 i. 10YR6/3にぶい黄橙 朱が付着する。	
29-215 43-215	落ち込み1 上層 淡灰褐色土	甕 F	Ⅰ-C-5a	C : (14.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
29-216 43-216	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅱ-C-5e2	C : (13.1)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5YR6/4いぶい橙 i. 7.5YR6/4いぶい橙	
29-217 43-217	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅱ-5-5d	C : (12.3)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリA		O. 7.5YR6/6橙 i. 7.5YR6/6橙	
29-218 43-218	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅲ-C-5e1	C : (11.2)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリA		O. 7.5YR6/4いぶい橙 i. 7.5YR6/4いぶい橙	
29-219 43-219	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 F	Ⅰ-C-5b	C : (14.7)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. マズ不明 i. ケズリA		O. 5YR6/6橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙 ～10YR6/3にぶい黄橙	
29-220 43-220	落ち込み1 上層 淡灰褐色土	甕 F	Ⅰ-C-5f	C : (13.9)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデICa i. ケズリA		O. 7.5YR7/6橙 ～5YR6/8橙 i. 5YR7/8橙 ～2.5YR6/8橙	

表26 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (23)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
29-221 43-221	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	甕 F	II-C-5g2	C : (136)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコIAa i. ケズリA	10/cm	O. 2.5Y6/3にぶい黄 i. 5YR7/6橙	
29-222 43-222	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	小形 丸底鉢			O. マメツ不明 i. マメツ不明			O. 7.5YR6/6橙 i. 7.5YR6/6橙	
29-223 43-223	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	小形 器台	II-C1-a	C : (78)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. 押捺A i. ミガキA		O. 7.5YR6/6橙 i. 7.5YR6/6橙	
29-224 43-224	落ち込み1 上層 黒褐色土	脚台 (高坏)	E1-3-A-c					O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
29-225 43-225	落ち込み1 上層 淡灰褐色土	脚台 (高坏)	3-A-c	B : 13.0				O. 2.5YR6/8橙 i. 7.5YR6/6橙	
29-226 43-226	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土							O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙	器種不明
29-227 43-227	落ち込み1 上層 灰褐色粘質土	東海形S字 口縁甕	東海形S字 口縁甕	B : 8.0				O. 10YR8/3浅黄橙 ~7.5YR7/4にぶい橙 i. 10YR7/2にぶい黄橙 ~2.5Y5/1黄灰	搬入品 (東海)
30-228 44-228	落ち込み1 上層 暗灰褐色土	甕	東海形S字 口縁甕	C : (148)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデテIAa→ スリナデヨコIAa i. スリナデヨコIAa 押捺A ケズリA	5/cm 5/cm 4/cm	O. 10YR7/3にぶい黄褐 i. 10YR7/3にぶい黄褐	搬入品 (東海)
30-229 44-229	落ち込み1 上層 灰褐色土	甕	東海形S字 口縁甕		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 10YR6/3にぶい黄橙 i. 10YR7/4にぶい黄橙	搬入品 (東海)
30-230 44-230	落ち込み1 上層 灰褐色土	底部 (甕)	3-C-a	B : (43)				O. 10YR6/3にぶい黄橙 i. 10YR6/3にぶい黄橙	

表27 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (24)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
30-231 44-231	落ち込み1 上層 暗灰褐色土	底部	3-C-a	B : (5.0)			O. 押捺A i. マメツ不明	O. 7.5YR7/1明褐灰 i. 10YR7/1灰白	
30-232 44-232	落ち込み1 上層 灰褐色土	鉢	A?					O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
30-233 44-233	落ち込み1 上層 暗灰褐色土	脚台 (高坏)	3-A-c				O. ケズリA→ スリナデICa i. スリナデICa	O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
30-234 44-234	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	壺	N-F ₂ -e	C : (26.8)				O. 2.5Y7/2灰黄 i. 2.5Y7/2灰黄～ 2.5Y6/1黄灰	
30-235 44-235	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕	山陰形甕	C : (26.6)		O. スリナデICa i. スリナデICa		O. 10YR8/4浅黄橙 i. 7.5YR8/4浅黄橙	搬入品 (山陰)
30-236 44-236	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕	近江形甕	C : (19.0)				O. 10YR7/3にぶい黄橙 i. 10YR7/3にぶい黄橙	搬入品 (近江)
30-237 44-237	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕 Y	I - - - - b	C : (15.0)			O. 押捺A→ スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. 10YR7/3にぶい黄橙 i. 10YR7/3にぶい黄橙	
30-238 44-238	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕 SY	Ⅲ - C - - a	C : (10.6)	60/CM 多/cm	O. タタキ i. 押捺A→ ケズリA	60/CM	O. 10YR6/2灰黄褐 i. 10YR6/3にぶい黄橙	
30-239 44-239	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕 F	I - C - 5b	C : (16.7)			O. スリナデICa i. スリナデICa	O. 10YR6/4にぶい黄橙 i. 10YR6/4にぶい黄橙	
30-240 44-240	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕 F	- - C - - e ₂					O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR5/4にぶい褐	

表28 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (25)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
30-241 44-241	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕 F	・---b		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリA		O. 7.5YR5/3にぶい・褐 i. 7.5YR5/3にぶい・褐	
30-242 44-242	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕 F	・---e2		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5YR5/2灰褐 ~7.5YR6/6橙 i. 7.5YR6/4にぶい・橙	
30-243 44-243	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕 F	・-C-5g3		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリA		O. 7.5YR8/1灰白 i. 7.5YR6/1褐灰~ 7.5YR6/1褐灰	
30-244 44-244	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕 SY	・-C--g2		O. タタキ スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	50/CM		O. 10Y7/3にぶい・黄橙 i. 10YR7/3にぶい・黄橙	
30-245 44-245	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕 F	・-C-5f		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 10YR5/1褐灰 i. 10YR7/2にぶい・黄橙	
30-246 44-246	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕 F	・-C-5f		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5YR6/4にぶい・橙 i. 7.5YR7/4にぶい・橙	
30-247 44-247	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕 F	・-C-5f		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 10YR6/4にぶい・黄橙 i. 10YR6/4にぶい・黄橙	
30-248 44-248	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕 F	・-C-5g2		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 2.5YR6/6橙 i. 2.5YR6/6橙	
30-249 44-249	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕 F	・-C-5g1		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 10YR7/3にぶい・黄橙 i. 10YR7/3にぶい・黄橙	
30-250 44-250	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕 F	・-C-5e2		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 10YR6/3にぶい・黄橙 i. 10YR6/3にぶい・黄橙	

表29 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (26)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
30-251 44-251	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕	東海形S字 口縁甕		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 10YR7/2にぶい黄橙 i. 10YR8/2灰白	搬入品 (東海)
30-252 44-252	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕	東海形S字 口縁甕		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa→ スリナデヨコIIa	O. スリナデヨコICa i. 押捺A		O. 10YR8/3浅黄橙 i. 10YR8/2灰白	搬入品 (東海)
30-253 44-253	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	甕	吉備形甕		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデICa i. ケズリA		O. 7.5YR7/6橙 i. 7.5YR7/6橙	搬入品 (吉備)
30-254 44-254	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	底部 (甕)	2-C-a	B : (5.2)			O. 押捺A i. スリナデICa	O. 10YR6/4にぶい黄橙 i. 5YR6/6橙	
30-255 44-255	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	底部 (甕)	3-A-a	B : 5.1			O. 押捺A i. スリナデICa	O. 10YR7/2にぶい黄橙 i. N5/0灰	
30-256 44-256	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	小形 丸底鉢	Ⅲ-B2-a		O. スリナデICa i. スリナデICa			O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	
30-257 44-257	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	器台	山陰形波形 器台	B : 22.0			O. スリナデヨコICa i. ケズリA スリナデヨコICa	O. 2.5YR6/8橙 i. 10YR8/2灰白～ 10YR7/2にぶい黄橙	搬入品 (山陰) 内外面ともに赤色 顔料の塗布が認 められる
30-258 44-258	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	脚台 (高坏)	・-4-A-6				O. ケズリA→ スリナデICa i. スリナデICa	O. 5YR7/6橙～ 5YR6/6橙 i. 5YR7/6橙～ 5YR6/6橙	
30-259 44-259	落ち込み1 上・下層埋土界面 黒褐色土下層	脚台 (高坏)	・-1-A-C				O. ケズリA→ スリナデICa i. 押捺A→ スリナデICa	O. 10YR6/3にぶい黄橙 ～10YR5/3にぶい黄橙 i. 10YR6/3にぶい黄橙 ～10YR5/3にぶい黄橙	
30-260 44-260	落ち込み1 下層 暗灰色粘質土	壺	H?	C : (20.4)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			O. 5YR6/6橙 i. N6/0灰	

表30 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (27)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
30-261 44-261	落ち込み1 下層 暗灰色粘質土	壺	H?		O. 押捺A→ スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa 押捺A			O. 7.5YR7/4にぶい・橙 i. 7.5YR5/2灰褐	
30-262 44-262	落ち込み1 下層 暗灰色粘質土	壺	C-C1-a	C : (11.9)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 10YR7/3にぶい・黄橙 i. 10YR7/3にぶい・黄橙	
30-263 44-263	落ち込み1 下層 暗灰色粘質土	壺	N-F2-b	C : (26.7)	O. 押捺A→ スリナデテIAa i. 押捺A	6/cm		O. 7.5YR7/4にぶい・橙 ～10YR7/2にぶい・黄橙 i. 2.5Y7/2灰黄 ～7.5YR7/4にぶい・橙	
30-264 44-264	落ち込み1 下層 暗灰褐色粘質土	甕 Y	・-・-・a		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリA		O. 10YR8/2灰白 i. 10YR8/2灰白	
30-265 44-265	落ち込み1 下層 暗灰褐色粘質土	甕 SY	・-C-5d		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. マメヅ不明 i. ケズリA		O. 10YR8/3浅黄橙 i. 10YR8/3浅黄橙	
30-266 44-266	落ち込み1 下層 暗灰色粘質土	甕 F	・-C-5g2		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデICa i. 押捺A		O. 7.5YR7/4にぶい・橙 i. 7.5YR7/4にぶい・橙	
30-267 44-267	落ち込み1 下層 暗灰色粘質土	甕 F	・-C-5e1		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5YR7/4にぶい・橙 i. 7.5YR7/4にぶい・橙	
30-268 44-268	落ち込み1 下層 暗灰色粘質土	甕 F	・-C-5f		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 10YR8/2灰白 i. 10YR8/3浅黄橙	
30-269 44-269	落ち込み1 下層 暗灰色粘質土	甕 F	・-C-5e1		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5YR7/4にぶい・橙 i. 7.5YR7/4にぶい・橙	
30-270 44-270	落ち込み1 下層 暗灰色粘質土	甕 F	・-C-5g2		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5YR7/6橙 i. 7.5YR7/6橙	

表31 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (28)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
30-271 44-271	落ち込み1 下層 暗灰褐色粘質土	甕 F	・-C-5g ²		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5YR7/4にぶい橙 i. 7.5YR7/4にぶい橙	
30-272 44-272	落ち込み1 下層 暗灰褐色粘質土	甕 F	・-C-5f		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙	
30-273 44-273	落ち込み1 下層 暗灰褐色粘質土	甕	近江形甕		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリA		O. 10YR8/2灰白 i. 10YR8/2灰白	搬入品(近江)
30-274 44-274	落ち込み1 下層 暗灰褐色粘質土	甕 Y	II -・-・-a	C : (13.7)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデICa i. 押捺A		O. 7.5YR7/4にぶい橙 i. 10YR7/4にぶい黄橙	
30-275 44-275	落ち込み1 下層 暗灰褐色粘質土	甕 Y	・-・-・-a	C : (12.6)	O. 押捺A → スリナデヨコICa i. 押捺A → スリナデヨコICa			O. 10YR6/3にぶい黄橙 ～7.5YR6/3にぶい黄 i. 10YR6/3にぶい黄橙 ～7.5YR6/3にぶい黄	
30-276 44-276	落ち込み1 下層 暗灰褐色粘質土	甕 F	II -C-5g ²	C : (12.2)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. マメヅ不明 i. 押捺A → ケズリA		O. 5YR7/6橙 ～5YR6/4にぶい橙 i. 5YR6/4にぶい橙	
31-277 44-277	落ち込み1 下層 暗灰褐色粘質土	底部 (甕)	3-C-・	B : 3.0			O. 押捺A → タタキ i. ケズリB	O. 7.5YR7/6橙 ～N3/0暗灰 i. 2.5YR5/6明赤褐	
31-278 44-278	落ち込み1 下層 暗灰褐色粘質土	小形 丸底鉢	II -D1-a	C : (11.0) W : (6.7)	O. ミガキA i. マメヅ不明	O. マメヅ不明 i. スリナデICa		O. 10YR6/3にぶい黄橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙	
31-279 44-279	落ち込み1 下層 暗灰褐色粘質土	小形 丸底鉢	II -A2-a	C : (10.3) W : (10.2)	O. 押捺A → スリナデヨコICa i. マメヅ不明	O. マメヅ不明 i. マメヅ不明		O. 10YR7/4にぶい黄橙 i. 10YR7/4にぶい黄橙	
31-280 44-280	落ち込み1 下層 暗灰褐色粘質土	小形 丸底鉢	III -B2-a	C : (13.2) W : (11.0)	O. スリナデヨコICa i. ミガキA	O. ミガキA ケズリA i. スリナデヨコICa		O. 5YR6/6橙 i. 5YR6/6橙	

表32 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (29)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
31-281 44-281	落ち込み1 下層 暗灰色粘質土	小形 丸底鉢	Ⅲ-B2-a	C:(13.8) W:(10.6)	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. ミガキA		O. 5YR5/2灰褐 ~5YR5/4にぶい赤褐 i. 5YR5/2灰褐 ~5YR5/4にぶい赤褐	
31-282 44-282	落ち込み1 下層 暗灰色粘質土	脚台 (高坏)					O. マメツ不明 i. 押捺A→ スリナデヨコIAa	O. 5YR6/6橙 ~5YR7/6橙 i. 5YR7/6橙	
31-283 45-283	ピット群 B区	甕	吉備形甕	C:(14.1)	O. (口唇部) 態状スリナデヨコIAa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリA		O. 7.5YR7/6橙 i. 7.5YR7/6橙	搬入品 (吉備)
31-284 45-284	ピット群 B区	甕	東海形S字 口縁甕	C:(16.1)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa i. 押捺A	5/cm	O. 10YR6/3にぶい黄橙 i. 10YR6/3にぶい黄橙	搬入品 (東海)
31-285 45-285	ピット群 B区	甕 F	I-C-5gi	C:(16.7)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. マメツ不明 i. 押捺A		O. 7.5YR7/4にぶい橙 i. 7.5YR7/4にぶい橙	
31-286 45-286	ピット8 E区	壺	C-C1-b	C:(9.3)	O. 押捺A→ スリナデヨコICa i. 押捺A→ スリナデナナMIa			O. 5YR6/6橙 ~10YR6/4にぶい黄橙 i. 5YR6/6橙 ~10YR6/4にぶい黄橙	
31-287 45-287	ピット8 E区	甕 S	--C-5d		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリA		O. 10YR6/3にぶい黄橙 i. 10YR6/3にぶい黄橙	
31-288 45-288	ピット10 D区	底部 (甕)	3-C-a	B:3.8			O. タタキ→ スリナデタテIAa i. ケズリA	O. 10YR8/3浅黄橙 i. 10YR8/3浅黄橙	
31-289 45-289	土坑1 暗灰色粘土	壺	Co-B-a	C:8.4 W:10.7	O. スリナデヨコICa→ スリナデタテIAb i. 押捺A→ スリナデヨコICa	O. スリナデタテIAa i. 押捺A→ スリナデヨコIAa	7/cm 5/cm	O. 7.5YR6/3にぶい褐 i. 7.5YR6/3にぶい褐	
31-290 45-290	土坑1 暗灰色粘質土	壺	Co-B--	W:12.75 B:4.6		O. スリナデタテIAa→ スリナデICa i. 押捺A→ スリナデナナMIAb	6/cm	O. 7.5YR6/6橙 i. 7.5YR6/6橙	

表33 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (30)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
31-291 45-291	土坑1 暗灰色粘質土	壺	T-D1-a	C:(8.5)	O. スリナデヨコIB ミガキA i. スリナデヨコICa スリナデヨコIAa	多/cm 5/cm		O. 10YR6/3にぶい・黄橙 i. 10YR6/3にぶい・黄橙	
31-292 45-292	土坑1 灰褐色粘質土	甕 Y	I-1-a-c	C:(15.0)	O. スリナデナミIAa スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAa	7/cm 7/cm		O. 10YR8/3浅黄橙 i. 7.5YR8/4浅黄橙	
31-293 45-293	土坑1 暗灰色粘質土	壺	1-a-e	C:(30.0)	O. スリナデICa i. スリナデICa			O. 10YR6/3にぶい・黄褐 i. 10YR6/3にぶい・黄褐	
31-294 45-294	土坑1 暗灰色粘質土	甕 Y	I-A-b	C:19.5 W:24.0	O. 押捺→ スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAa	5/cm	30/CM	O. 10YR7/2~7/3 にぶい・黄橙 i. 10YR6/2~5/2灰黄褐	
31-295 45-295	土坑1 暗灰色粘質土	甕 Y	I-B-b	C:(17.7)	O. 押捺A スリナデヨコICa スリナデヨコIB i. スリナデヨコICa スリナデヨコIAa	多/cm 8/cm	20/CM 8/cm	O. 7.5YR5/4にぶい・褐 i. 7.5YR6/4にぶい・橙	
31-296 45-296	土坑1	甕 Y	I-A-b	C:(28.0)	O. 押捺A→ スリナデICa i. スリナデIAa→ スリナデICa	10/cm	20/CM	O. 7.5YR6/4にぶい・橙 i. 7.5YR6/4にぶい・橙	
31-297 45-297	土坑1	甕 Y	I-A-b	C:(18.3)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAa スリナデヨコIB	5/cm 多/cm	30/CM	O. 7.5YR7/3 にぶい・橙 i. 7.5YR7/3 にぶい・橙	
32-298 45-298	土坑1	甕	I-1-a	C:(24.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5YR8/3浅黄橙 i. 10YR8/2灰白 ~5YR8/3淡橙	搬入品
32-299 45-299	土坑1 暗灰色粘質土	底部 (甕?)	2-A-1	B:4.6			O. タタキ スリナデICa i. 押捺A→ ケズリB	O. 10YR3/2黒褐 ~2.5Y4/3オリープ褐 i. 10YR3/2黒褐 ~2.5Y4/3オリープ褐	
32-300 45-300	土坑1 暗灰色粘質土	底部 (甕?)	1-B-1	B:4.0			O. スリナデタテIAa スリナデヨコICa i. ケズリB	O. 2.5Y5/2暗灰黄 i. 10YR5/3にぶい・黄褐	

表34 経向遺跡第42次調査出土土器観察表 (31)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
32-301 45-301	土坑1 暗灰色粘質土	底部 (甕)	I-B--	B:(45)			O. 押捺A i. マメツ不明	O. 10YR6/4にぶい黄橙 i. 10YR6/4にぶい黄橙	
32-302 46-302	土坑1 暗灰色粘質土	底部 (甕)	3-C--	B:(54)			O. スリナデIAa スリナデICa i. ケズIB	O. 10YR5/2灰黄褐 i. 10YR5/2灰黄褐	
32-303 46-303	土坑1 暗灰色粘質土	底部 (甕)	3-C--	B:385			O. タタキ i. 押捺A	O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 7.5YR6/4にぶい橙	底面に線刻あり
32-304 46-304	土坑1 暗灰色粘質土	底部 (甕)	I-A--	B:56			O. タタキ→ スリナデICa i. スリナデIAb	O. 10YR5/2灰黄褐 ~2.5Y5/2暗灰黄 i. 10YR5/2灰黄褐 ~2.5Y5/2暗灰黄	
32-305 46-305	土坑1 暗灰色粘質土	底部 (甕)	3-C--	B:3.5			O. 押捺A→ スリナデICa i. スリナデIAb	O. 10YR7/3にぶい黄橙 i. 10YR7/4にぶい黄橙	
32-306 46-306	土坑1 暗灰色粘質土	高 坏	東海形 高坏	C:138	多/cm 多/cm	O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA→ スリナデタテIAa i. スリナデICa	O. 2.5YR5/6明赤褐 i. 2.5YR5/6明赤褐	搬入品(東海)
32-307 46-307	土坑1 暗灰色粘質土	高 坏	E3?-1--	C:(158)			O. スリナデヨコICa i. 押捺A→ ミガキA	O. 7.5YR4/2灰褐 i. 7.5YR4/2灰褐	
32-308 46-308	土坑1 暗灰色粘質土	高 坏	B2-1--	C:(268)			O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. 10YR6/3にぶい黄褐 ~2.5Y4/1黄灰 i. 10YR4/1褐灰 ~7.5YR6/2灰褐	
32-309 46-309	土坑1 暗灰色粘質土	底部 (鉢)	II-A2--	B:50		O. スリナデICa i. スリナデIAb	O. 押捺A i. 押捺A→ ケズIB	O. 10YR6/1褐灰 i. 7.5YR6/6橙	
32-310 46-310	土坑1 灰褐色粘質土	底部 (鉢)	II-A2--	B:5.5		O. タタキ i. スリナデIAb	O. タタキ i. 押捺A	O. 5YR5/6明赤褐 i. 5YR5/6明赤褐	

纏向遺跡発掘調査報告書

——巻野内坂田地区における調査報告——

分析編

第4章 分析編

第1節 纏向遺跡坂田地区の埴輪の表面にみられる砂礫

奥田 尚

(1) はじめに

纏向遺跡坂田地区から出土した埴輪の表面にみられる砂礫を裸眼と肉眼で観察した。初めに埴輪資料全体を裸眼で観察し、観察良好な部分を倍率30倍の実体顕微鏡で観察した。観察した砂礫構成をもとに、源岩を推定し、砂礫の採取地を推定した。

(2) 砂礫の特徴

観察した砂礫種は、花崗岩・閃緑岩・流紋岩・変輝緑岩・石英・長石・黒雲母・角閃石である。これら砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色で、粒形が角、亜角、粒径が最大6mmである。石英・長石、石英・長石・黒雲母、石英・黒雲母が噛み合っている。

閃緑岩：色は灰白色、灰色で、粒形が角、粒径が最大0.7mmである。長石・角閃石、石英・角閃石、石英・長石・角閃石が噛み合っている。

流紋岩：色は灰白色で、粒形が亜角、粒径が最大0.7mmである。石基はガラス質で、石英の斑晶が散在する。

変輝緑岩：色は暗灰色で、粒形が亜円、粒径が最大5mmである。細粒で柱状をなす長石と角閃石がみられる。図13-10、14-16の資料にみられる。

石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大2mmである。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

長石：灰白色、灰白色透明で、粒形が角、粒径が最大2mmである。

黒雲母：黒色、金色で、板状をなし、粒径が最大1.5mmである。

角閃石：黒色で、粒状、柱状をなし、粒径が最大1.5mmである。結晶面が認められるものがある。

(3) 類型区分と砂礫採取推定地

観察した砂礫構成をもとに源岩を推定した類型に区分し、砂礫の採取推定地について述べる。類型は花崗岩質岩起源の砂礫を主とする1類型と閃緑岩質岩起源の砂礫を主とする2類型からなる。更に、少量の構成砂礫粒をもとに細分すれば、1類型は1b類型、1bd類型、2類型は2a類型、2ad類型となる。これらの類型の特徴と推定される砂礫の採取地について述べる。砂礫の採取推定地については、遺跡に一番近い地点とする。

1b類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は桜井市の南部一帯に広く分布する領家花崗岩類の分布域で、主として閃緑岩や斑礫岩が分布しない地域の砂礫と推定される。桜井市南部の寺川や米川、栗原川流域には斑礫岩や変輝

緑岩が分布し、角閃石が多く含まれる。天香久山から岩坂にかけての付近には黒雲母花崗岩類が分布する。砂礫の採取推定地を桜井南西としているが、その範囲内の天香久山から橋本にかけての丘陵地、あるいは浅古から赤尾にかけての丘陵地付近の砂礫と推定される。

1 bd類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

この砂礫種構成は前述の1bタイプの砂礫構成に流紋岩質岩起源の礫が含まれたものである。流紋岩質岩は岩脈としても桜井市南部には分布しており、少量であれば混じることもありうる。このことから1bdタイプの砂礫は1bタイプの砂礫採取推定地と同じ地域で採取された砂礫と推定される。

2 a類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は桜井市の南部一帯に広く分布する領家花崗岩類の閃緑岩や斑礫岩が分布する地域の砂礫と推定される。桜井市南部の寺川や米川、栗原川流域の左岸には斑礫岩や変輝緑岩が分布し、角閃石が多く含まれる。天香久山から岩坂にかけての付近には黒雲母花崗岩類が分布する。砂礫の採取推定地を桜井南西としているが、その範囲内の栗原川流域・寺川や米川の流域が砂礫の採取地と推定される。

2 ad類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

この砂礫種構成は前述の2aタイプの砂礫構成に流紋岩質岩起源の礫が含まれたものである。流紋岩質岩は岩脈としても桜井市南部には分布しており、少量であれば混じることもありうる。このことから2adタイプの砂礫は2aタイプの砂礫採取推定地と同じ地域で採取された砂礫と推定される。

(4) おわりに

纏向遺跡坂田地区が位置する巻向川の扇状地の砂礫には花崗岩質岩起源の砂礫を主とし、角閃石や輝石の砂礫が僅かにみられる。このようなことから埴輪にみられる砂礫構成とは異なる。また、天理市山田から成願寺にかけての付近では殆ど角閃石が認められない砂礫となる。

桜井南西部で採取された砂礫を使用して製作された埴輪が纏向遺跡坂田地区から出土していると推定される。

表36 纏向遺跡坂田地区出土埴輪の表面にみられる砂礫1

図番号	器 種	石 種										鉱 物				種			類型と砂礫の採取推定地	
		花崗岩	閃緑岩	流紋岩	砂 岩	泥 岩	チャート	片 岩	火山ガラス	石 英	長 石	黒雲母	角閃石	輝 石	30倍					
図版番号		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	
9.10-1	鶏形		L-僅角												L-多	L-僅	M-僅板	M-稀板	S 僅EF僅	1b類型 桜井南西
25.26																				
11-2	冠帽形	L-僅角	L-僅角												M-僅	L-中	M-僅板		S 中EF中	2a類型 桜井南西
27																				
11-2	冠帽形頂部	L 微角	L 微角												L-中	L-僅	M-稀板	M-僅板	M-中EF中	2ad類型 桜井南西
27																				
12-3	冠帽形?		M 稀亜角												L-中	L-僅	M 稀板	M 僅板	M-僅EF僅	1bd類型 桜井南西
29-3																				
12-4	冠帽形?	L 僅角	M 微角												M-中	L-中	M 僅板	M 微板	M-僅EF僅	1b類型 桜井南西
29-4																				
12-5	冠帽形?		M 稀角												M-中		M 僅板	M 稀粒板	M-中EF中	2ad類型 桜井南西
29-5																				
12-6	不明	L-稀角	M 微角												S 微	M-微	M-微粒板	M 微粒板	M-中EF僅	2a類型 桜井南西
29-6																				
12-7	不明	M 稀角	M 稀角												L-僅	M-僅	M-微板	M 微板	M-僅	1b類型 桜井南西
29-7																				
12-8	不明形象		M 稀角													M-中	L-僅	M 稀板	M-中	2a類型 桜井南西
29-8																				
12-9	不明形象	L-微角	M 微角												L-中	M-僅	M-僅板	M-僅板	M-中	2a類型 桜井南西
29-9																				
13-10	朝顔形	L-僅角	L-中角												M-中	L-多	M-微板	M-僅板	S 中	2a類型 桜井南西
28-10																				
13-11	朝顔形	L-微角	L-僅角												M-中	M-僅	M-稀板	M-微板	S 多EF中	2a類型 桜井南西
28-11																				
14-12	朝顔形一次口縁		M 微角												L-多	L-中	M-微板	M-微粒板	M-多	2ad類型 桜井南西
29-12																				
14-13	朝顔形?胴部	L-微角	L-微角												M-僅	L-中	S 稀板	M-稀板	M-多	2a類型 桜井南西
29-13																				
14-14	朝顔形?胴部	L-僅角	L-僅角												M-僅	L-多	S 中板		M-僅	1b類型 桜井南西
29-14																				
14-15	朝顔形?肩部?	M-稀角	L 稀角												M-僅	M-微	M-僅板	M-多EF僅	M-多EF僅	2a類型 桜井南西
29-15																				

裸眼=裸眼観察 裸眼による観察: L=粒径が2mm以上 M=粒径が2mm未満0.5mm以上 S=粒径が0.5mm未満 非=量が非常に多い 多=量が多い 中=量が中 僅=量が僅か 微=量がごく僅か 稀=量がごくごく僅か 30倍=実体顕微鏡の倍率が30倍 実体顕微鏡による観察: L=粒径が1mm以上 M=粒径が1mm未満0.3mm以上 S=粒径が0.3mm未満 -=以下の粒径がある E=自形 EF=結晶面がある W=白雲母が含まれる 板=板状 貝=貝殻状 フ=フジツボ状 パ=蛭石状 球=球状 類型区分は奥田の区分(1992)「庄内式土器研究2」を参照。

表37 纏向遺跡坂田地区出土埴輪の表面にみられる砂礫2

図番号	器 種	石 種										鉱 物					種			類型と産地の採取推定地
		花崗岩	閃緑岩	流紋岩	砂 岩	泥 岩	チャート	片 岩	火山ガラス	石 英	長 石	黒雲母	角閃石	輝 石						
図版番号		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍			
14-16	朝顔形? 胴部	L-微角	L-僅角											M-僅	M-中	M-微板	M-稀板	M-中		2a類型 桜井南西
29-16																				
14-17	朝顔形? 胴部	L 稀角	L 微角											M-僅	M-中	M-僅板	S 僅板	M-中板		2a類型 桜井南西
29-17																				
14-18	朝顔形? 胴部	L-微角	L 微角											M 中	M-中	M-僅板	S 中	M-中EF中		2a類型 桜井南西
29-18																				
14-19	朝顔形? 胴部	L-僅角	M 稀角											M-僅	M-中	M-僅板	S 微板	M-中板		2a類型 桜井南西
29-19																				
14-20	朝顔形? 突帯	M 微角	L-僅角											M-僅	L-中	M-僅板	S 稀板	M 多EF僅		2a類型 桜井南西
29-20																				
14-21	朝顔形? 胴部	L 僅角	L 僅角											M-僅	M-中	M-僅板		M-中		2a類型 桜井南西
29-21																				
14-22	朝顔形? 胴部	L 僅角	L 僅角											M-僅	M 僅	M-僅板	S 微板	M-中EF僅		2a類型 桜井南西
29-22																				
14-23	朝顔形? 突帯		L 僅角											L-多E 微	M-微	M-僅板	S 微板	M 僅		1bd類型 桜井南西
29-23																				
14-24	朝顔形? 突帯	M 稀角	M 微角											M-中	M-中	M-中板	S 稀板	M-僅		1b類型 桜井南西
29-24																				
14-25	朝顔形? 突帯		M 僅角											M-微	M-僅	M 稀板	S 微板	S 中		2a類型 桜井南西
29-25																				
14-26	朝顔形? 胴部	M-僅角	L-僅角											M-微	M-中	M-僅板	S 僅板	M-中EF僅		2a類型 桜井南西
29-26																				
14-27	胴部? ヒレ?	L 僅角	L 僅角											M-僅	M-中	M-微板	M-中板	S 中		2a類型 桜井南西
29-27																				
14-28	朝顔形? 底部	L-僅角	L-僅角											S 稀	M-中	M-僅板	S 微板	M-中板		2a類型 桜井南西
29-28																				
14-29	朝顔形? 底部	L-稀角	M 微角											M-僅	M-中	M-僅板	S 微板	S 僅		1b類型 桜井南西
29-29																				

裸眼＝裸眼観察 裸眼による観察; L＝粒径が2mm以上 M＝粒径が2mm未満0.5mm以上 S＝粒径が0.5mm未満 非＝量が非常に多い 多＝量が多い 中＝量が中 僅＝量が僅か 微＝量がごく僅か 稀＝量がごくごく僅か 30倍＝実体顕微鏡の倍率が30倍 実体顕微鏡による観察; L＝粒径が1mm以上 M＝粒径が1mm未満0.3mm以上 M＝粒径が0.3mm未満 ー＝以下の粒径がある E＝自形 EF＝結晶面がある W＝日雲母が含まれる 板＝板状 貝＝貝殻状 フ＝フジツボ状 パ＝蛸石状 球＝球状 類型区分は奥田の区分(1992)「庄内式土器研究2」を参照.

第2節 形象埴輪の表面にみられる赤色顔料の分析結果について

坂田地区の落ち込み1出土埴輪の表面に残存する赤色顔料について奈良県立橿原考古学研究所保存科学研究所の奥山誠義氏の御厚意により蛍光X線分析器によって成分分析をして頂くことができた。分析の資料としたのは冠帽形埴輪の破片であり、比較的顔料の残りの良い正面向かって左側面の鰭の付根にあたる部分（図36, 38-1・写真11）と円筒基部破片（図37, 38-2・写真12）の2点である。分析の方法は非破壊での器壁表面における分析であり、分析データは図36・37に示したとおりである。この結果、いずれの資料も鉄分（Fe）の反応が顕著であり、冠帽形埴輪についてはベンガラが塗布されていたものとの結果を頂いている。

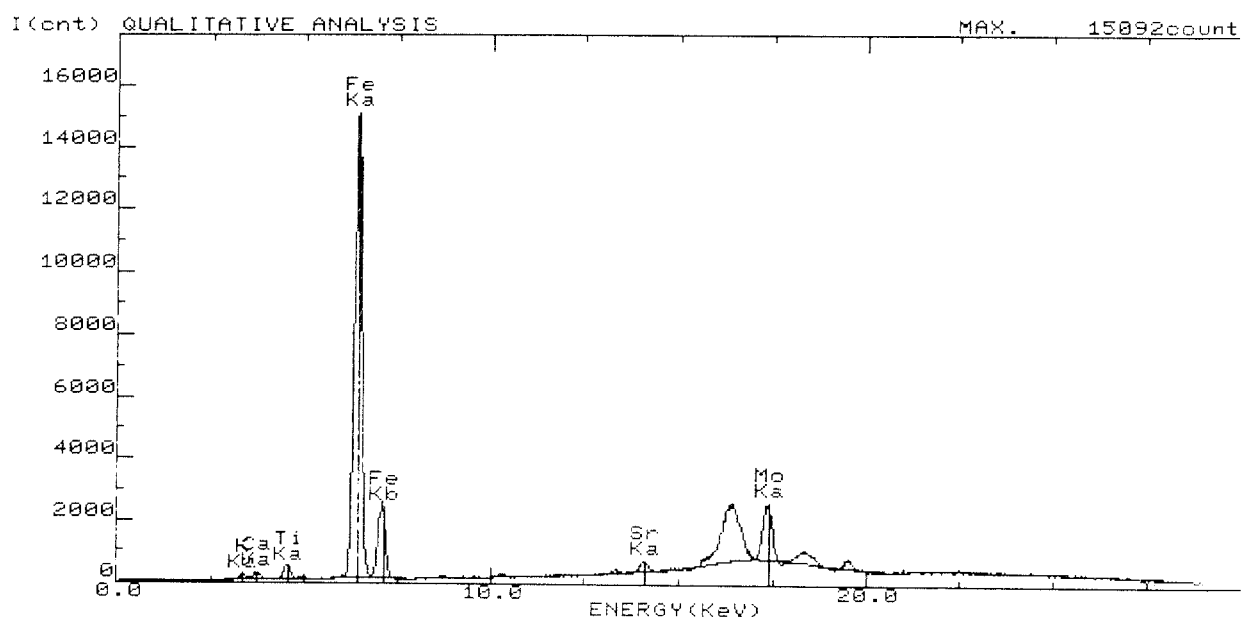


図36 冠帽形埴輪の鰭部付け根表面にみられる赤色顔料の分析結果1

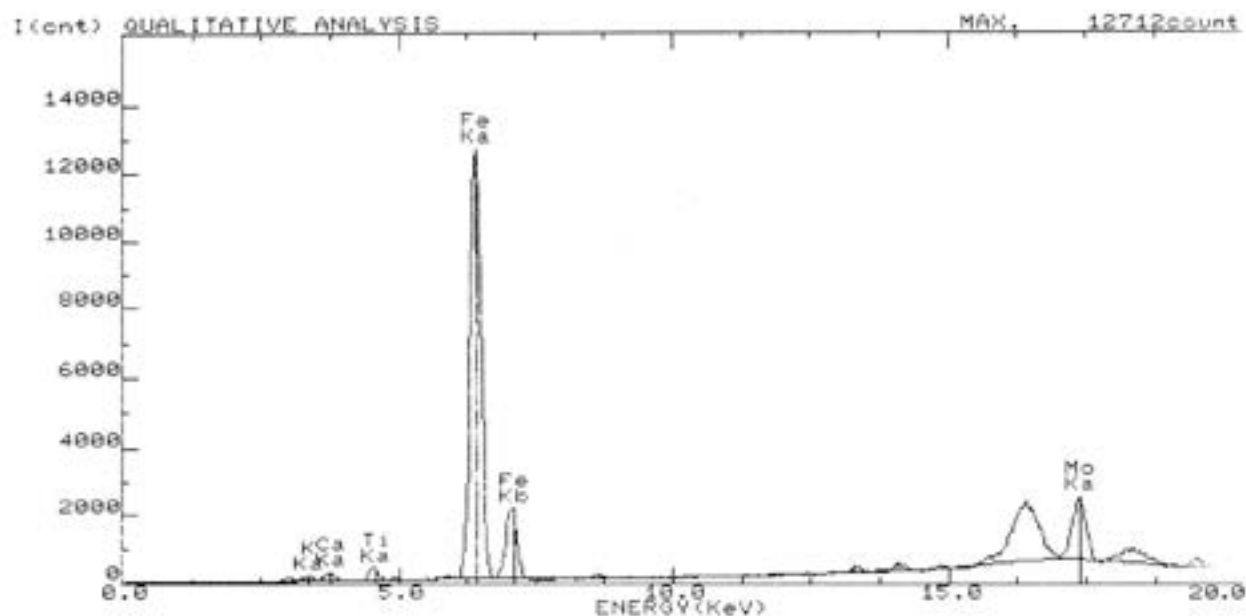


図37 冠帽形埴輪の円筒基部表面にみられる赤色顔料の分析結果2

鶏形埴輪については図9・10に示したように頸部の喉にあたる部分や羽の付根の下側部分などには顕著に朱の塗布が認められ、他の部分でも著しく磨滅が進んでいるものの、ほぼ全面にわたって朱の塗布の痕跡が確認できた。朝顔形埴輪については図13-10の個体は磨滅が進み朱の塗布の痕跡は認められなかったが、図13-11には所々に明瞭な朱の塗布を確認している。

なお、今回の分析作業は各埴輪の復元作業終了後に計画したため、復元作業で使用できなかった小片を分析機にかけることとしたが、残念ながら朝顔形埴輪・鶏形埴輪ともに残された小片には朱の塗布が全く認められなかったため、分析を断念している。現時点での裸眼による観察では鶏形埴輪・朝顔形埴輪双方とも冠帽形埴輪と同様にベンガラが塗布されていたものとみて間違いないと判断しているが、詳細についてはあらためて分析の機会を待つ事としたい。(橋本)



図38 冠帽形埴輪片実測図 (1/3)
(いずれも分析に用いたもの。図36は1のデータであり、図37は2のデータである)

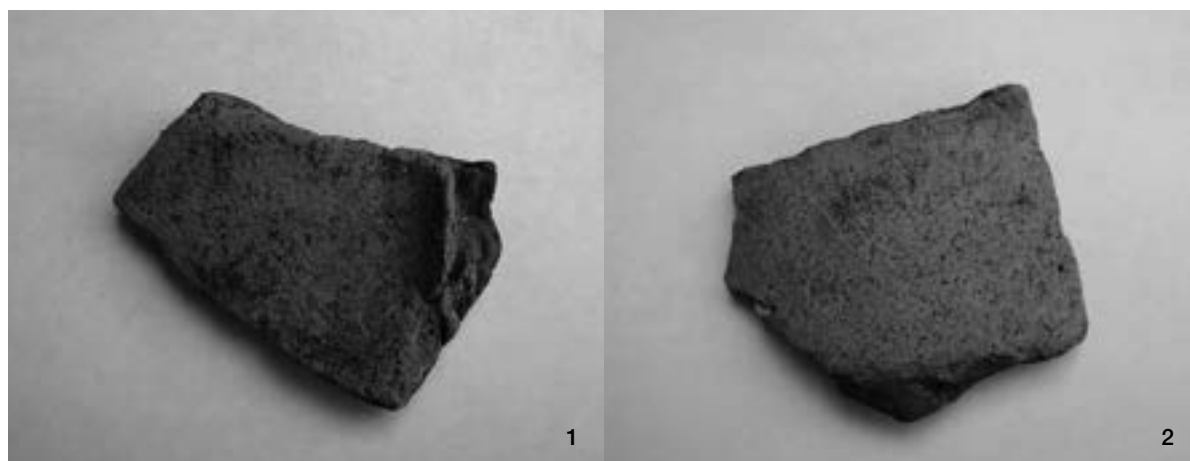


写真11 冠帽形埴輪片 (番号は図38に対応する)

第5章 まとめ

第1節 検出された遺構

(1) 弥生時代の遺構

今回の調査で検出された遺構は弥生時代後期と古墳時代前期に属するものであり、大半は古墳時代前期のものである。従来から言われているように纏向遺跡においては弥生時代の遺構は検出例が極めて少なく、今回の調査においても僅かに土坑1が1基あるのみである。

遺構の所属時期はVI-2様式期と弥生時代でも最終段階のものと考えられ、近隣では南東約370mの地点において行なわれた第135次調査地でVI-1様式期と見られる溝が1条検出されているのみであり、¹⁾纏向遺跡全体を見渡しても第4次調査の土坑2基、第66次調査の纏向石塚古墳墳丘下より検出された土坑1基と溝1条³⁾、第77次調査の纏向石塚古墳周濠外肩において検出された土坑1基³⁾、第73次調査火打池地区で検出された溝が1条ある程度である。

このように現在までの148次にわたる調査でも弥生時代の遺構の確認例は極めて稀なものであり、本調査における遺構の確認は纏向遺跡の成立期及びその前夜を知る上で重要な資料である。

(2) 古墳時代の遺構

さて、古墳時代の遺構に目を向けてみよう。古墳時代の遺構は溝が3条と落ち込み1基、ピット群などがあるが、いずれの遺構もほぼ布留1式期の幅の中におさまるものと考えられ、纏向遺跡でも最盛期にあたる庄内式期から布留0式期にかけての遺構・遺物は僅かに落ち込み1から出土した土器の小片の一部にその可能性がある程度である。

周辺における遺構の分布状況を見てみると、南東約270mの地点で実施された第137・138次調査地⁴⁾・⁵⁾では坂田地区よりは少し新しい段階のものと判断されるものの、布留1式期の竪穴式住居跡が2棟と方形周溝墓が1基検出されており、密度はさほど高くないが遺跡内でも東側のやや高い地域には該期の遺構の展開が想定される。

纏向遺跡全体の布留1式期の遺構の広がりについては初期段階の調査であった辻河道の調査²⁾において比較的多くの布留1式期の土器資料が出土したことから遺跡の中には普遍的に布留1式期の遺構が存在するように思われがちであるが、実際には密度が薄く散在する傾向にあり、坂田地区の遺構群の検出は纏向遺跡の盛期以降の姿を考える上で重要な意義を持つ。

なお、今回の調査のポイントとなる埴輪群の出土した落ち込み1に関しては先に遺構の項目でも述べたように埋没古墳の周濠にあたる可能性が高いと考えている。このことは先に述べた第138次調査地で検出されている落ち込み1と近い時期の方形周溝墓の存在とあわせて周辺に該期の墳墓の展開が想定できるものである。

第2節 出土遺物

(1) 古式土師器

出土遺物の大半は古式土師器であった。検出された遺構の中でも溝2や3からの遺物については非常にまとまった出土状況を示しており、溝資料ではあるものの調査区からは先行する時期の遺物がごく僅かしか出土していないことと合わせて良好な一括性を持つものと判断して良い。

所属時期については土器の項目でも見たように布留1式期でも古相に位置づけられるものと判断できることから少量の弥生形甕や庄内形甕などの存在は混入ではなく、これらの器種が纏向遺跡においてもこの時期まではごく少量残存するものと考えたい。

なお、筆者は現在使用されている編年における布留1・2式期は将来的に新古の2時期に大別されるものとの見通しを持っているが、これらの遺物は今後大和における土器編年を再検討していく上であまり報告例の多くない時期のものとして重要な位置を占めていくものと思われる。

(2) 鍛冶関連遺物

さて、今回の調査では土器以外にも小片ではあるが轆の羽口片や砥石片が出土している。遺物の状態からは調査地において工房の操業が行なわれていたものではないと考えるが、周辺地区での操業が推定できるものであり、所属時期も布留1式期を含めてそれ以前と纏向遺跡内でも比較的古い資料となる。

纏向遺跡における鍛冶関連遺物の出土は布留0式期を最古として過去に数例が報告されているが、^{6) 7) 8)}調査地周辺では初めての出土例であり、その分布からは遺跡内に散在して鍛冶工房が存在していたことが想定できるもので、小片ではあるものの当時の遺跡内における生産体制を考える上では注目すべき資料である。

(3) 埴輪群

埴輪群については評価が非常に難しい。出土遺構については古墳周濠の可能性が高いとしたものの決定的ではなく、今後の調査結果を待たざるを得ない。所属時期については第3章第4節で橋爪が検討したように埴輪研究の視点からは川西編年⁹⁾のⅠ期でも新しい段階からⅡ期の初めに入ってもやや古い要素を残すものと判断されており、年代はおおよそ4世紀の前半でも新しいところから中葉にかけてとの検討結果が出されている。

土器からの視点で見てみよう。遺構や遺物の項目でも見た様に落ち込み1からの共伴土器となる下層～上層出土の遺物はその一括性が判然としない事から布留0式期から布留1式期の幅の中でしか位置づける事ができず、これらが確実に埴輪との同時性を示すものか否かを判断することは困難である。

単純に考えると埴輪群の所属時期もこの幅の中でしか位置づけることはできないが、埴輪群の持つ様相を他の類例と比較すると布留0式期まで遡って考えることは困難であることから、出土土器の中に認められる新しい要素である布留1式期の中で捉えるのが適切と考える。

なお、出土土器は大半が小片であり、まとまった量も無いことから布留1式期の中での細かな時期

の検討を加えるのは難しいが、少なくとも新相段階まで下ると見られる資料は皆無と考えており、埴輪の所属時期も布留1式期の中でも古相～中相までの幅の中で捉えるのが適切と考える。

このことから考えられる埴輪の年代観は4世紀前半代、間違いを恐れず言えば天理市東殿塚古墳¹⁰⁾や西山古墳¹¹⁾などの他の「おおやまと地域」における古墳出土遺物の年代観との比較からは布留1式期でも中相に近い4世紀第2四半世紀初めを前後する頃のものとして想定しており、埴輪から導き出された年代観とも矛盾の無いものである。

いずれにせよ、現時点で坂田地区出土の埴輪群はこれに先行するとされる天理市西山古墳出土の家形埴輪などと合わせて「おおやまと地域」での形象埴輪としては出現段階のものであり、畿内を広く見渡しても同時期の類例は極めて稀少である。出現期の形象埴輪のセットである家や鶏、冠帽形などがこの地域で確認されたということは今後形象埴輪の起源や展開を考えていく上で一つの起点と成り得る重要な資料と言えよう。

さて、第1章でも述べたようにここまで報告してきた埴輪群については共伴資料や出土遺構の検討が行なわれないままに独り歩きしていたものであった。今回の報告書の作成にあたっては文化財課諸氏の助けを受けて埴輪については全くの門外漢である担当者らがまとめたものであり、不備や錯誤の多い報告となってしまったのではないかとこの危惧もあるが、本報告書の刊行が今後の研究に少しでも寄与するものである事を願うとともに、長らく放置されていた調査に関する基礎的な資料を提示できたことを素直に喜び、筆を置く事としたい。(橋本)

【註記】

- 1) 福辻淳「第4節 纏向遺跡第135次発掘調査報告(平塚古墳隣接地)」『桜井市平成15年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会2004
- 2) 石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教育委員会1976
- 3) 萩原儀征「纏向石塚古墳の概要」『纏向石塚古墳第1期整備事業 範囲確認調査(第5～第7次)概報』(財)大和文化財保存会・桜井市教育委員会1995
- 4) 丹羽恵二「第6節 纏向遺跡第137次発掘調査報告」『桜井市平成15年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会2004
- 5) 福辻淳「第7節 纏向遺跡第138次発掘調査報告」『桜井市平成15年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会2004
- 6) 橋本輝彦「纏向遺跡第80次発掘調査報告」『桜井市平成6年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会1995
- 7) 橋本輝彦「纏向遺跡第90次発掘調査報告」『桜井市平成8年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会1997
- 8) 青木香津江「桜井市纏向遺跡102次(勝山古墳第1次)発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1997年度』奈良県立橿原考古学研究所1998
- 9) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・3号 日本考古学会1978・1979
- 10) 青木勘時「東殿塚古墳」『西殿塚古墳・東殿塚古墳』天理市教育委員会2000
- 11) 日野宏「大和における首長系譜の一例」『天理大学学報』第145集 天理大学学術研究会1985

あ と が き

現地調査の終了から22年もの時間を経て、やっとのことで「纏向遺跡第42次調査」の調査報告書を世に送り出すことが出来ました。第1章でも述べたとおり、本調査出土の埴輪群は纏向遺跡の出土遺物のなかでも代表的なものの一つですが、正確な実測図や共伴資料などの公表が遅れていたもので、調査担当者が既に退職してしまった状況下にもかかわらずなんとか刊行にたどり着けたことは素直に喜ぶと思います。

編集者も現場の調査担当から離れて三年が経ちました。技師の人数と事務方の人数が同じという恵まれた環境？であるはずの埋蔵文化財センターにおりながら、本来の職務以外の雑用に巻き込まれることも多々あり、本務に専念できない辛い時もありましたが、何とか刊行にこぎつけられたのは業務時間の枠を越えて実測・復元を行って下さったセンターの補助員や整理員さん、埴輪を初めとして多くの遺物を実測し、すべての遺物トレースを引き受けてくれた木場佳子さん、土器実測及び埴輪の原稿を分担執筆してくれた橋爪朝子さん、報告書の作成過程は勿論のこと編集者の業務全般にわたって援助を頂いた同僚諸氏からの協力の他、いつも指導を頂いている諸先生方・多くの技師仲間からの叱咤・激励があったからにほかなりません。

また、原稿の執筆にあたっては奥田尚先生には短期間での原稿の執筆を快く受けていただき、埴輪の胎土に関する分析結果を掲載させて頂くことができましたし、奥山誠義氏には忙しい業務の合間を縫って赤色顔料の分析を行って頂きました。お陰を持ちまして内容をより充実したものとさせて頂くことができましたことを記して御礼申し上げます。

さて、今回報告した坂田地区の埴輪群がそうであったように過去に実施された市内遺跡の調査の中にはまだまだ多くの未報告資料や、十分な報告書の作成が行なわれていないものが残されているのが現状です。これらの中には、目立った遺物や遺構の存在だけがクローズアップされて一人歩きしているものも数多くありますが、どんなに珍しい遺構や遺物があったとしても、やはり出土遺構や共伴遺物の情報、調査全般の報告が伴わないままでは遺物や遺構の持つ本来の価値を見極めることはできませんし、遺跡の全体像の解明にも繋がるものではありません。

収蔵庫に積上げられた山のような遺物のコンテナを見るたびに溜息が出るばかりですが、年若く内務にまわった編集者としては、自分の担当した調査は勿論のこと、今後もこれらの資料の公表を継続していくことが自分に課せられた大きな役割の一つと考え、歩みは遅いかも知れませんが一歩ずつ前進していく強い意志を持ち続けていきたいと考えています。

(平成19年 3 月 編集者記す)

纏向遺跡発掘調査報告書

——巻野内坂田地区における調査報告——

図版編



調査前の様子（東より）



現代の調査地の様子（西より）

PL.2 纏向遺跡第42次調査



上層遺構面の調査の様子（東より）



上層遺構面完掘状況（東より）



調査区東端南壁土層断面（北より）



土坑2 遺物出土状況（南より）

PL.4 纏向遺跡第42次調査



溝1土層断面の様子（北より）



落ち込み2内の粗砂堆積と切り込み面の様子（北より）



落とし込み 1・溝 2・溝 3 の遺物出土状況 (東より)



溝 2 遺物出土状況 (南より)



溝2 完掘状況と下層出土の遺物（南より）



溝2 完掘状況と下層出土の遺物（西より）



溝2下層遺物出土状況（西より）



溝3遺物出土状況（東より）



溝3 遺物出土状況（東より）



溝3 遺物出土状況（北より）



溝3 遺物出土状況（北東より）



溝3 遺物出土状況（東より）



溝3最下層遺物出土状況（東より）



溝3最下層遺物出土状況（北より）



溝3 最下層遺物出土状況（東より）



溝3 東端埋土と切り込み部の状況（北より）



溝3 東半部埋土の状況（北より）



溝3 中央部埋土の状況（北より）



溝3 西半部埋土の状況（北より）



溝3 西端埋土と切り込み面の状況（北より）



溝3 発掘状況 (東より)



落ち込み1 上層遺物出土状況 (東より)



落ち込み1下層上面鶏形埴輪出土状況（北より）



落ち込み1下層上面鶏形埴輪出土状況（北東より）



落ち込み1 拡張区内下層上面遺物出土状況（北より）



落ち込み1 拡張区内下層上面遺物出土状況（南より）



落ち込み1 拡張区内下層上面遺物出土状況（北より）



落ち込み1 拡張区内下層上面遺物出土状況（南より）



落ち込み 1 拡張区内下層上面遺物出土状況（左が北）



落ち込み 1 拡張区内下層上面遺物出土状況（東より）



落ち込み 1 完掘状況と西壁土層断面の様子（東より）



落ち込み 1 完掘状況と拡張区南壁土層断面の様子（北より）



拡張区南壁土層断面の様子（北より）



土坑1 上層遺物出土状況（北より）



土坑1 中層遺物出土状況（北より）



土坑1下層遺物出土状況（北より）



土坑1下層遺物出土状況（西より）



土坑1完掘状況（北より）



土坑1完掘状況（北より）



調査地完掘全景写真（東より）



1-1



1-2

落ち込み1出土鶏形埴輪 (1)



1-3



1-4



2-2

落ち込み 1 出土冠帽形埴輪



2-1



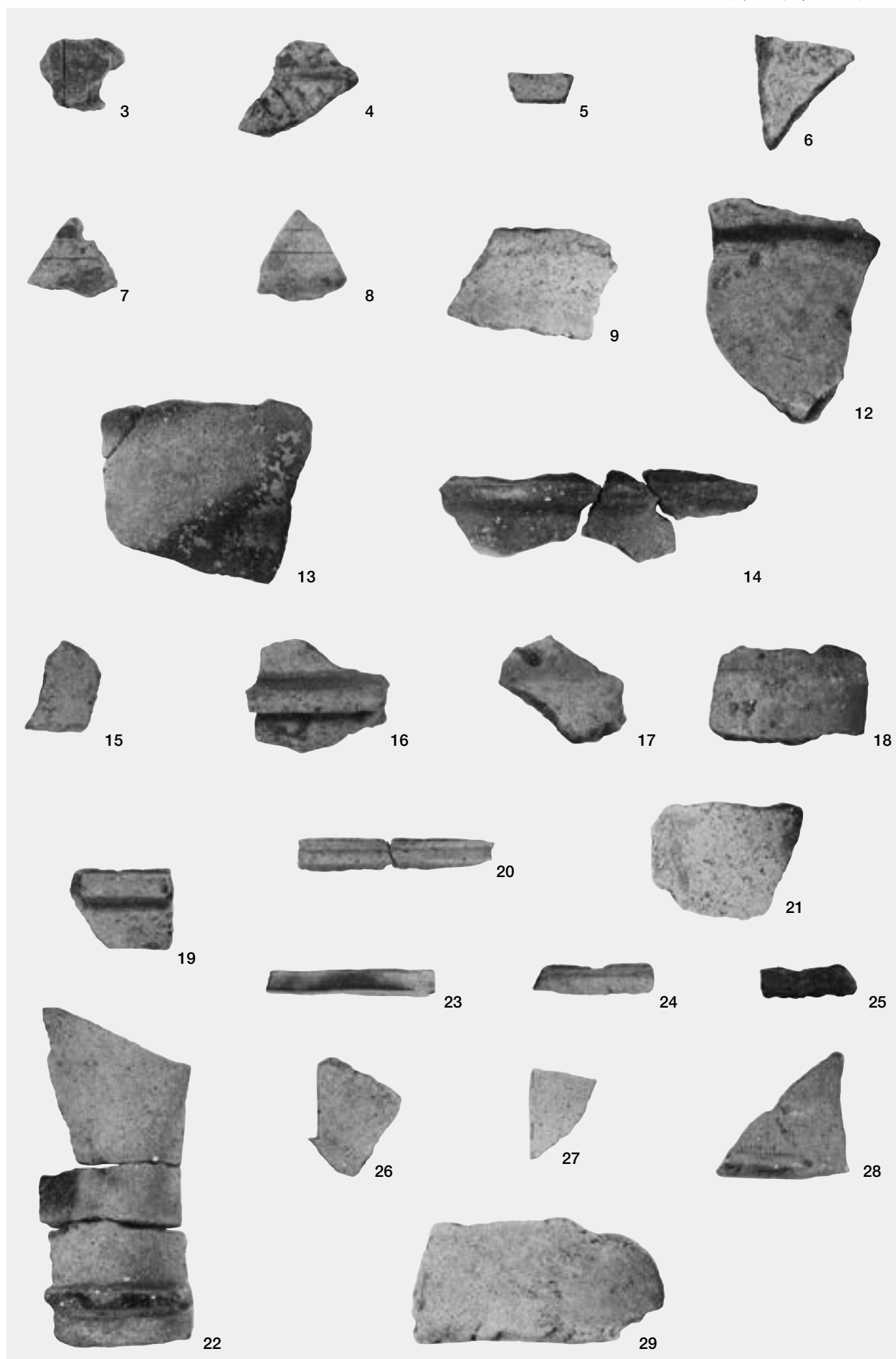
10

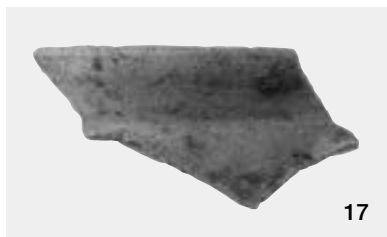
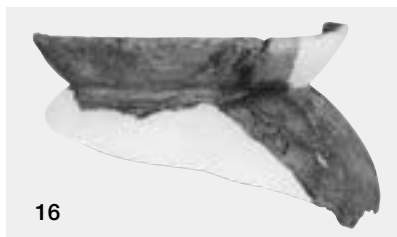
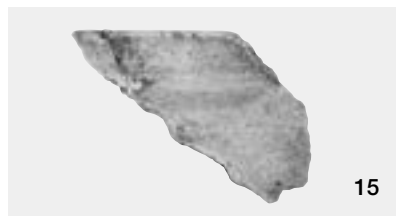
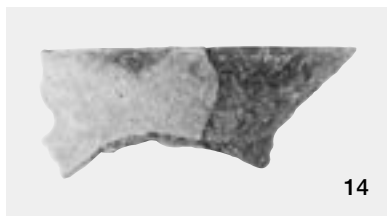
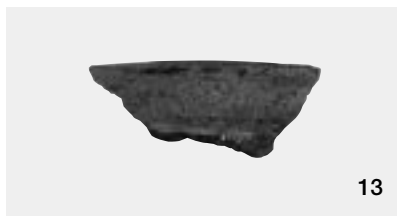
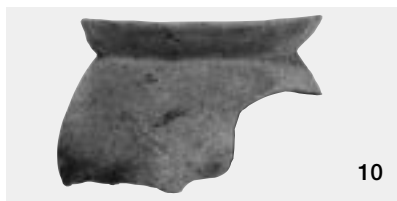
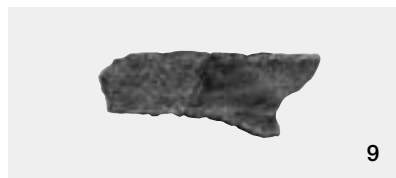
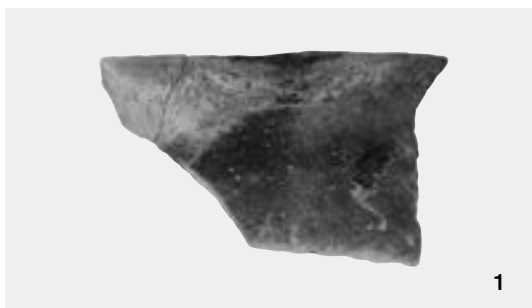
落ち込み 1 出土朝顔形埴輪 1

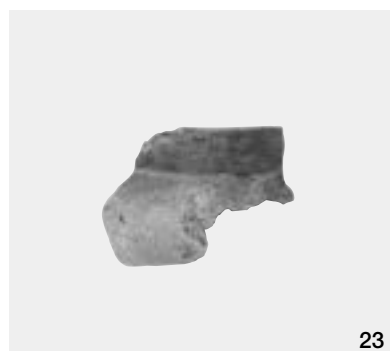
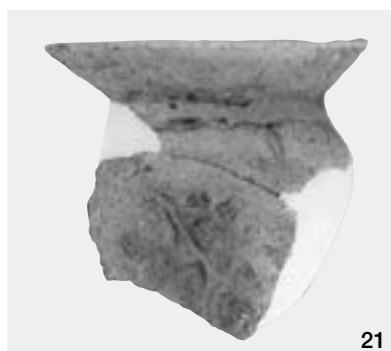


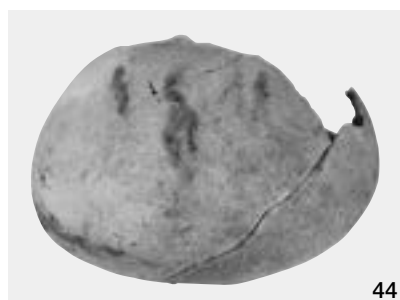
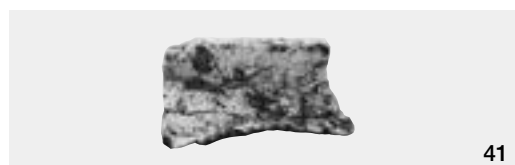
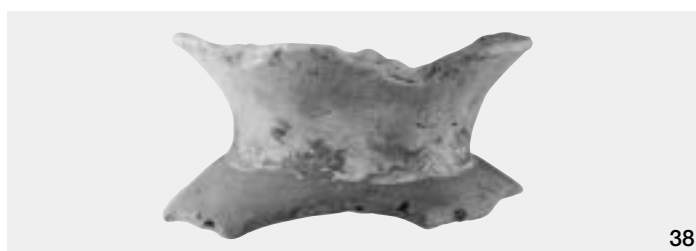
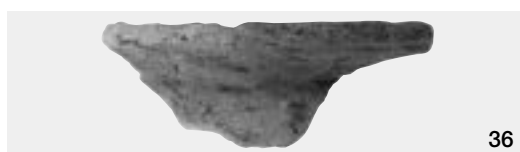
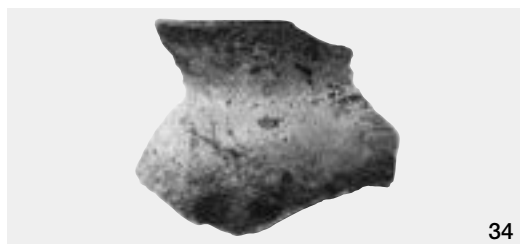
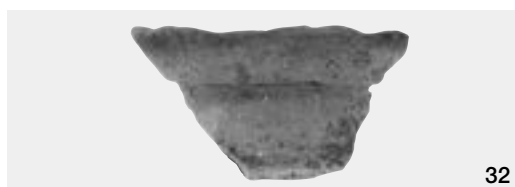
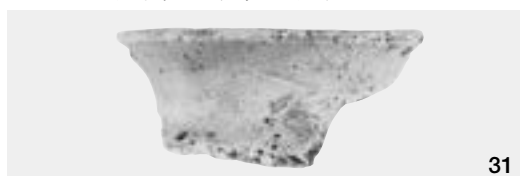
11

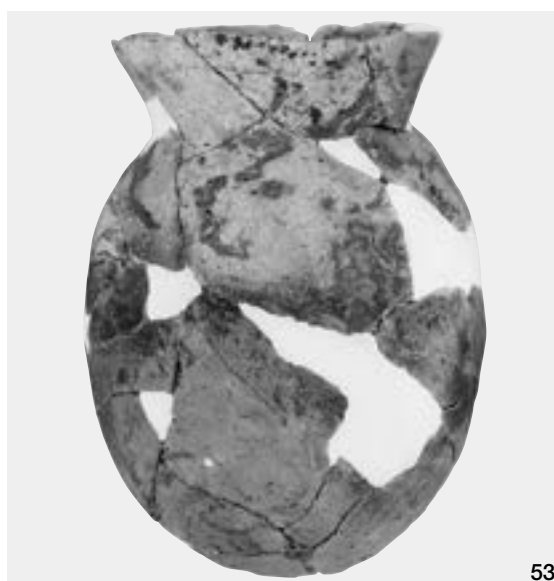
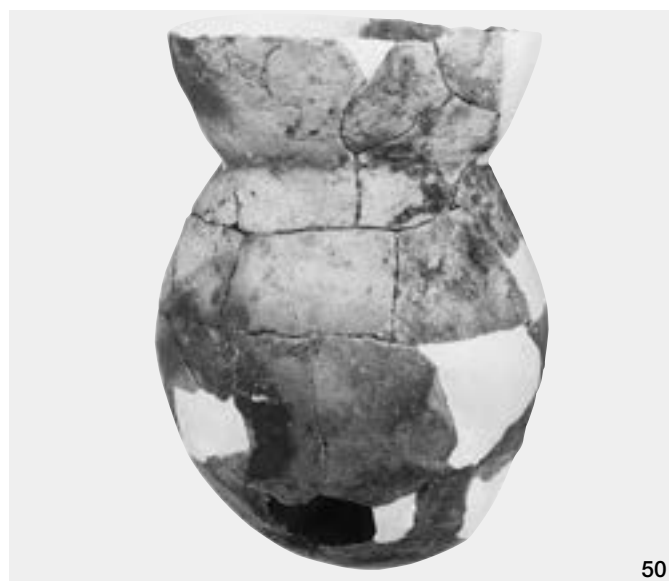
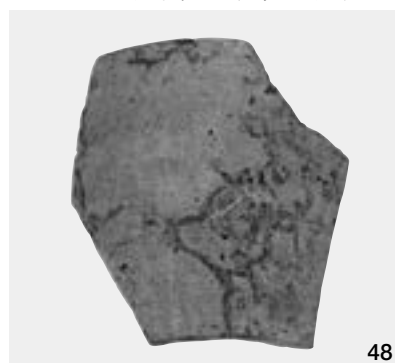
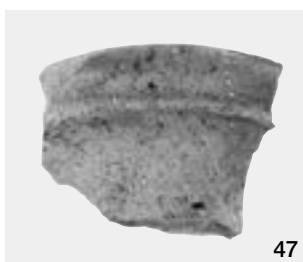
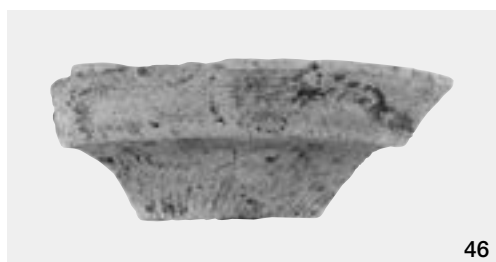
落ち込み 1 出土朝顔形埴輪 2

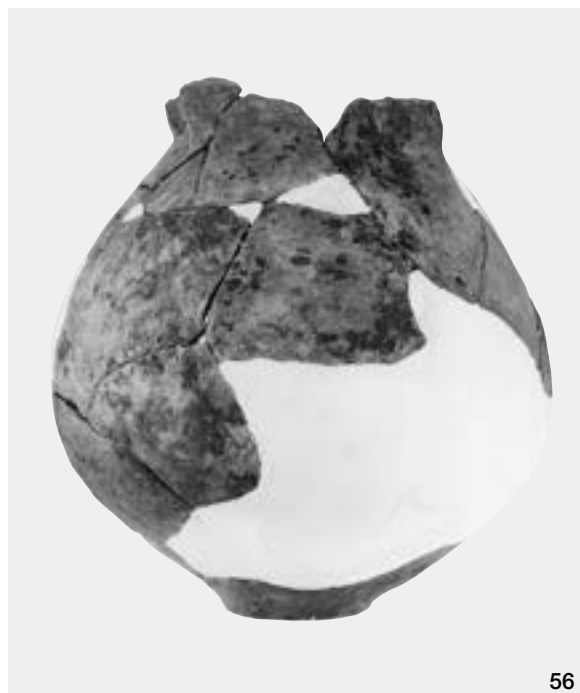
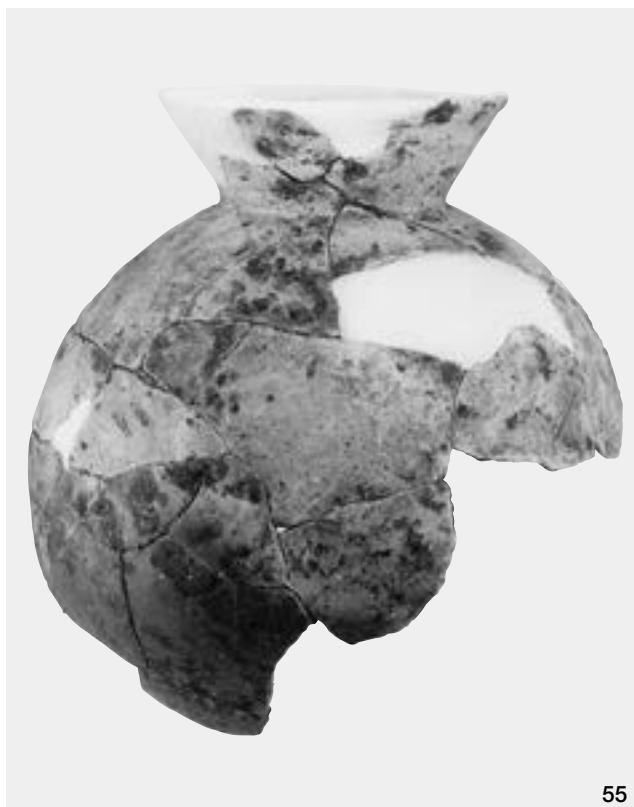
















62



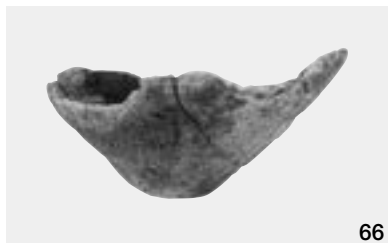
63



64



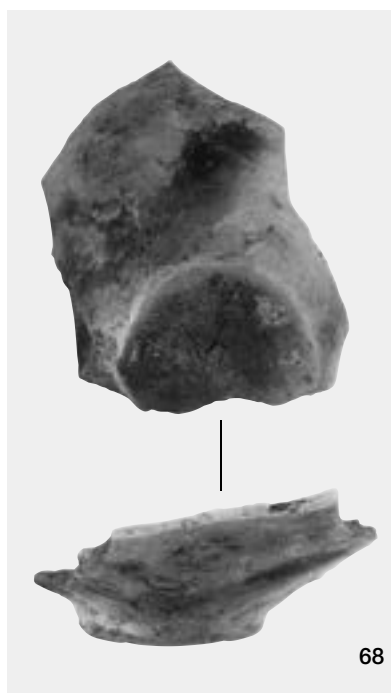
65



66



67



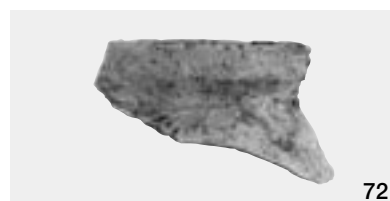
68



69



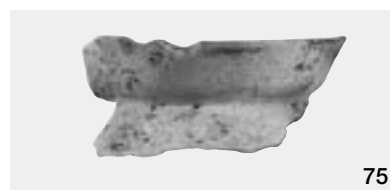
70



72



71



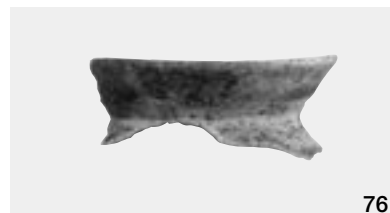
75



73



74



76



77



78



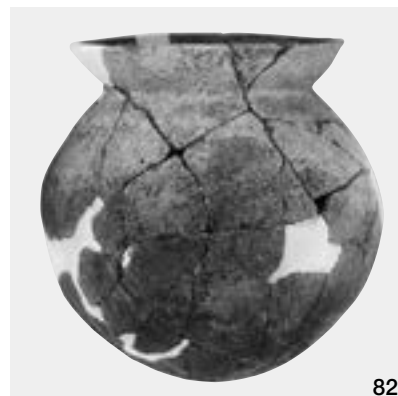
79



80



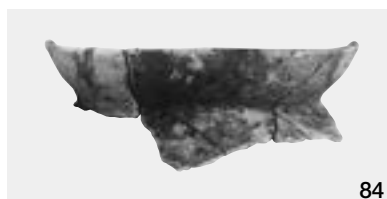
81



82



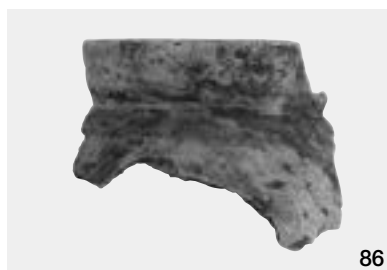
83



84



85



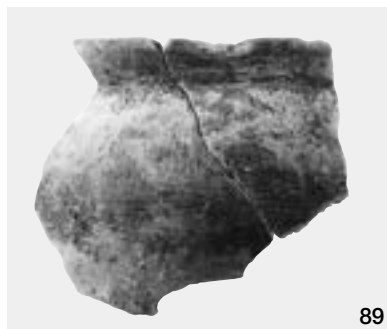
86



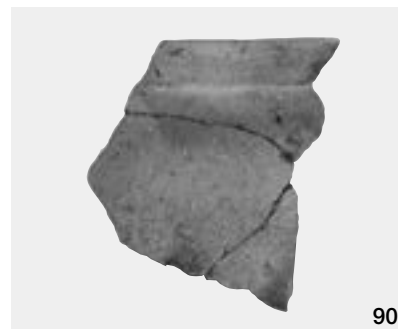
87



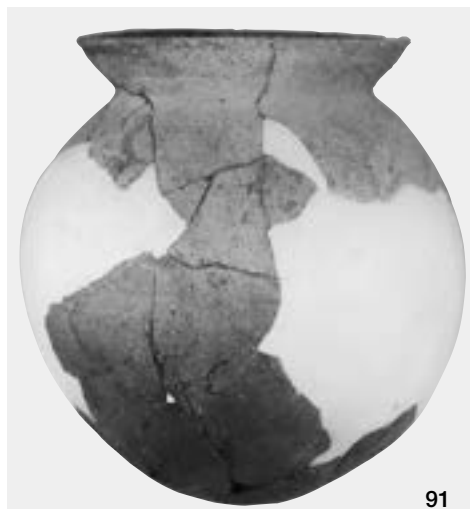
88



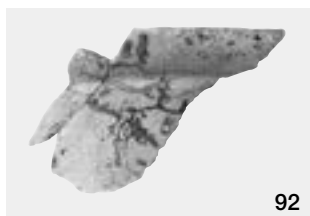
89



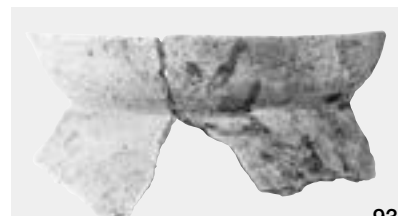
90



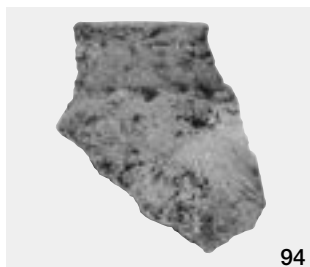
91



92



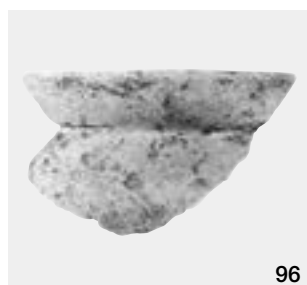
93



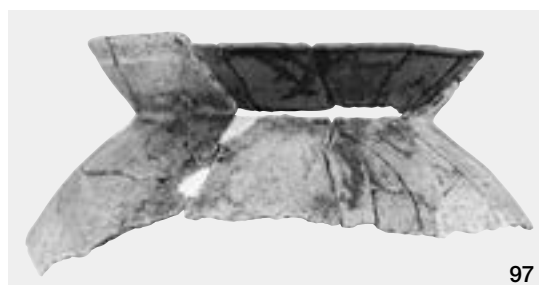
94



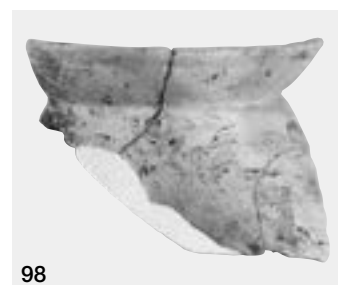
95



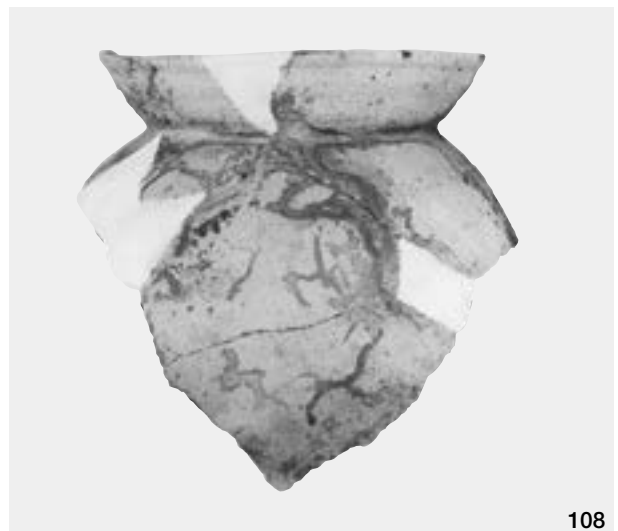
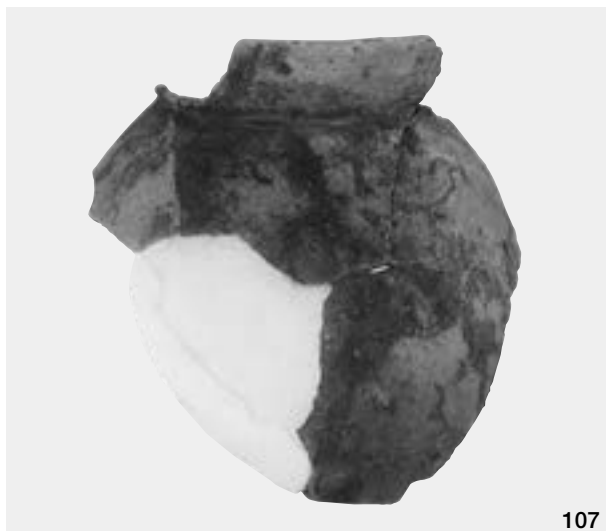
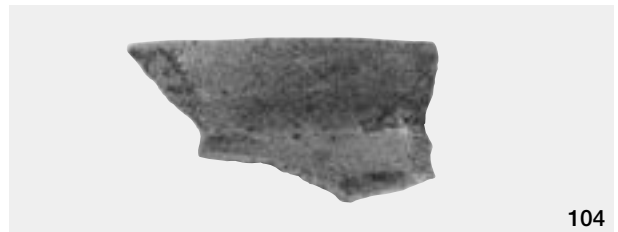
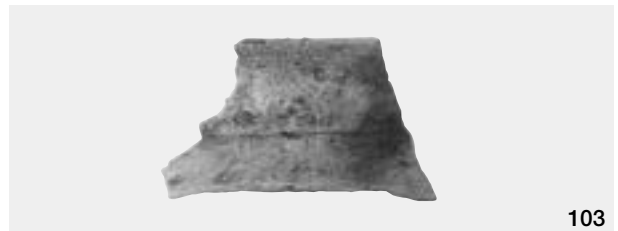
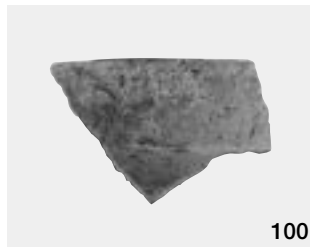
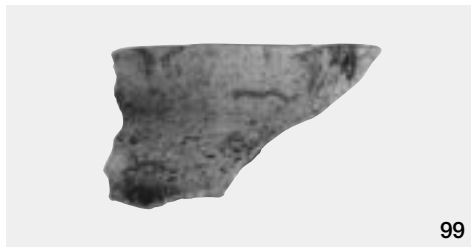
96



97



98





109



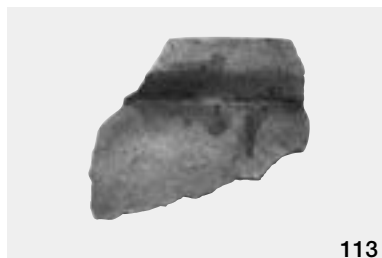
110



112



111



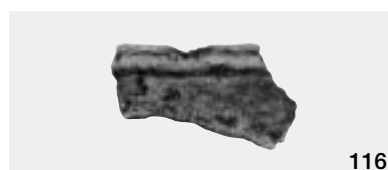
113



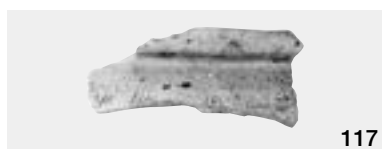
114



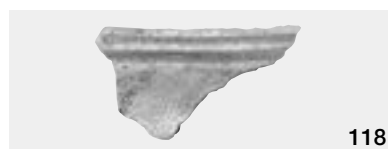
115



116



117



118



119



120



121



122



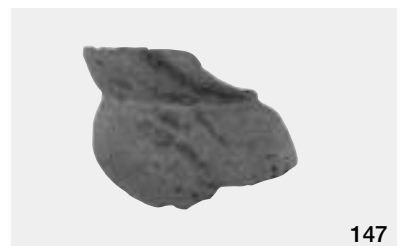
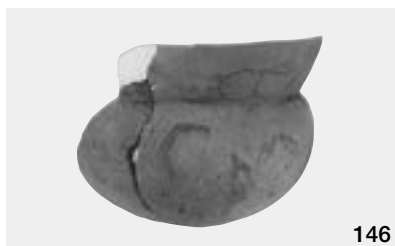
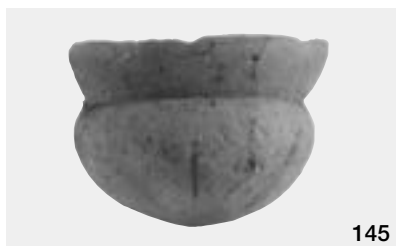
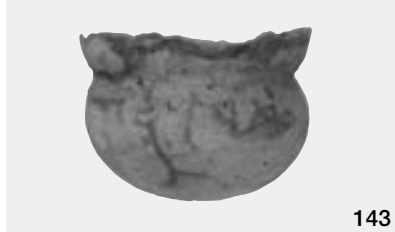
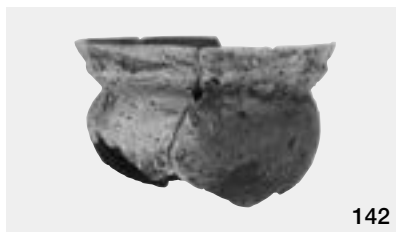
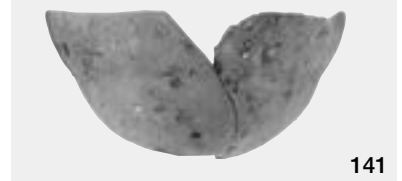
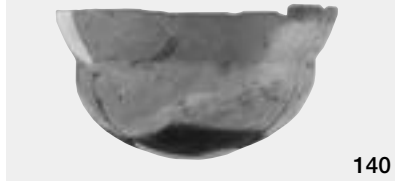
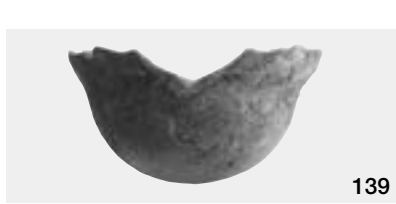
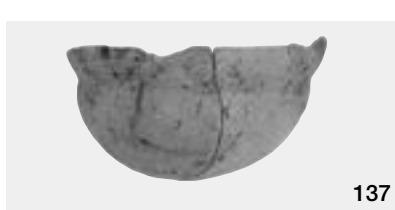
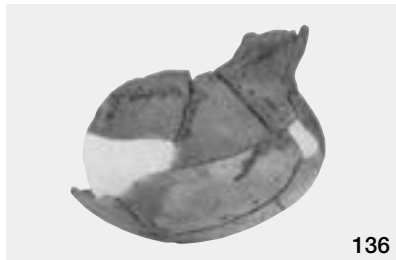
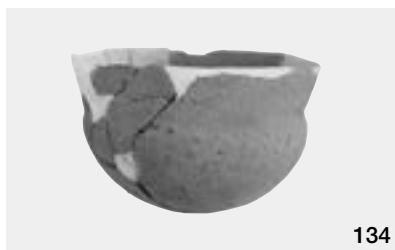
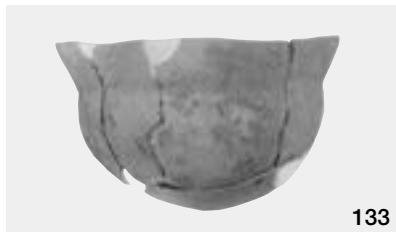
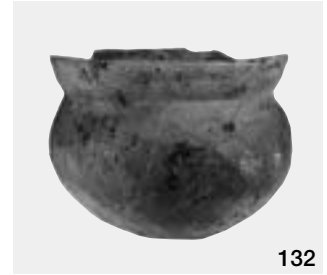
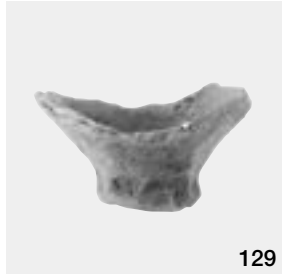
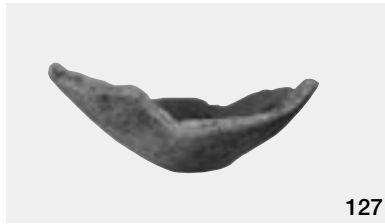
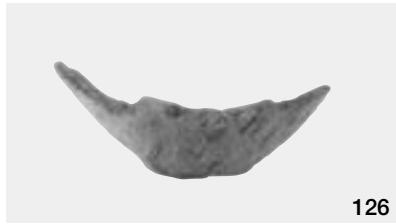
123

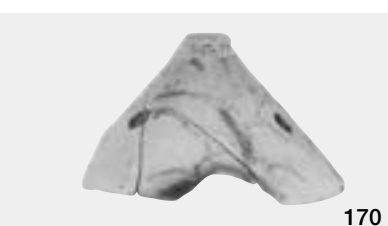
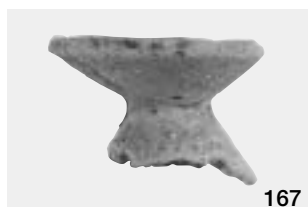
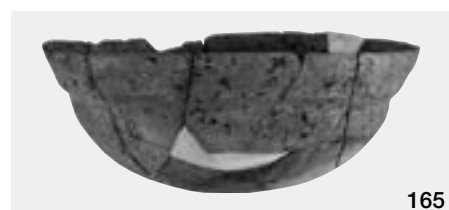
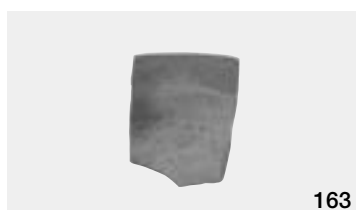
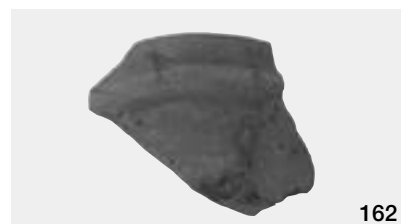
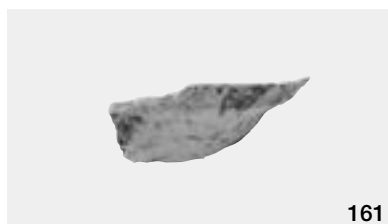
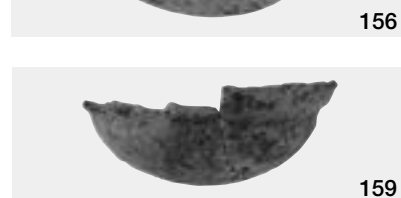
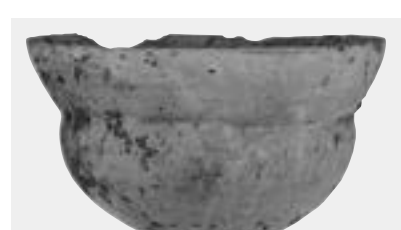
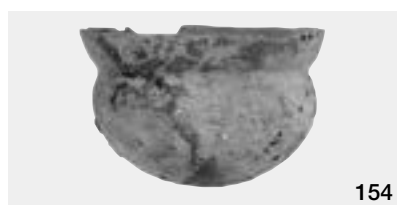
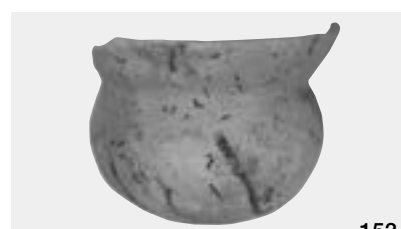
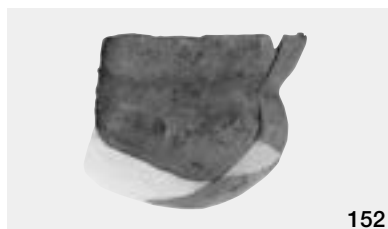
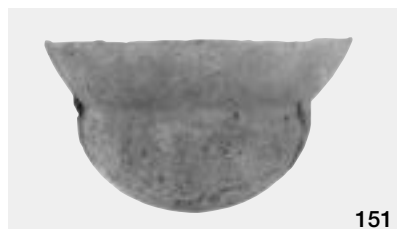
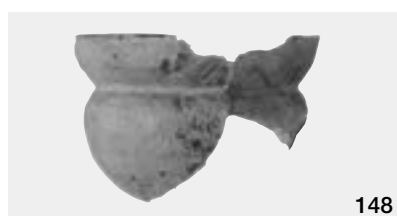


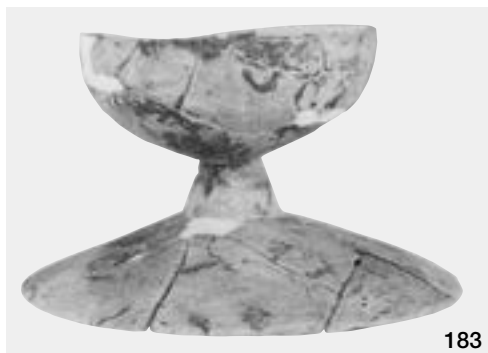
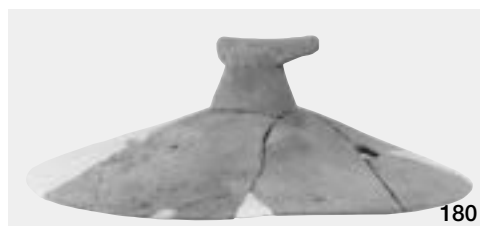
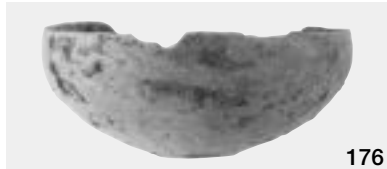
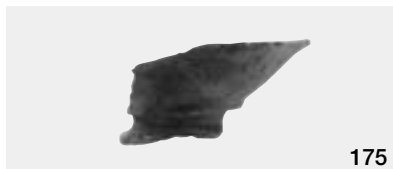
124

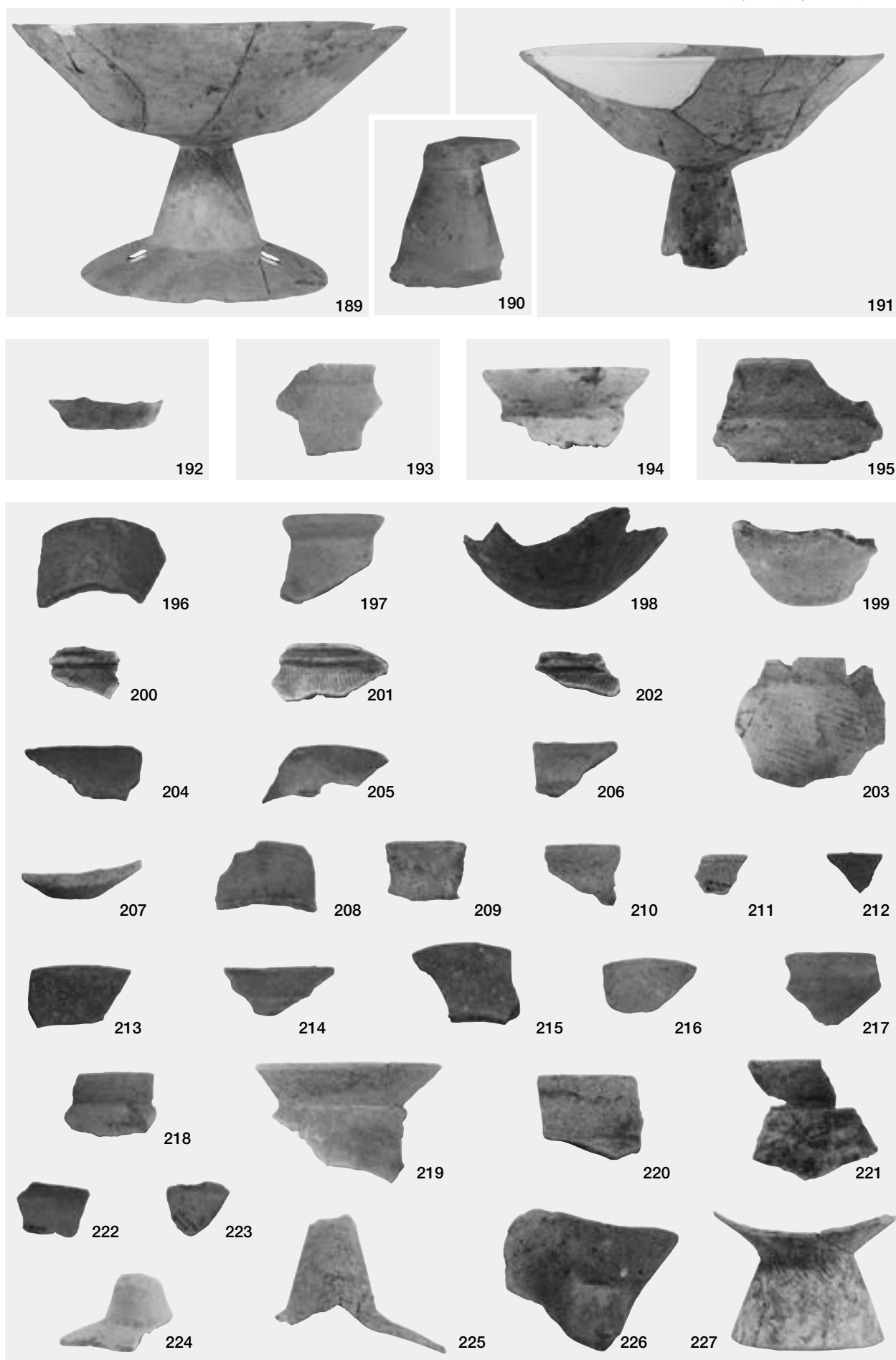


125



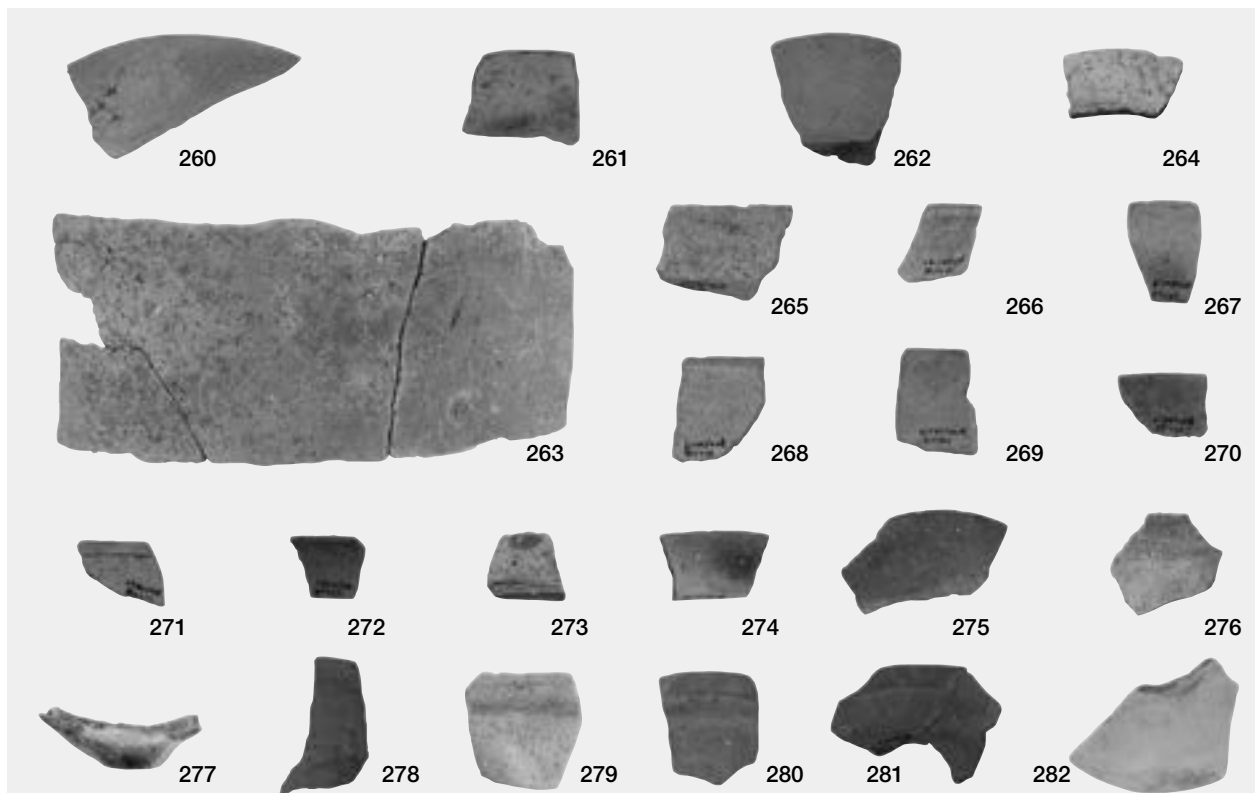
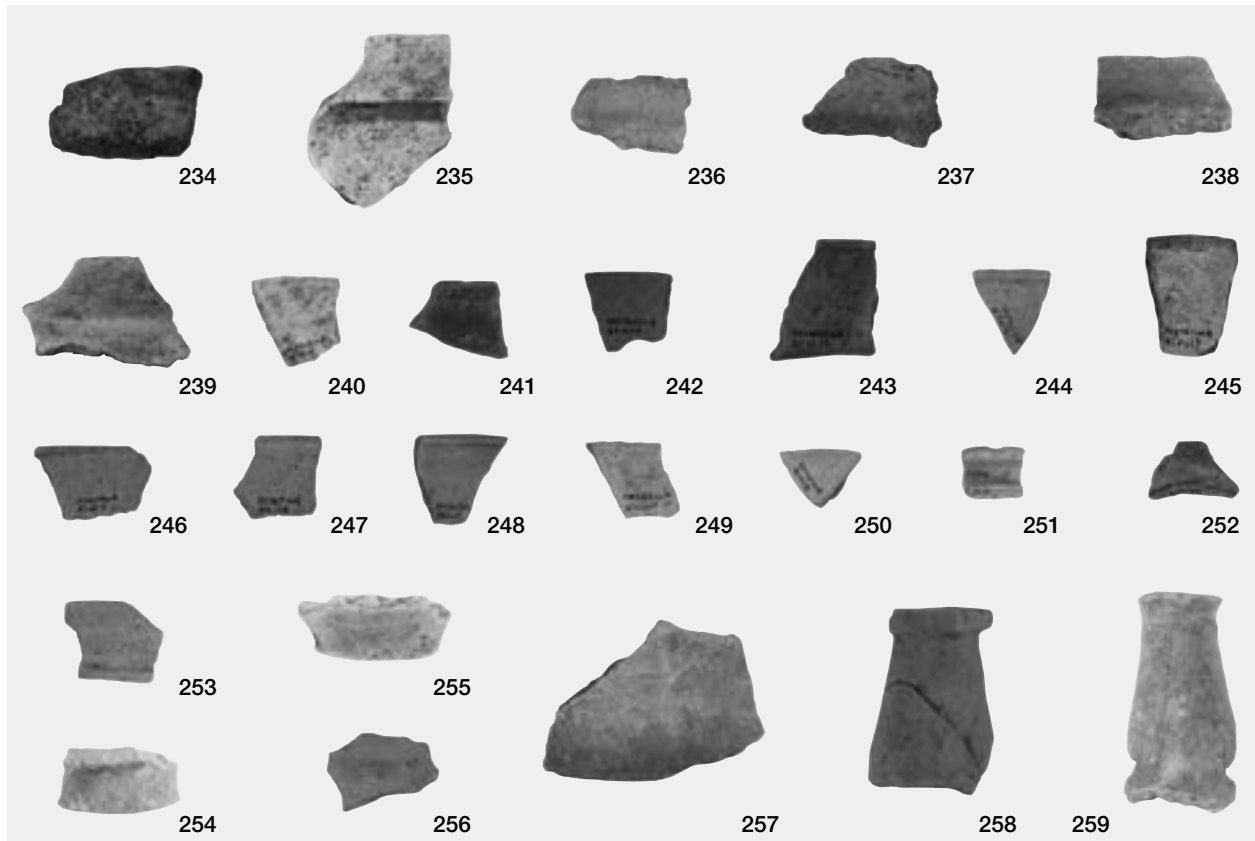
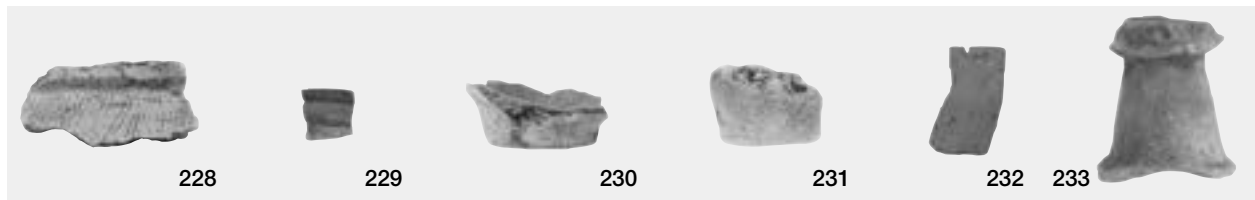




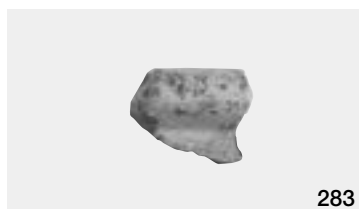


189～191 溝 3 192～195 土坑2 196～227 落ち込み 1 上層 (S=1/3, 226のみ1/1)

PL.44 纏向遺跡第42次調査



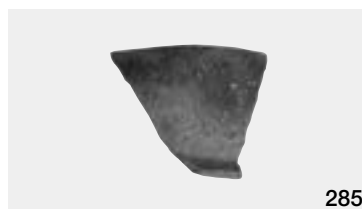
228～233 落ち込み 1 上層埋土内45・61層 234～259 落ち込み 1 上下層埋土界面
260～282 落ち込み 1 下層埋土内 (S=1/3)



283



284



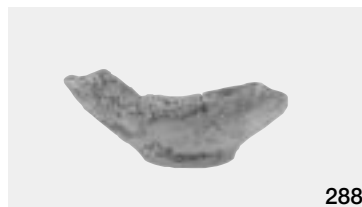
285



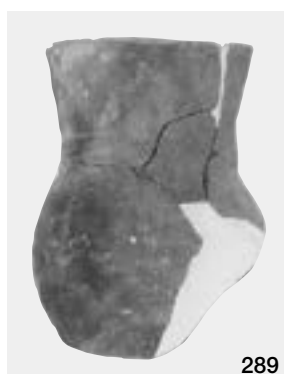
286



287



288



289



290



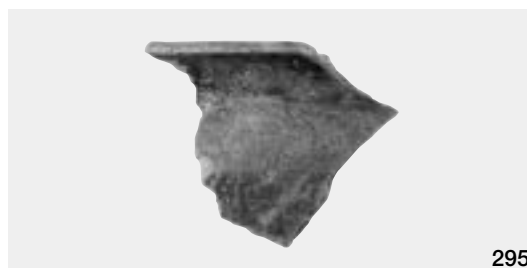
291



292



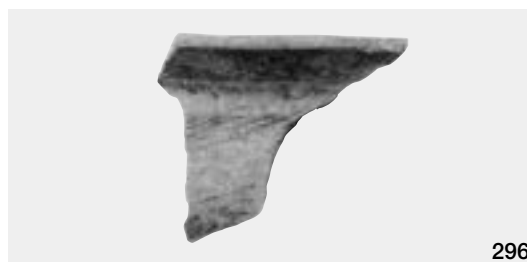
293



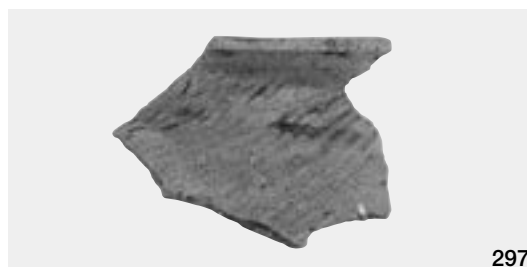
295



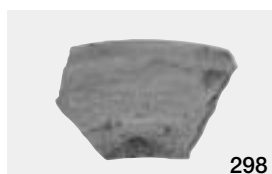
294



296



297



298



299

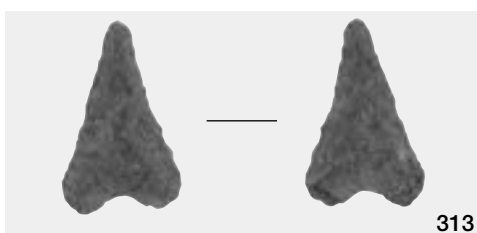
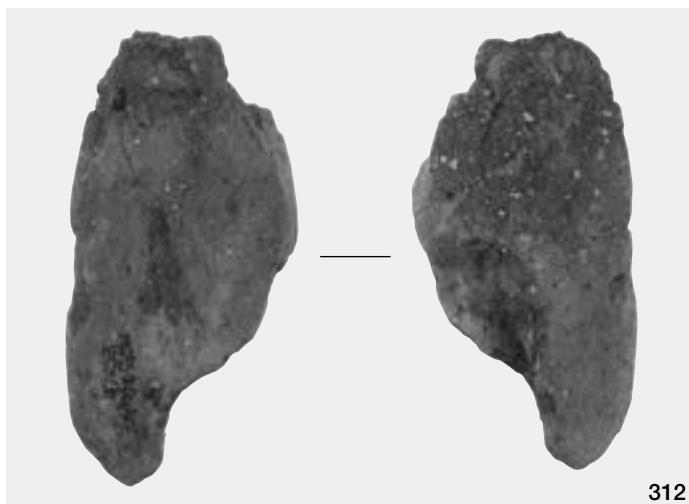
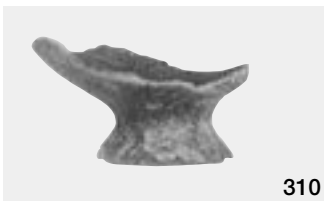
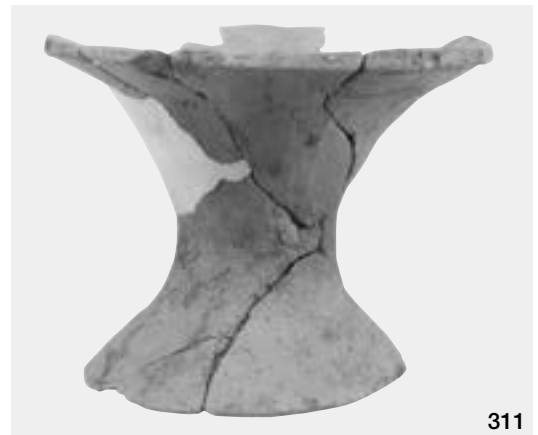
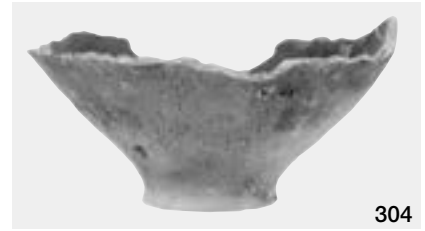
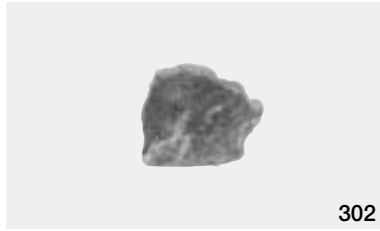


300



301

PL.46 纏向遺跡第42次調査



302～311 土坑2 312 溝3 313 落ち込み1上層 314 B区ピット内 (S=1/3, 312～314は1/1)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	まきむくいせきはくつちょうさほうこくしょ				
書 名	纏向遺跡発掘調査報告書				
副 書 名	巻野内坂田地区における調査報告				
巻 次					
シ リ ー ズ 名	桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書				
シ リ ー ズ 番 号	第28集				
著 者 名	橋本輝彦・橋爪朝子・奥田尚・豊福恵子				
編 集 者	橋本輝彦				
編 集 機 関	桜井市教育委員会文化財課				
所 在 地	〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2 TEL0744-42-6005				
発 行 年 月 日	2007年 3 月30日				
所 収 遺 跡 名	纏向遺跡				
所 在 地	奈良県桜井市大字巻野内180番地				
コ ー ド	市町村 292061				
遺 跡 番 号	奈良県遺跡地図 11-D-486				
北 緯	34° 32' 38"				
東 経	135° 50' 47"				
調 査 機 関	1985年 1 月16日～1985年 3 月 5 日				
調 査 面 積	46.2㎡				
調 査 原 因	農業用倉庫建築に伴う事前発掘調査				
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
纏向遺跡	集落	古墳時代	溝・柱穴・土坑・ 落ち込み	古式土師器・形 象埴輪	布留1式期に属する多量の 古式土師器と鶏形埴輪や冠 帽形埴輪・朝顔形埴輪が出 土。

桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第28集

奈良県桜井市

纏向遺跡発掘調査報告書

－巻野内坂田地区における調査報告－

発行 桜井市教育委員会
文化財課

〒633-0074 奈良県桜井市芝58番地の2

TEL 0744-42-6005

FAX 0744-42-1366

年月日 平成19年3月30日

印刷 株式会社明新社
〒630-8141 奈良市南京終町3-464

